大川塾に於ける 大川周明 訓話集

山本 哲朗

大川塾に於ける大川周明 訓話集

山本 哲朗

揺籃社

9784897083438

1920023020009

ISBN978-4-89708-343-8
C0023 ¥2000E

定価　本体 2000 円＋税

揺籃社

1．諸君の一番大切なことは「正直と親切」です。
　　これが一切の根本です。

2．外地に出たとき、
　　日本人とはかくの如きものであることを、
　　己の生活によって示さなければならない。

3．一人でもよい二人でもよい、
　　眞の魂の友だちを現地人の中に見つけることです。

大川塾に於ける

大川周明　訓話集

「正直と親切」これが一切の根本です。これが完全にできれば大人物です。
無試験、無競争。できるだけの事をやればよい。自分を研け。
己の生活によって、日本人はかくなるものであることを示しなさい。
一人でも、二人でも、魂と魂を結ぶ友をつくればよい。

詔書

太平洋戦争　開戦の詔勅（米英両国に対する宣戦の詔書）

〈現代語訳文〉

神々のご加護を保有し、万世一系の皇位を継ぐ大日本帝国天皇は、忠実で勇敢な汝ら臣民にはっきりと示す。

私はここに、米国及び英国に対して宣戦を布告する。私の陸海軍将兵は、全力を奮って交戦に従事し、私のすべての政府関係者はつとめに励んで職務に身をささげ、私の国民はおのおのその本分をつくし、一億の心をひとつにして国家の総力を挙げこの戦争の目的を達成するために手ちがいのないようにせよ。

そもそも、東アジアの安定を確保して、世界の平和に寄与する事は、大いなる明治天皇と、その偉大さを受け継がれた大正天皇が構想されたことで、遠大なはかりごととして、私が常に心がけている事である。そして、各国との交流を篤くし、万国の共栄の喜びをともにすることは、帝国の外交の要としているところである。今や、不幸にして、米英両国と争いを開始するにいたった。

まことにやむをえない事態となった。このような事態は、私の本意ではない。中華民国政府は、以前より我が帝国の真意を理解せず、みだりに闘争を起こし、東アジアの平和を乱し、ついに帝国に武器をとらせる事態にいたらしめ、もう四年以上経過している。

さいわいに国民政府は南京政府に新たに変わった。帝国はこの政府と、善隣の誼（よしみ）を結び、ともに提携するようになったが、重慶に残存する蒋介石の政権は、米英の庇護を当てにし、兄弟である南京政府と、いまだに相互のせめぎあう姿勢を改めない。米英両国は、残存する蒋介石政権を支援し、東アジアの混乱を助長し、平和の美名にかくれて、東洋を征服する非道な野望をたくましくしている。

あまつさえ、くみする国々を誘い、帝国の周辺において、軍備を増強し、わが国に挑戦し、更に帝国の平和的通商にあらゆる妨害を与へ、ついには意図的に経済断行をして、帝国の生存に重大なる脅威を加えている。

私は政府に事態を平和の裡（うち）に解決させようとし、長い間、忍耐してきたが、米英は、少しも互いに譲り合う精神がなく、むやみに事態の解決を遅らせようとし、その間にもますます、経済上・軍事上の脅威を増大し続け、それによって我が国を屈服させようとしている。

このような事態がこのまま続けば、東アジアの安定に関して我が帝国がはらってきた積年の努力は、ことごとく水の泡となり、帝国の存立も、まさに危機に瀕することになる。ことここに至っては、我が帝国は今や、自存と自衛の為に、決然と立上がり、一切の障害を破砕する以外にない。

皇祖皇宗の神霊をいただき、私は、汝ら国民の忠誠と武勇を信頼し、祖先の遺業を押し広め、すみやかに禍根をとり除き、東アジアに永遠の平和を確立し、それによって帝国の光栄の保全を期すものである。

御　名　御　璽

昭和十六年十二月八日

太平洋戦争　終戦の詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ収拾セムト欲シ茲（ここ）ニ忠良ナル爾（なんじ）臣民ニ告ク朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々（そもそも）帝国臣民ノ康寧ヲ図リ万邦共栄ノ楽ヲ偕（とも）ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々（けんけん）措カサル所曩（さき）ニ米英二国ニ宣戦セル所以（ゆえん）モ亦（また）実ニ帝国ノ自存ト東亜ノ安定トヲ庶幾（しょき）スルニ出テ他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固（もと）ヨリ朕カ志ニアラス然（しか）ルニ交戦已（すで）ニ四歳ヲ閲（けみ）シ朕カ陸海将兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ励精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之（しかのみならず）敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜（むこ）ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戦ヲ継続セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延（ひい）テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯（かく）ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子（せきし）ヲ保シ皇祖皇宗ノ神霊ニ謝セムヤ是レ朕カ帝国政府ヲシテ共同宣言ニ応セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃（たお）レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内（ごだい）為ニ裂ク且（かつ）戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念（しんねん）スル所ナリ惟フニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情（ちゅうじょう）モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨（おもむ）ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚（しんい）シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若（も）シ夫（そ）レ情ノ激スル所濫（みだり）ニ事端ヲ滋（しげ）クシ或ハ同胞排擠（はいせい）互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク挙国一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤（あつ）クシ志操ヲ鞏（かた）クシ誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克（よ）ク朕カ意ヲ体セヨ

御　名　御　璽

昭和二十年八月十四日

各国務大臣副署

恩師　大川先生

まえがき

大川先生の太平洋戦争は、

『冥土の旅の一里塚　目出たくもなし　目出たくもなし』で始まり、

『夏の日は照り輝けど負けいくさ』で終わる。

八月十五日の日記には『わが四十年の興亜の努力も水泡に帰す』と書かれている。

大川先生の「四十年興亜の努力」は、次の三大事業に集中されると見ることができるであろう。

第一は大川塾

大東亜精神は学者の構想によって生れず、大東亜建設を生命とする戦士の行動の中に孕まれ成長をとげていく。大川塾は復興亜細亜の実践者、掛け橋となる卒業生を毎年二十名、計八十名を南方に送った。

第二には日中和平工作

日本は東洋の平和と繁栄を確保する使命と責任を有する。

先生は満鉄に入社し、東洋の平和は満洲にあり、支那にありと、張学良とも肝胆相照らし、東條の組閣一年前には浙江財閥にまで和平の手掛りをのばしていた。

第三には太平洋戦争回避工作

先生の、米国資本（石油）と日本の技術をもって支那、東アジアを開発する太平洋構想は、アメリカからガソリン六〇万バーレルの対日輸出許可を得るまでに進行した。

そのバーターとして、支那が市場を独占するウォルフラム鉱一千トンを請けた。そのウォルフラムは支那の産業を開発し、日米支による太平洋の平和の礎となる筈であった。

先生は、古来絶無の大理想家、そして実践家である。正に白色・有色の世界歴史を変える鴻鵠の大業、燕雀の考えも付かない大業がその緒に就いた時に、〝真珠湾〟である。

一九四五年八月十五日、地球上寸土の残りもなく白人によって征服された。

そして、この日から白人衰退史が始まり、同時にその日から有色人興隆の歴史が始まる。

東京裁判

先生は『植民帝国、これ実に欧羅巴にとりて致死の罪悪である』と、フランスの一哲人を紹介している。『この呵責を脱せんとするならば、その隷属の民を解放せねばならぬ』と。

歴史は勝者によって綴られる。

二十世紀前半の勝者は白人の世界帝国、後半は四百年征服されてきた有色民族の勝利である。

見よ。四百年の搾取・人道蹂躙の世界は僅か五十年で自由平和の世界に取り戻されたのである。

太平洋の小礁にまで独立の旗がはためいている。

勝者敗者のいずれの歴史にも現れずとも、第二次世界大戦の砲火の第一線に身命を曝した復興アジアを生命とする戦士たちの記録を、ここに残すものである。

平成二十六年　七月　三十一日

大川塾　第二期生　山本哲朗

目次

太平洋戦争　開戦の詔勅・太平洋戦争　終戦の詔書
まえがき ……VI
大川塾　目的並びにモットー ……X
第一章　大川周明　訓話集
一、大川先生訓話 ……1
二、寮長・来賓訓話 ……15
三、大川・ヴェーダ・スクール ……36
四、大川・イスラム・スクール ……50
第二章　大川先生の太平洋平和構想
一、対支和平工作　満州独立・浙江財閥工作 ……60
二、対米戦争回避工作　汎太平洋通商航海会社 ……74
第三章　みんなみ秘話
一、「みんなみ」 ……82
二、軍国の母　五題 ……148
三、みんなみ歌集・瑞光寮歌集・鎮魂録 ……158
第四章　太平洋戦争への道
一、アメリカの太平洋進出 ……174
1. 膨張の宿命　マニフェスト・デスティニー
2. アメリカ＝スペイン戦争　アメリカの極東進出
3. ワシントン主力艦制限条約　太平洋の覇権争い
二、日本の太平洋進出 ……192
1. 開国日本・日本の目覚め
2. 日露戦争・アジアの目覚め
3. 日中戦争・中国の目覚め
三、ロシアの太平洋進出 ……223
1. シベリア征服　ウラディボストーク・東方を支配せよ
2. 中央アジア征服　カスピスコエ モレ・カスピ海を支配せよ
3. カフカズ征服　チェルノエ モレ・黒海を支配せよ
あとがき ……248

大川塾　目的並びにモットー

東亞經濟調査局附屬研究所
所長　大川周明

目的　將來日本ノ躍進、發展ニ備フル爲海外各地ニ派遣シ、滿拾年間當研究所ノ指定スル公私機關ニ勤務シツヽ、該地ノ政治、經濟及ビ諸般の事情ヲ調査、研究シ當研究所ニ定時報告ヲ提出セシメ、且一旦緩急アレバ必要ナル公務ニ服セシムル目的ヲ以テ青年ヲ訓育ス。

給與等ニ關スル要項抽出

一、經費　一切本所支辨ノコト
一、修業年限　二ヶ年間
一、修業後　海外各地ニ於テ當研究所指定ノ公私機關ニ勤務セシム
一、待遇及保證　尚十個年間支障ナク所定ノ任務ニ服シ且引續キ現地ニ留マリ、事業ニ着手セントスル者ニハ資金トシテ金壹萬圓也以内ノ補助ヲ與フ。

以上

モットー

一、諸君の一番大切なことは「正直と親切」です。これが一切の根本です。
二、外地に出たとき、日本人とはかくの如きものであることを、己の生活によって示さなければならない。
三、一人でもよい二人でもよい、眞の魂の友だちを現地人の中に見つけることです。

第一章　大川周明 訓話集

一、大川先生 訓話

「正直とは、天・人・己を欺かざること」

昭和十四年（一九三九年）

七月八日（土）

諸君は外国に行っても、決して大きな仕事をする必要はない。そんな表面の事よりも、ただ諸君が、その行く先々の国で、真に魂と魂で結ぶ友を作ればよい。それが何よりも国家に対する御奉公である。

九月七日（木）

東洋と西洋は、各々その歩むべき道を歩みつくした。来るべき日に東西統一のために、東西を代表する最強の一国ずつが世界の桧舞台で戦うであろう。

（全集第二巻「欧羅巴・亜細亜・日本」）

十月三〇日（月）

眼前一尺に書を繙いても、眼のみで読み、胸だけで感じても駄目である。表面的な読書ではなく、書物に対して魂を打込んで、愉快な境地にならなければ、効はない。

永遠の絶対的な世界平和の確立は、近い将来に実現する望みはないが、われわれはその実現を信じ、その実現に向って懸命の努力をするだけである。戦いは常に平和の範囲を拡大してきたし、今後も拡大して行くものである。

十二月八日（金）**（タイ国赴任一期生送別会にて）**

二年間の寮生活は、武道で言えば、その型を学ぶ如きもので、それに実をなし、真に美わしい果を結ばせるのは、その後の絶えざる努力にある。二年間に体得せる根本精神をもって、凡ゆる境遇に正しく処し、種々の仕事に専念して、その中から現実に深く触れた真の調査報告をしてもらいたい。

昭和十五年（一九四〇年）

一月十一日（木）

対支、対南洋の甚しい認識の不足、調査の欠陥等、内外政策の行詰りによる日本の大難局を克服して、一大飛躍を期すべき年である。道きわまれば即ち通ずで、必ずや世界史的大業を達成するであろう。

二月八日（木）　目下工作中の大事業について（78頁記載）

四月一八日（木）　支那事変解決の道について（63頁記載）

四月二六日（金）**（第一期生卒業式にて）**

時局は正に世界新秩序建設の時であり、現在日本がなさねばならぬことは、

第一に支那事変の解決

第二に国内不安の除去

第三に第二次世界大戦への善処である。

その一つを欠けば日本は興廃の岐路に立つのであり、実に非常の時である。

諸君は南方政策の礎として、任地の研究調査に、日本の眼・耳・手足となると共に、日本人として日本の真の姿を南方民族に知らしめるべき魂の実践者たらねばならぬ。

五月一日（水）**（第三期生入所式にて）**

研究所の目的は二つあり。一つは調査報告、二つは日々の生活を通じて現地の人に対し、日本人及び日本の姿を無言のうちに明瞭に示すことである。

「正直と親切」がモットーであり、これが完全にできれば大人物である。

昭和十六年（一九四一年）

四月二六日（土）**（第二期生卒業式にて）**

諸君は二ヶ年の修業を了へて卒業することになった。併し乍ら此の卒業は普通の学校の所謂卒業とは異り、二ヶ年の寮生活は単に将来のための基礎を養ったに過ぎない。これからが諸君の

仕事の第一歩であるから、此の卒業式は寧ろ始業式である。従って茲で心を弛めたら、折角二ヶ年の鍛錬も代無しになる。人生とは坂の上に荷車を押し上げる様なもので、一時でも心を弛めたなら、車は逆戻りして了ふ。此点十分に気を付けて欲しい。やがて諸君はこの懐かしい日本を後に遠く離れて任地へ赴くのであるが、今迄も度々云へる如く、諸君の任務は一面に於て各任地の綿密なる調査研究を進めて、日本のアジア経綸、即八紘一宇の理想実現に寄与すると同時に、他面に於ては、日本人とは斯くの如きものなりといふことを、諸君の日常の行動によって、アジア諸民族に知らしめることである。

それには**第一に諸君は正直でなければならぬ**。正直とは己を欺かず、人を欺かず、天を欺かざることである。**第二は親切でなければならぬ**。親切とは誠実と慈愛を以て人に接することである。この二つを行ひ得たならば、諸君は日本人としての真面目を発揮し得ること間違ひない。

諸君は入所した当時に比ぶれば身も心も見違へる程立派になった。今後は故郷否母国を後に殆んど日本人の居らぬ異郷の地で活躍するのであるが、若し心淋しき時があったら此の瑞光寮に思ひを馳せよ。そうすれば諸君の健闘を祈りつゝ孜々として勉励している同志が居る。

外地赴任後は一ヶ年間、日記体で行動を報告し、それによって当人の趣味才能を判断し、その後の調査研究の方向を指令することとする。

とかく緊張した生活の後には、反動的に精神に弛みを来し怠情になり勝ちのものである。諸君は一層心を緊めて、瑞光寮生活を尚二、三年間延長すれば、所謂習ひ性となって、苦労せずして規則正しい生活ができるやうになる。是非それ迄、鍛錬を続けて、日本の理想実現のために働いてもらいたい。

卒業晩餐会にて

高遠なる理想を抱く者は実務を怠り易い。口では天下を動かすやうな事を云って居るものに限って不勉強の者が多い。また当面の仕事に忠実に没頭しているものは理想を忘れ勝ちの傾向がある。横井小楠の詩に「不流功利、不流禅」とあるが、諸君は大体に於て高き理想と現実の努力とを兼ねて正しい方向に進んでいる。これは非常に心強いところである。

次に海外において十年間も生活をすることは、前にも云った通り容易なことではない。日本人の少ない地方に赴いて長い年月を暮すには、是非とも道楽又は趣味を持って居なければ寂寞を癒す事は出来ない。西洋人が多年の海外生活を苦にしないのは、その趣味をもつ研究によって寂寥を忘れるからである。

又一歩外地に渡れば人間の常として、今迄緊張しきった精神が弛緩し、ともすれば反動的に放縦な生活に陥り易い。諸君は此の欠点に陥ることなく、今後二年、三年と規律正しい生活が習癖になる迄続けなければならぬ。此点は特に注意しておく。

人の偉大さは決して地位にあるのではなく、実に魂又は心術の純不純によって定まるのである。大臣や大将になって当時の人にちやほやされても、死後は全く葬りさられることもあるし、一兵卒でも立派に国家に殉じたら靖国神社に祀られ、天皇陛下の御親拝を恭うするのである。一婦人でも夫によく奉仕すれば、その貞節は萬代の鑑となる。名誉とか功名とかは、こちらから追へば逃げ去るものであるし、誠の心を尽して居れば求めずやって来るものである。熊本の神風連に魂を鼓吹した林先生と云ふ偉い人は「骨を埋め、名を埋む」と云っている。諸君も此の覚悟で身も魂も此上とも鍛錬して、国家のため働かれん事を望む。

五月二日（金）（**第四期生入所式にて**）

研究所の学問の方針は、無試験、無競争。できるだけの事をやればよい。自分をみがけ。

（註）「日録」は、塾と共に焼失したため以下個人記録から。

八月十二日（火）（**タイ・仏印へ出発二期生に訓示**）

根本に於て日本に大いなる希望を抱かねばならない。日本国内でどんなことが起ろうとも、心を動かされることなく、任地に於て心配せずに働くこと。そして、二年間に学んだ語学は常に復習し続けること。与えられた仕事については、どんなことでも文句なしに従事すること。

体を大切にして、寮生活の緊張のあとのゆるみが出て生活をみだすことなく、規則正しい生活をして、その安否を報告すること。（倉橋記）

昭和十七年三月（一九四二年）

大東亜戦争は日本の敗北に終るだろう。そのことを肝に銘じ、それぞれの国々に一人でも多く変らぬ友情を保ち得る心の友を作るよう努力せよ。（武田信近を通じて現地卒業生へ。友田記）

昭和十八年（一九四三年）

年を非常時に迎う

非常の一年を送り、また非常の一歳を迎えて、国歩の艱難一層を加えつゝある。日本が米英撃滅を期する如く、米英もまた日本打倒を誓っている。緒戦に於ける日本の勝利は、世界戦史上の奇蹟であるとはいへ、竟に美事なる初大刀であり、未だ敵の骨髄を砕いて息の根を止め去るまでに至らない。いまや敵は傷つける猛獣の如く咆哮激怒して反撃を試みんとする。此戦には妥協がない。勝たずんば敗れるのみであり、それは決してあり得べからざることである。吾等は必ず勝たねばならぬ。勝つためには国民一人々々が必勝の覚悟を抱いて努力せねばならぬ。外より強く言われて動くに非ず、自ら進んで奮発せねばならぬ。国民一人の愛国心に火を点ずる者は宣伝と号令とに非ず、実に指導者の誠である。指導者の至誠に感応し、国民が必勝を目指して邁往するとき、如何なる敵も怖れるに足らぬ。吾等は勝利の最大なる力は、天の時、地の利にもまさる人の和にあることを、厳粛に反省し、且之を実行の上に現はさねばならぬ。（瑞光十四号）

四月一日（木）

出身出世を願うことなく、如何にして立派に死ぬるかを念願とせよ。

昭和十九年（一九四四年）

二月一一日（金）（紀元節）

戦争は艱難苛烈を加えつつあるが、今日ほど道義の振起を祈ること切なるものはない。他民族の中に入らば、その行動をもって、日本人の真面目を発揮して、自他をあざむかず至誠無私の親切をもって終始せよ。

七月八日（土）

空襲は、青年試練のためにまたとない好機である。人間の寿命は、生れた時すでに決まっているものである。死をおそれず泰然自若として緊迫なる祖国の危機をむかえよ。（サイパン玉砕）

昭和二十年（一九四五年）　五月二十四日（木）（第六期　松田啓造）

午前一時　空襲警報！　ザアーとバクダンの雨、光、炎、煙、何も見えない、息ができない。

「マツダ！御真影を出せ！」

天井から火の粉が降り、いまにも天井が落ちそうになって食堂に入れず、御真影を焼く。

翌朝ひとり所長宅に残り、御真影を焼いたことを謝ったが、焼跡に立てば、一物も残さず、余りにも見事な焼けっぷり。書類は灰になっても印字がはっきりと読め、ページも一ページずつ捲れそうにはっきり見えた。風で破れて散っていく、涙が流れた。

片岡先生が入口より焼跡に丁寧に一礼された。

寮長「みんな一所懸命消化に尽くしたな」

所長「写真のことはいい。皆が怪我がなかったのが何よりだ」

私は、諸先生方の親身と瑞光寮精神の一端を知った。

焼跡に焼夷弾の筒が百発以上も落ちていた。

大川先生から寮長へ指示

一、研究所罹災の件を満鉄及び外務省に報告すること。

一、荻野道場の生活に必要なるものに不足あらば、之が入手に努むること。

費用は糟谷先生より受取ること。

一、講義を願いたる諸先生に焼失を通知すること。

一、研究所及び東亜会関係者に小生の宅を自由に利用させること。

一、保険金受取の手続きをすること。但之は急ぐに及ばず。

一、罹災はかねがね覚悟の上にて、そのため荻野道場を借受けたることなれば、今更周章狼狽するに及ばず。跡始末一まず片付けば、道場生活を規則正しく行うべし。

菅　寮長殿

大川周明

昭和二十年八月十五日（水）
晴暑。正午陛下親しくラジオにて詔勅を放送し給ふ。英米ソ三国共同宣言受諾。
わが四十年の興亜の努力も水泡に帰す。四時帰村　（大川周明日記）

昭和二十年十月　研究所は閉鎖された。

拝啓　此度国情急変のため政府の要請により十月十五日を以て本研究所を解散閉鎖するの止むなき事態に立ち至り候事を御通知申上候
貴君は渡南以来邦国永遠の発展安泰の為に櫛風沐雨鋭意奮闘を続けられしにも不拘雄図を挫折せる其心情を察する時転た感慨無量に御座候
貴君は遠からず胸に憂憤を抱きて故山に復員せらるゝことゝ相成候が復員後は本研究所に於て練磨せられし瑞光の輝きを弥が上にも発揮して日本復興のために精進せられんことを衷心より冀求する次第に御座候
尚本所解散に就て貴君の慰労金として金壱千五百円也を山本充興殿宛御送金の上保管方依頼申上置候間御受納被下度候　敬具
昭和二十年十月十五日
東亜経済調査局附属研究所
所長　大川周明㊞
山本哲朗殿

（註）東亜経済調査局は、一九〇七年、南満洲鉄道株式会社調査部として設立された。

私はその頃、バンコクの抑留所に居た。父は研究所にこんな返事を送っている。

粛啓　陳者今般御鄭重なる御状に接し詢に難有奉深謝候這般国情急変に伴ひ由緒ある貴所使命重大なるに惜しくも解散のやむなきに至りたるは甚だ遺憾千万に奉存候　愚息哲朗事貴所先生各位の御懇篤なる御薫陶を辱ふし漸く一身を捧げて国家に微力を致す意思を固め発足したるのみにて聊も為す事なく突如挫折の悲運に際会せるは残念至極に御座候　只々今後は国情に順応し新生日本の建設の途に邁進し御厚恩の万一にも報る意図と被存候間　今一層御鞭撻御指導を賜り度偏に御願申上候　尚此度慰労金御恵与被下恂に難有拝受仕候　当人帰還の暁には御厚志の存する処特に申含めて伝達致候　敬具
昭和二十年十一月十五日
大川周明先生　机下
山本充興

私は昭和二十一年夏、なつかしい故国に帰った。目黒は焼野原。何ひとつ残っていなかった。

日誌・大川先生 談話（覚書）

西川寛生記

昭和二十九年（一九五四年）

一月十九日（火）晴

午後二時、上京された大川先生のもとに赴き、久し振りに先生の卓説と心境に接し得て感銘甚だ深し。その要旨を左記。

㈠ 敗戦によるマッカーサーへの屈服で、日本の歴史は一段落したと考える。今こそ真の日本の建設を行なうべきである。あえて言えば神武の時代よりもさらに古い国造りの本義に立つべきである。

㈡ 具体的な国造りの方法として、先ず農村の食糧増産を行ない、日本国民の自給自足を確保して、国民に自信をつける事が最も基礎的な行動とされる。そのために政治には無関係に組織を拡大し、『敬天・愛人・克己』の三綱領に則って農村を豊かにすべきである。

㈢ 西欧的思想は、すべてヒューマニズムを中心としており、ソ連の共産主義も欧米の資本主義も同根である。あえて言えばヒューマニズムの究極は当然共産主義思想に行くことになる。現在資本主義も実際には社会主義化しつつあることは明らかである。すなわちヒューマニズムは人間中心の思想であり、近代化すればするほど、神（キリスト教）からの離反となることは必至である。

㈣ 米・ソ共に産業主義機構の最たるものであり、資本が個人にあるか、国家にあるかの相違のみで、その機構は同じである。従って世界に資源と領土の無限の獲得を目指して闘争が絶えない。もしそれを止めれば、あたかもペダルを踏んでいなければ自転車が倒れる如く、その機構は崩壊することになる。世界中で七、八つの国々が対立抗争しているならよいが、米・ソ二つの国しかない現状では、その両国が決戦すれば現在の文明は破壊されて終るほかはない。そして新たなるものとしてアジアの文化が必らず世界に光を放つことになる。そのために日本的に、真の日本の国造りが必要である。

㈤ 民族的抵抗と言うが、日本においては、フランス風のレジスタンスを云々しても無意味である。かつてインドでガンディーが出て行なったように、最初英国が馬鹿にしていたものが見事に成功した例の如く、日本でも最も日本的な方法で行わねば駄目で、一切の西欧的な思想を止めるべきである。例えば「和して同せず」の精神が大切である。西欧の主義・思想は、すべて対立抗争を前提とした「同」であって、東洋的な「和」の精神ではない。かの「自由・平等・友愛」の、「平等」も西欧的には「同等」とすべきもので、決して「平等」ではない。聖徳太子がもしあの時代に「和」の立場に立たれなかったら、日本の歴史はもっと混乱を極めたことであろう。

㈥ 日本的レジスタンスの最たる例としては、昨年行なわれた伊勢神宮の遷宮祭において見ることができる。すなわち占領軍が最も力を入れて破壊せんとしたのは、神社と皇室であった。そして現在もその同じ方針が米国側とこれに追従する日本政府によって続けられているにもかかわらず、馬鹿にされながらも僅か八年間で伊勢神宮の伝統を復活した日本民族の平和的なレジスタンスこそ尊ぶべきものと言える。

(七) かつて我々が考えた如く、日本の革新を成就して、満洲との経済圏を形成し、確固たる地歩を築いていたら、日本の繁栄はさらに百年ほど続いていたかも知れないが、その方途が西欧的であったとしたら、結果は今と同じで、破滅に終ったことであろう。今日それが百年早くやってきただけのことである。

(八) 一切の西欧的なものは、日本では半廻転しかせず、西欧においてなら当然全廻転を円滑に行なうべきもの、例えば議会制度であれ、社会保障であれ、また民主主義にしても、すべて日本では生半可で終ってしまう。その差異こそが問題である。やはり日本においては日本的な行き方、在り方が必要である。

(九) 天皇の問題にしても、日本では、宗教的なものと政治的・権力的なものを別個にして考えるというようなことは無意味である。親に対する子の感情そのままの、自然なものとしての行動であり、制度が生れなければならず、それを理屈で分析したり、判断したりすることは、その出発点において誤っているものと言える。歴史上で見れば、頼朝にしても、尊氏にしても、天皇に対しては藤原氏の場合よりも、もっと自然な気持を持っていた。真の天皇政治は藤原氏以前にしか存在しない。人情と政治とは別のもので、尊氏なども止むに止まれぬ立場で、泣いて反逆行為を行なったとも言える。御醍醐帝の御事績は、政治的に見ればあまり感心できないものである。政治とはそういうものなのである。

(十) ここ当分の間、少なくとも一九六〇年代までは世界的大戦争は起らないと思われるから、その間に日本の土台を強固に構築せねばならない。そのために尽力する決意である。

以上

二、寮長・来賓 訓話

「来たりて、我が師を見よ」

昭和十四年（一九三九年）

三月二二日（水）**山岸敬明 寮長**

海外に派遣される任務を負う寮生としては、特に海外事情の学習に一層の努力をするよう心掛けるべきで、国内の政治問題を論ずることは慎むべきである。

三月二八日（火）**菅 勤 副寮長**

寮生はもっと明朗溌剌たれ。

五月一日（月）**第二期生入所**

授業内容（一週間）。英語八時間、経済原論（英語原書）二時間、国際事情一時間、経済（世界）地理二時間、現代亜細亜（大川所長の講義）二時間、調査（情報）要領（参謀本部より講師）一時間、国史（寮長講義）二時間、語学班別外国語六時間。（英語および国史を除き授業は一・二期共習）

日課（午前）自習 八・〇〇―八・五〇　授業 九・〇〇―十一・五〇

（午後）授業 十三・〇〇―十四・五〇　体育 十五・〇〇―十六・三〇

五月八日（月）**椋木瑳磨太 副寮長**

中国大陸の従軍談あり。

夕まぐれ　野良にふと見ゆ　火の燃ゆる
　　斃れし人を焼くと言うなり
夕まぐれ　命を伝えて帰るさに
　　野に唯一人　もろこしを焼く

目黒断想　　副寮長　椋木 瑳磨太

私の入寮間もなく天長節頃であったか、颯爽として二期生が入ってきた。当日、一期生、二期生が一名ずつ相対して、一期生からそれぞれに衣服類一式を二期生に渡した厳粛な瞬間は今も眼底に残る。

眼光胸底を透視するかの如き哲人・大川先生のことだまによる薫陶を受ける機会を得たことは幸せの一つであったが、眉目秀でたる純真明眸の若き同志諸君との生活で自ら志操の醇化を受けたことは有難いことであった。

せめて意志の鍛練と肉体の強化にもと、戦場の体験や戦闘教練や、木刀斬り込み教練、斬撃教練で二期生の池田が昏倒したときは、腹切りものだと覚悟したことであった。厳冬夜来、水風呂に入れたり、暑熱藪蚊の乱舞する廊下に座禅させたり、深夜非常呼集して多摩川、川崎方面に行軍したり、随分と乱暴なことをしたが、中止の命令も注意を受けたことはなかったし、生徒諸君がいやな顔一つ見せず、ついて来てくれたことは有難かった。

当時、支那事変のさ中であった。棟田博の戦記物「分隊長の手記」を輪読したのも、東宝劇場に少女歌劇見物としゃれ込んだのも、寮生活に一点の潤いを加えたい気持ちであった。

私の最も苦心したことは、大川先生から、エール大学教授エズワーズ・ハンチントン博士著「気候と文明」を渡され、セミナーを命令されたことであった。

神田の古本屋を渡り歩き、気象、天体、地質、湖沼、生物、考古、西洋史、東洋史、日本史、哲学など、手当たり次第に買い漁って乱読したが、一夜漬けの俄勉強など通じる筈がない。生徒諸君が先へ先へと進むのには聊か困却した。

ハンチントンは太陽の黒点現象によるクライメート・ゾーンが人類文明を作用するもので、アングロ・サクソンは一流文明人、日本人は第三流にランクされる。この点大いに反駁を要するもので、「神国日本」の優位性とその溯源を解明すべく力んだことであった。

五月十二日（金）**山岸 寮長**

月五円の手当を支給しているが、その他に家族や外部の人からの金銭を受取ることを禁ずる。五円の手当も同胞の真心の結晶から給せられるもの故、無駄にせぬよう。生活における鍛錬と修業を怠って、質実剛健の風を失うなら、世間一般の学生と異らず、将来のお役に立つべくもない。

六月二二日（木）**山岸 寮長**

血判は上御一人に対し奉り、身命を捧げる絶体的な誓いとしてならばいざしらず、みだりに私的な場合に行なうべきものではない。封建的な誤れる私情は断つべきである。

（中島信一 主事に贈った寄せ書の血判について）

八月十七日（木）**山口直人 主事**　（元陸軍航空士官学校長・陸軍少将）

純真潔白の心をもって同志相たずさえて、向上前進を期すべし。

秋高し

明月皎々、机に向いて聖賢と語り烈士と談ず。

実に秋は皇国男子の心身を鍛錬すべき好機なり。

諸士!! 緊褌一番、己の本分に向いて益々活躍伸張せられんことを!!

昭和十五年（一九四〇年）

一月十六日（火）**山口 主事**

ノモンハン事件における皇軍敗退の虚報が拡がっているが、外国の宣伝謀略に乗ぜられないことが必要である。現在の機械化戦闘にあっては犠牲が多くなることは或る程度止むを得ないのであり、覚悟せねばならない問題である。

また最近物資の欠乏についても種々不満の声があるが、日支事変後四年になり、幾分物不足を生ずるのは当然のことであり、弱音を吐くようなことがあってはならない。

三月十九日（火）**高瀬侍郎 主事（ベルギー大使へ赴任）**

諸君は励んだその筋を一筋に歩み、所期の目的を達成されんことを望む。

三月三十日（土）**緒形誠一 副寮長**

大川先生を父と思い同志を信頼し、各自の長所を生かして南アジアの地に大木となって伸びよ。

菅　寮長 訓話録（編集幹事記）

神前訓話（昭和一四～一五年）より

『使命の自覚』「われらは何処にも見ることのできない、また誰にも求めることのできない、遠大な理想の実現、すなわち南方アジア経綸を、その双肩に担うものであり、新しい時代を開くべき天業の一翼に奉仕する使命を有するものである。この尊い使命を自覚し、これを体現せねばならない。その誇りに徹して生きれば、日常の進退挙措おのずから正しく、強く、朗らかになり、前途に希望の光を見ながら進むことができるのである。」

『責任観念』「われらは天下第一等の人物たらんことを期している。すなわち天下第一等の人物とは、一面からすれば最も責任観念の強い人であり、自己の行動所業に絶対の自信を持つものである。天下の憂事にあえば己の足らざるを責め、己一人ある限り、必ずや天下を安泰たらしめんとの信念に立った責任感である。かの大楠公が後醍醐帝に奏上した、あの精神である。寮生はいずれ祖国を出て南方アジアに赴くのであるが、我一人ある限り、安心されたしと、各地において絶対的責任を持つ人物にならねばならない。」

『艱難の試練』「天は大任を与えるとき、必ずその人物に先ず艱難を下して試練とする。その試練に耐えた者のみが大事を成すのである。志ある士は進んでその艱難の道を歩み、喜んで試練を受けるべきで、さもなければ最後に人物とはなり得ない。寮生将来の途は決して平坦ではなく、困苦辛酸の多いことを覚悟し、それを克服すべきである。」

『鍛錬』「現今の日本刀と古来の日本刀を比べると、一見その形は同じであるが、実戦に用いた場合、到底同日に語り得ない差がある。現在の刀は機械によって一日何本でも作り上げる大量生産の日本刀であるが、古来の名刀は刀匠が心魂をこめて、一本一本を、火と水によって鍛えに鍛えて作り上げたもので、正に魂が宿っている。この百千の錬磨が、世界に誇るわが日本刀を生むのである。すなわち真に第一等の人物たらんとする者は、常に自ら進んで積極的に鍛錬を期すべきである。」

『礼儀』「かって藤田東湖先生は、論語にある〝四十にして惑わず〟について、その境に入る根本は礼にありと悟ったと言うが、礼儀を重んじ、日常その実践を志すことこそ、すべての行動の基礎となるものである。礼とは恭敬和親であり、同志の間は和をもって尊しとなすことは当然であるが、それは日々の動作所業を礼に則って水の流れる如く振舞うよう、一層修行に励まねばならない。たとえ至難の事と思えても、それなくしては実社会で、また外国において役に立つ人間にはなれないのである。」

『疑と信』「近代思想の底に流れる一要素として、懐疑と批判ということがある。それは善か悪か、是か非か、善はこれを取り、悪はこれを捨てるという、その事物、その思想の善悪是非を疑い、これを批判することが根底をなしている。〝我思う故に我有り〟の近世懐疑主義に発したものに他ならない。この思想は、わが日本の古来より伝える、信ずるという教えとは根本的に異なるものである。かつて釈迦もキリストもマホメットも、先哲先賢はただ信ずることを説いている。われらはこの宇宙の唯一絶対なる神を信じ、その中に生きて、一切を没入融合するのでなければならぬ。」

『学問の道』「古来学問の道に二つある。一つは釈迦が人生観を確立せんとして、総てを捨て去って悟道に達した如く、先ず自己において真の悟りを体得した後、世の人々を教え導かんとするものであり、今一つは、かの吉田松陰先生のように、現在の国家社会を真剣に憂え、切実な問題として解決に当ることを急務と考え、その中に自らの修行も含めて生きる道である。もちろん両者共にこの世界に理想社会を建設せんとし、地上に天国を出現せしめるべく、己を空しくして努めたのであり、歩む道は違うが、その目指す処は一つである。われらは前者の如く一切をなげうってただ自己の修行のみに志すことは許されない。すなわち研究所にあっては真の研究生として学問に励み、寮生として生き切る事で修行をなすべきであり、その生活の中にあって自己を最も正しく生かすべきものである。」

『注意心』「昔の武道家達は、よく飯を焚いている時、水を汲んでいる時など、師が後ろから打ちすえる。隙があると叱責するというような苦しい修練を積んだものである。これを武士道では覚悟と言って、注意心を怠らない修業を最も大切なものとしている。それには慎みが肝要とされて、如何なる場合にも決して騒がず、悠々として臨機応変し得る者を、覚悟のある人とした。われらもまた日常細心の注意を払って生活を充実せしめ、何時如何なるときにも泰然自若たる行動をなすべきである。徒らにただ日を送るのではなく、八方注意して何かを得ながら鍛錬を重ねて行かねばならない。たとえば炊事に当って茶碗一つ割ることのないよう注意心を働かせることが必要である。注意心とは要するに、〝まこと〟の有無の表れである。そして、〝まこと〟は親切をもって友人・恩師・両親・国家に対することである。心からそれらのことを思って行なう心である。」

わが瑞光寮時代　　寮長　菅　勤

講師の人選は先生の最も苦心せられたところで、一流専門の学者、教育家を多く招聘された。その教師陣や授業内容から見ても、当時の日本で稀有のものであったろう。先生は常に与えうる最高のものを惜しみなく与えられた。

大川先生は、「近世ヨーロッパ植民史」「アジア建設者」また「中庸」などを講ぜられたが、これらは後に寮生の外地における実務奉公、調査研究の根底なるものであった。

寮の教育は、家庭・私塾・学校・軍隊などの教育を打って一丸とし、貫ぬくに「使命を同じくする同志観」をもってする如き、独自のものが、意識的無意識のうちに形成された。

「一人でも二人でもよい。本当の友だちを現地人の中に見つけることです」

「たとえ劣機にても自己の本然を尽すは巧みに他の本然に倣うに優る」と、よく言われた。

外地に在る寮生の無上の楽しみは、魂の故郷たる寮生活の思出話であり、「来りて、我が師を見よ」の誇りは彼らの心底に躍動していた。

大川先生は、所長室における孜々倦まざる読書の人であった。寮生の読書には特に意を用いられ、自分の蔵書全部を図書室に備えつけられて、寮生の自由閲覧を許す一方、希望図書の申請をうけては、良き書はどしどし購入された。また先生は非常に話を好まれ、質問を喜ばれた。殊に人の善事善行を感激をもって語られることが多かった。

「実にえらいものです」と力強い一句がしばしば先生の口から語られることが多かった。

とまれ先生は寮生を我が子の如く愛され、年少未熟の青年たちを自らの同志として遇された。そして満幅の期待を寮生に寄せられ、その前途を嘱望された。

「せめて十年早くこの仕事を始めたかった」と先生はしばしば述懐せられた。

願わくは万世のため一心決定し
地上に天国を成就せんと期す

菅氏の曽祖父は、奈良県天理市の石山（いそのかみ）神宮（拝殿は国宝）大宮司兼大講義を勤めた菅政友。神剣「七枝刀（シチシトウ）」（日本書紀に百済から貢上された『ななさやのたち』・国宝）の発掘をなされた方。太刀は長さ75センチ、両面61字は金線象嵌、日本金石文の最古に属す。

昭和十八年（一九四三年）

所　感　　児玉正志 寮長

この寮の使命を思ふと、粛然たる気持ちになる。此れは、一年や二年の問題ではない。真にお互ひ一生の問題である。

椎の木繁る目黒の丘で、太鼓と共に起き臥しする事実は、実に「情」一筋の絆である。

吾々は先ず幼子の如く裸にならねばならない。お互ひが裸でお互ひの背中を流し合ふ処に真の切磋琢磨はある。

一生の苦楽を分つ友として、真剣に叩き合い、匡正し合ふ処に信が生れる。

同じ竈の飯を食べる何の変迭もない反復の中にお互ひの血は結ばれるのである。ごまかしが

あってはならない。遠慮があってはならない。男一匹の丸出しである。歯車はその不完全故にがっしり組合ふことが出来るのである。

家君の下、克く兄たれ、克く弟たるべし。

時に親しさ故に、いさかひもあらう。血気に任せ不遜もあらう。矛盾もあらう。迷ひもあらう。然し全ては真情の叩き合ひで禊がれねばならない。一事一省毎にお互の情は深まり結ばれるのである。時到らば大鵬一搏九萬里、宇内を覆ふて天翔ける鵬雛の集ひ、よし吾等の気烽五大洲を呑むとも道は常に脚下にあり、椎ヶ丘、今一日一歩の研鑽に飛搏の礎はある。慈父の下、椎ヶ丘内起き臥しに全ての発源はある。

此の丘は先輩諸兄想ひ出の玉である。

曇らしてはならない。眄(ナガ)してはならない。

遠く熱下の兄等を想ひ、御健闘の一事、我等亦一段の「奮」を誓ふ。

所感　　児玉正志 寮長

刻下の痛恨事は、

一、自らは満腹して而も大衆に決戦を説き耐乏の倫理を説教する者の余りに多い事

一、実力と人格が仕事をせず、在り来りの地位や法規や惰性等が遅蒔で皮相な権力を行使している事

一、人の努力に寄りかかって戦争を済まそうと思ふ者が居たり、尽すべきを尽さずして神州不敗の信に酩酊する者の多き事

思うに寮の使命は、復興亜細亜を五体を以て画くにある。地下百尺に埋れて大御心を奉行するにある。

椎木立茂る丘に所長以下皇居を拝し奉るその一瞬のしじまに寮生活の全部がある。

時局の波瀾は勇躍して望みし処、吾人は大道本来を辯じて濶達自在大らかに全てを圧倒して脚下歩一歩の忠に驀進したいものである。

奉公謹誦　　国友一志 助手

一、日本人は忠節を尽すを本分とす

一、日本人は礼儀を正しくす

一、日本人は武勇を尚ぶ

一、日本人は信義を重んず

一、日本人は質素を旨とす

省みて愧ず奉公の誠至らさりしを　噫

魁けて寒梅散る日

昭和十九年（一九四四年）
四月十八日（火）　　**児玉正志 寮長**

ここを卒業しても、恩典は何もない。特別な資格を与えるところでもない。立身出世の足場にするところでもない。地下百尺の下座で大御心を行じてゆく捨身の心構えでなければ、ここはつとまらない。

この寮を家と思え。海外では、血のつながった兄弟のように助け合い励ましあって努力している。大川塾の魂を体得せよ。

第五期諸子に告ぐ　保々隆矣 寮長（満洲教育専門学校創始者）

大東亜戦争は独り皇国の興亡の岐るゝ大国難であるのみならず、有色人種が永遠に白人の鉄鞭下に奴隷として酷使せらるゝか否かの大戦争である。

世界史を繙けば明なる如く、白人文化が亜細亜の夫れを凌駕せし事跡は僅々十五、六世紀以降の事で、コロンブスやバスコダ＝ガマが新大陸を発見したり、又世界を一周し、航海が発達して来て居る内に、先ず英国に起った産業革命に因って、機械的大量生産が勃興し、蒸気汽船の発明に因って大いに通商を促進せし結果、未開人の富を到る処易々として掠奪した。而して其の後、踵を接して興隆した科学の発明に推進力を増大させ、此の地球上を白人の独舞台にして終った迄の話である。だから若し有色人種でも彼等に倣た科学を研究し、彼等を凌駕する努力さへすれば、

彼等を打倒し、数世紀以前の如く、逆に彼等に文明を与え、指導をなし、彼等を支配するに至る事も亦決して不能なことではない。否、歴史は正にかゝる時の到来を吾が日本に命じている。大東亜戦が「聖戦」と呼ばれるのも実は斯かる虐げられたる民族を吾人の力によって解放し、彼等に自由と光明を與へんとするからである。

諸子は二ヶ年間の蛍雪の勤勉と兵学校にも劣らぬ規律ある生活を営んで来た。身心共に完全に鍛錬されている。だが日本人の通弊は、ともすると環境が一変すると、折角の「修養」も「規律」も一朝にして崩壊することが間々ある。だから、今日の「卒業」は現地の「実際」といふ大学校の予備校を終了した迄の話である事を充分心奥から信じて貰いたい。現地が大学である以上、仮令、他の同僚が如何様の行動をするとも真の大学生たる諸子は、それらに感染せしめられるやうではならない。必ず現在の紀律、忍耐、寛恕、調和の美徳を発揮し、以て他の同胞を感化し、土民に敬仰せらるゝやうに努めて貰はねばならぬ。

大東亜戦争は独り前線の戦闘のみでなく、現地の土民の信頼感を獲得して初めて「聖戦」とも称し得る。而してこの信頼感は「郷に入っては郷に従ふ」ことから先ず始まる。対手の風俗習慣、宗教等を理解し、以て無用の悪感を招かぬ事が極めて大切である。過去における海外邦人は稍もすれば土民に嫌忌されがちで、此は主として此の点に理解がなく、徒らに日本流を振回す為である。我が風習が世界に稀らしい事の多いのも反省すべきである。

諸子は青年である。大きな夢を懐いている。この夢は美しい。だが一度現場につくと、諸子は諸子が予期していた以上の些々たる仕事を多分委ねられる。軍隊では兵卒、実業界、官界では最下層のことのみであろう。だから大抵の男は一、二年の内には倦怠し去勢された人物となってし

まふ。諸子は世の斯る滔々たる薄志弱行と撰を異にし、昂然として遙けき彼方の光を見失ってはならぬ。真の人物は必ずしも世上の位階や富貴と一致しない。真の「英雄」は大学などより出ない。英米蘭の東亜搾取は獣的であったけれど、彼等が数百年間能く傲然たり得た蔭にはそこに幾多の青年が精を傾け血を涸らして縁の下の力持をした事を見逃してはならぬ。吾等はラッフルスの名と共にこれら無名の青年を想起すべきである。古歌に歌っている。

むらさきの一本ゆえに武蔵野の
　花はみながら哀れとぞ見る

僅に一本のむらさきが咲き匂う為に千万無量と数えられる草々までもが人々になつかしがられる。

諸子は将軍にはなれない。学閥もない。だが野にさく百合の一本はソロモンの栄華に勝ると古の聖者も讃えていることを深く心に銘すべきである。

来賓訓話

「男子豈空しく生きんや」

昭和十三年（一九三八年）
七月二六日（火）　**武藤中佐**
初志貫徹に努めよ。

九月二十日（火）　**松井石根大将（前・中支派遣軍司令官）**
日本精神は私心をなくして上にまつらふ心と、私心をなくして下をいつくしむ心。

昭和十四年（一九三九年）
三月十一日（土）　**東條英機中将・航空統監**
東亜新秩序建設の大目標のために、われわれ日本人の一人一人が覚悟して、凡ゆる国際的困難を克服せねばならない。ソ聯の強大と米国の太平洋への進出に対抗する極東の制空権確保のために、わが国の空軍再建が現下の急務となっている。
今後わが国策の第一戦に立って心身共に困難な任務を負う研究生の諸君は、喜んで下積みになる心が必要である。舞台でも表面に出る主役よりも蔭で支える無名の役者こそ大切なのであるから、進んで縁の下の力持ちになってほしい。それが真の先駆者たるものの道である。

五月五日（金）　**河相情報部長（第二期生入所式にて）**

真の仏教は伽藍が尽く壊された時にこそ起るであろう。世に仏寺あり経典あるが故に、仏教はその真の姿を失っている。即ち総て与えられたものから一歩も出られず、向上をもたらさぬ死学問となっているからである。若き諸君は無限の可能性を前途に持っているのであり、自由独歩の境地がある。従来の形骸に束縛されることなく大成を期してほしい。

吉村中佐　熱し易く冷め易い日本人の欠点に陥ることなく、堅忍不拔不撓不屈の力を養って、功を焦らず事に当られたい。

六月二日（金）　**松岡洋右・前外相**

現下世界の列強は、わが日本を警戒している。問題は欧米の世界にではなく、白人に蹂躙された世界の弱小民族に対する問題である。今や世界大戦は必至の情勢であり、それは世界文化の破壊を意味する。今わが国で北守南進論を唱える者がいるが、全く馬鹿気ている。米国は中立を守っているが、今後半年か一年で、必ず参戦することになるであろう。日ソ戦は一年後に始まるかも知れない。世界の関ヶ原合戦は目前の間に迫っている。七十年前に吉田松陰先生が看破されたことが、現実のものになってきている。諸君は将来いかなる土地へ行っても、日本人として日本の歴史を忘れてはならない。それなくしては使命を果たすことはできない。日本の運命は最後は青年の力にかかっている。

六月二十七日（火）　**松井石根 大将**

日支事変はすでに武力においては勝負はついているが、蔣介石がなお我が国に対する戦を止めようとしないのは、日支両民族の思想的な相違の故である。すなわち、武力で征服しても最後は思想による勝利、わが皇道を以て支那に勝たねば、総てが無に帰してしまう。諸君は現実の支那大陸における事態に注目して、よくその真実を知り、将来海外における使命の遂行に生かしてもらいたい。日本精神に生きる修養を怠ってはならない。

七月八日（土）　**王氏**（所長の盟友）

大川所長が中国人 同道で来所。「言忠信　行篤敬」と題して講演。

十一月十八日（土）　**ラス・ビハリ・ボース氏（亡命インド人志士）**

我々が人間としてこの世に生れ出たからは、その生を最もよく社会のために善用すべきである。平凡な生活で一生を終えるのではなく、あえて難路を踏破する意気をもって進むべきで、おのが可能な最善を尽くして天意に委ねるのである。ガンジー氏のやり方はぬるい。今印度に英国が自治を与えると言っているが、自治こそ実にインドをいよいよ英国の奴隷化するものである。インドはあくまで純然たる独立をかち取らねばならない。

十一月二〇日（月）　**安部源基 警視総監**

われらは常に未完成品であることを思い、日常の反省を怠たるべからず。既成品、完成品であ

ると考えれば向上の終りである。万事にうぬぼれでない真の自信と自覚と責任をもって当るべし。それでなければ智あり技ありと言へども事を成すこと能わず。高等教育を受けた者が、それを受けない者より国民的自覚がないのは驚くべきもので、共産党の例は国民的自覚を失った故である。

十一月二一日（火）　**A・M・サハイ氏（インド国民会議派 日本代表）**

現在のインドが如何に英国の圧制下に呻吟しているか。インドは如何にして自由を失ったか。インドは戦に敗れたのではなく、英国の外交に欺瞞され、分割統治によって植民地化されたのである。必ずやインドは独立せねばならぬ。

十一月二五日（土）　**多田等観師**

（ラマ教研究のため一〇年余をチベットで修業した苦心の体験談）ソ聯の南下に対する英国のインド防衛政策におけるチベットの重要性と、大アジア環状ルートの民族的・宗教的連合論はアジア、世界の運命を決する。

昭和十五年（一九四〇年）（**第一期生卒業式**）

四月二六日（金）　**須磨情報部長**

日本の代表として立派に行動してほしい。また現地の生活にあっては、何か道楽をもつようにして、余裕ある生活をすべきである。

八月二四日（土）　**長　勇大佐**

魂の訓練により行と学の二道に励まれよ。胆は大に、心は小に、不退転の意気をもて。

昭和十六年（一九四一年）

二月一三日（木）　**柳下重武氏（椋木副寮長友人）**

「蒙古とチベットを結び仏教連盟をつくり、ソ連との緩衝地帯にする」　夢は砂漠をかけめぐる。

二月十七日（月）　**小林哲雄氏（アズハール大卒）**

「二、三年の間に医師を含む同志二、三十名を糾合してアラビアを渡り、オアシスに分屯して、二十年後に押し寄せてくる欧州勢力の波をくい止める。」　アラーの神よ、照覧あれ。

四月二〇日（日）　**茅原華山氏（国際事情）**

航海学。諸君は他日海外に赴かるる人であるから、一つ海上の話・船の話をして、諸君の前途を祝福したいと思ふ。

船海学の中にアストロノミアル・レコニングとデッド・レコニングとがある。前者は天測と訳し、昼は太陽により、夜は星辰によって船の地球上の位置を知るのである。ところが風雨の場合でなくとも、雲が暗幕を一天にかけた場合は、天測が出来ないから、デッド・レコニング即ち推測をやるのである。推測で我が船の地球上の位置を知るのである。

天測にせよ、推測にせよ、船長はわが船の地球上の位置を知らねば、安全に航海はできない。国家を船に譬える。よく日本丸々々々という。一国の首相とか政治家というものは、日本丸の船長であるから、常に日本国家の世界における位置を知らねばならぬ。

これは国家ばかりではない。人間自身がゲーテの言葉を借りて言へば「到着することなき未知の大海」を航海しつゝあるようなものである。諸君は自身を知らねばならぬ。「汝自身を知れ」ということである。

人間には天分といふものがある。己を知って、己の人生の位置を知って、その向こふところを定め、之に向って勇進邁往するのが理想人で、一千屯の船は一千屯の船として、一万屯の船は一万屯の船として、その最善を尽くさねばならぬのである。

政治家にしろ、経済家にしろ、個人にしろ、苟も事を為すには其人に力がなければならぬ。「蚍蜉（ヒフ）大樹を撼（ウゴ）かす、憫むべし力を量らず」で、力を量らずに勢に負（ソム）いては、結局骨折り損のくたびれ儲けである。人世の浪費である。

古人は「男子豈空しく死せんや」といった。一転語を下して「男子豈空しく生きんや」と言ひたい。各人その長所に応じてその生を尽くし己に在るものを尽くす。之を善く生きるといふのである。（雅叙園に招待され中華、コーヒーの味格別）

昭和二十年（一九四五年）（一月二五日、五期生五名、台湾赴任に当って）

井田正孝少佐・第十方面軍情報参謀

世にいう秘密戦業務を諸君には期待しない。今日の情勢、内地人全てが台湾を去らざるを得ない事態になるやも知れない。そのとき、あいつは良いやつであった。信頼できる人であったと台湾人に慕われるような立派な行動をしてほしい。至誠無私の生活で台湾人と融和してほしい。

大川塾生　派遣表（一九四五年）

	入学時	派遣先	戦死者
仏印	10	22	6
タイ	10	13	1
蘭印	11	7	1
印度	25	26	6
アフガニスタン	10	0	0
イラン	9	0	0
アラビア	10	0	0
トルコ	10	0	0
台湾	0	8	0
計	95	76	14

［派遣地］

「我が神の吾々に指す所は支那に在る、インドに在る、支那とインドと濛洲との円心に当る安南、縮甸、暹羅に在る。チグリス・ユーフラテス河の平野を流るる所、ナイル河の海に注ぐ所、即ち黄白人種の接壌する所に在る」**猶存社宣言**（一九一九年）

三、大川・ヴェーダ・スクール

「己の本然に死するは善し」

『設ひ劣機なりとも己れの本然を尽すは、他の本然に倣ふに優る。
己の本然に死するは善し、他の本然に倣ふことは畏れねばならぬ』
（薄伽梵歌）

先生はこの句を愛誦し、「個人にもあれ、民族にもあれ、不磨の真理である。」と、生涯の精神的規範としていた。
（安楽の門）

1. ヴェーダ（吠陀）「知る」「知識」の書

ヴェーダは、アーリア人が四千年の昔、オクソス川のほとりを出て、『富を与える栄誉のシンド河に農牧生活を営んでいた』千年間の記録であり、「天行は健なり」「地は万代不易なり」と教える。次の四書からなっている。

リグ・ヴェーダ（勧請僧が神々を祭場に勧請し暗誦して伝える讃歌の集成）
サーマ・ヴェーダ（歌詠僧が一定の旋律に合せて行う歌詠の集成）
ヤジュル・ヴェーダ（行祭僧が供物をさゝげ祭祀の実務を管掌する祭詞の集成）
アタルヴァ・ヴェーダ（祈禱僧が管掌する攘災呪詛、呪法に関する句の集成）

各々のヴェーダは、四部からなっている。

サンヒター（本集。各ヴェーダの主要部分）
ブラーフマナ（註釈書。祭祀の起源、意義、目的を明かにする。神話・伝説等を含む）
アーラニヤカ（森林書。特に森林の中で伝授さるべき秘法）
ウパニシャッド（奥義書。当時の種々なる秘説の集成書）

ウパニシャッド哲学は、世界哲学史においても重要な意義を占めており、ドイツの哲学者ショーペンハウエルが「全篇悉く神聖にして熱烈なる精神に充ち、読者をして深遠崇高なる思想を起さしめる」と感歎しています」（Ⅱ－971・全集第二巻971頁、以下略）

その思索は、『梵・ブラフマン Brahman』及び『我・アートマン Atman』であり、根本思想は『梵即我』である。

『梵とは宇宙に超在し、且つ宇宙に内在する究極の実在である』『梵は世界の一切の現象に潜み、もし個人精神が自己の本体を知り至高を認識さえすれば、即ち茲に梵と合一することが出来る。この梵即我・我即梵はヴェーダより出たる最高の思想であり、ウパニシャッド哲学の中心観念である（Ⅲ－301）

『我とは我が心裡の魂にして、麦粒よりも小さく、けし粒よりも小さく、粟粒よりも小さし。そはまた地よりも大に、空よりも大に、天と地と世界よりも大なり』（Ⅲ－137）（49頁参照）

バガヴァッド・ギーター（主神の歌）

ギーターは、紀元四二〇年頃に完成されたと考えられ、ヒンドゥ教の偉大なる大百科事典と言われる「マハーバーラタ」と、サンスクリット語最初の純文学物語である「ラーマーヤナ」の二大叙事詩が含まれ、広く愛唱されている。

マハーバーラタ　古へクル国の王子、従兄弟同士が骨肉相争う戦端を開くに至った。

正義の戦に臨んだ勇武の誉れ高いアルジュナは、

「私欲のために一族を滅ぼして何の善を望み得よう。王権が何にならう。われは勝利を望まない」と、手にした弓箭をすてて戦車の台座に身を投じた。

この時、最高神ヴィシヌの化身・戦車の御者クリシュナは、「正義の戦に身を捨てることは武士の本望である」と、人生の意義、天意の帰趣、自覚の原理を提示した。

アルジュナは「安住せり」と、凛然と三軍を指揮し、悪戦苦闘すること十八日、九死に一生を脱して、芽出度く勝利の凱歌をあげた（Ⅱ－410）

古典薄迦梵歌は、このクリシュナとアルジュナの対話篇である。

ラーマーヤナ　コーサラ国の王子ラーマは妃シーターが魔王ラーヴァナに誘拐されて、ランカー島（セイロン島）に幽囚されていたのを、猿軍を率いてランカーに渡り大激戦の末ラーヴァナ魔族をたおし、シーターを奪還する物語。

（註）クル国は、釈迦が活躍した以前のマガダ、コーサラ、ガンダーラ等〈十六大国〉の一つ。

「ボース氏の来朝」

「魂の力だけでは、イギリスの印度を縛る鉄鎖を断つことは絶対に不可能である。ガンディはインドをして「戦わざるアルジュナ」たらしめる。希くはボース氏が印度をして「戦うアルジュナ」たらしめんことを。（昭十八・七）（Ⅱ－916）

2. カースト制（種姓階級）

アーリア系種族がガンジス川を下ってヒンドゥスターン平原に農村社会、都市国家を建設する厳しい闘争の間に、バラモン（ブラーフマナ）を頂点とした四階級のカースト制度が確立した。

ブラーフマナ（婆羅門）　司祭者階級（バラモン）
クシャトリヤ（刹帝利）　王族および武士階級
ヴァイシヤ（毘舎）　庶民階級
シュードラ（首陀羅）　隷民階級

リグ・ヴェーダの讃歌に、「プルシャ（原人）を切りさいなみし時、彼の口はバラモンに、彼の肩は王士族、彼の腿はヴァイシヤに、その両足よりシュードラ生まれ出でたり」と。（Ⅲ－152）

最下級には人間扱いに入らないチャンダーラ・不可触賤民がいた。パリアと総称した。マドラス地方パライ族のタミル語パライ（祭礼用大太鼓）に由来し、この階級が鼓手を世襲としたことから最も卑賤な階級を言った。ガンディは彼等を「神の子・ハリジャン」と呼んだ。

カースト制は、マヌ法典にも強く守られ、義務、婚姻、職業、飲食、何から何まで保護され、

異なったカーストの間には寛容、無関心、不干渉の精神が支配し、社会は個人主義、保守主義に沈み、無用に帰した過去の塵埃が社会を泥沼の如くならしめた（Ⅱ－961）

反面では、十一世紀、回教の侵入以来、回教の内面的・社会的侵略に対して印度社会の最も強力なる防禦力となりしものは、疑いもなくこの制度であった。（Ⅲ－160）

（註）**カースト**　ラテン語 castus（純血）。ポルトガル語 casta（家系）。インド語ではヴァルナ varna（色）という。

マヌ法典　印度神話の人間の始祖。万物掃滅の大洪水にヒマラヤの最高峰に避難して助かる。法典はマヌが神の啓示によってBC二〇〇年～AD二〇〇年間に作ったとされる。古代印度の伝承と社会慣習が整理され、民法・刑法・宗教・道徳・神話にわたる十二章、二、六八五条から成る広い範囲の、むしろ宗教聖典として尊重された。

（註）マヌが早朝手を清めていた掌中に一尾の魚が入る。魚は助命を願い、お返しに大洪水にマヌを救う約束をする。はたしてマヌは大洪水に魚が準備した舟に救われ、魚はヒマラヤ山頂へ泳ぎ押しあげる。マヌ（Manu）は（人間）の義、英語の Man と関係がある）

3. 仏教

(1) 釈迦牟尼

開眼（カイゲン）　開祖**ゴータマ＝シッダールタ**は、カピラ国の太子、父母の寵愛を一身に集め、王朝栄華の花と育てられたが、ある日、王室の園遊に城門を出ると、東門では老人に会い、頭は白く、歯は落ち、目は涙、口は涎をたらし、青春夢の如く去り、人生の終わりあるを悲しみ、南門では病人

に会い、西門では死者を輿にのせて往くに会う、北門では法衣修行の一沙門に会う〈四門出遊〉。

太子は深く心を悩まし、悩悶を克服して生老病死を断たんと求道一心、妻子を捨てて出家を決心する。この時、齢二十九歳。

太子は深林に入って苦行すること六年、苦行は真正解脱の道に非ず、平安はむしろ健全な肉体にあると、苦行を捨て清流で身を清め、村の婦人の捧げる牛乳粥（スジャータ）に体力を回復し、樹下に端座四十九日、二月八日払暁廓然大悟して宇宙、人生の真理を悟って覚者・仏陀となる。ブッダガヤーの菩提樹の下、齢三十五歳であった。（Ⅲ－309）

伝道（ミガダーヤ・鹿野苑（ロクヤオン））

仏陀は一着の袈裟、一個の鉢、一本の針を持って、まず鹿野苑から伝道の生涯に入った。

仏教の根本原理は四諦、八正道である。（Ⅲ－313）

四諦（シタイ）　苦諦　（生老病死みな三世永劫の苦なり）

集諦　（一切の苦は貪、瞋（イカリ）、痴の三悪より生ずる）

滅諦　（解脱は意欲、執着の滅尽にある）

道諦　（解脱を成就するは八正道にある）

八正道（ハッショウドウ）　正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定

四諦の真理を体得し、八正道を実践して、有・無（快楽主義と苦行主義）の両極端を否定する「中道」により、人々は人生の苦しみから救われると教えた。

釈迦の人間平等主義は、人間の尊さ、価値は生まれや職業ではなく、行為であるとし、いかに高位であれ悪い行為をなせば賤民であり、賤民でも心や行為が正しければ尊貴な者であると教

え、バラモン教のカーストを否定した。

バラモン教は高貴なる哲学によって立っていたが、他面に特権階級のみの宗教となり、外面的儀礼に束縛される形式主義に堕落し、或は懐疑主義、放縦な唯物主義風潮に流れていった。

（註）**ゴータマ**は（釈迦族の姓・沙門）　**シッダールタ**は本名。（瞿雲悉達多）
釈迦牟尼（釈迦族の牟尼・聖者）。父はカピラ国王スッドーダナ（浄飯（ジョウボン））、母は隣国コーリ国王女マーヤー（摩耶）、ルンピニー園で出産後七日にして他界し母の妹マハープラジャーパティに養育された。成長後コーリ国王女ヤショーダラーと結婚して一子ラーフラをもうけた。カピラ王国はゴータマの在世中にコーサラ王国に併合されて滅んだ。
釈迦は、前五六〇年頃ルンピニーで生まれ（四月八日）、三十五歳でブッダガヤーの菩提樹の蔭で覚者となり（十二月八日）、八十歳クシナーラで最後の説法を与へ、沙羅双樹の間で入寂した。仏陀の舎利（聖者の遺骨）は、関係の深かった国王や種族に八等分され各地で舎利塔を建てて祭り、アショカ王は印度全国に八千四百の塔を建てた。また前記三カ所に最初の説法地ベナレスの鹿野苑を加えた四大聖地巡礼はたえない。

(2) ナーガールジュナ　竜樹（Nagārjuna,180~240）

「竜樹は、大乗仏教、空の思想の哲学的基礎を築きあげて、八宗の祖と仰がれ、仏教内における総ての信仰を集大成せんとした。

仏陀入滅後、教団内に現れた種々なる信仰の流れが、皆一度竜樹の心に流れ入り、然る後に以前より一層明白なる相を具えて八方に流れ出て、仏教内に多くの宗派が出来るようになった。仏教には八万四千の法門、五千七百巻の経文があると言う（Ⅲ－318）

彼は、大乗仏教の中心思想である縁起、滅せず、生ぜず、来らず、去らず、有は無、無は有、「色即是空」「空即是色」「一切空（クウ）なり」と説く。

（註）**1. ナーガールジュニコンダ**（Nāgarjunikonda）
アンドラ・プラデーシュ州クリシュナー川中流にある印度特有のストーバ形式唯一の遺跡。紀元前後にデカン高原に栄えたアンドラ美術をうけついだアマラーヴァティー美術は、南インドの仏教美術の高かったことを示している。ナーガールジュナ（竜樹）が晩年住んだと言われている。
2. 大乗仏教（Mahāyāna）
大きなすぐれた乗物の意。北方仏教ともいい、すべての衆生を救済し、一切みな成仏して涅槃の彼岸にわたることをとく。
3. 小乗仏教（Hinayāna）
俗世間を超越して修行と思弁に専念する保守的既成教団に大乗が付けた名称。南方仏教とも呼ばれ、後に上座部と大衆部に分かれた。

(3) シャンカラーチャールヤ（Sankarāchārya. 780~820）

八世紀後期、南インドに生まれたヒンドゥー教最大の哲学者。独自の不二・一元論を主張し、ウパニシャッド、バガヴァッド・ギーターなどの注釈、著作活動、また諸所を遍歴し一〇の教団を樹立し、バラモンの正統信仰の革新と再興につとめ、仏教、ジャイナ教に大きな打撃を与えた。

人間の究極目的は我と霊性（梵）と同一を自覚するにありとし、我・アートマンは無限、苦悩なく永恒不変の実在であって不二・一体であるとする。

（註）

バラモン教　ヴェーダを根本聖典とし、僧呂階級バラモンによって発展した宗教。ブラフマン・アートマンの一元不二、流転から悟りへの道を説く。

ヒンドゥー教　古代の民間信仰、俗信、神観がバラモン教と結合して発展したインド民族の宗教。起源は明確にたどることはできないが、「ヴェーダの宗教」は始源であり、根幹となっている。

ジャイナ教　現在も上流階級の商人、特に金融業者を中心にした、開祖マハーヴィーラ（大雄）が古いバラモン教に満足せず、前五世紀マガダ王国に起こった宗教。徹底した不殺生の戒律を守り、歩行中に虫けらを踏むので行商人はいけない。

4. 英国の印度支配

オクソス出でて、氷室のヒマラヤ越え、「密林に埋もれたる」「夢見る女の美しさ」に譬えられた印度、大河インダス、ガンジスは、流れ来る諸民族を悉く同化して見事に咲いたバラモン文明も、歳月ここに三千年、清き流れは死水となって凋落衰微して、回教に征服され、遂に英国の奴隷となっていく。西北境よりインド侵入者は二十六回、その内二十一回は多かれ少なかれ目的を達している。

(1) 百のシェークスピア

印度が英国にとりて、極めて重大なる意義を有するは、単に無限の天産と、無数の住民とを有するが故ではない。印度は実に英国資本に対する巨大なる投資場であり、大志ある青年に取りて文武仕官の好舞台であり、莫大なる商業の中心であり、軍隊の駐屯地であり、而して最も必要なる海軍根拠地なるが故である。シェークスピアを失わんより、寧ろ印度を失わん時代は既に過去となった。今日の英吉利は、百のシェークスピアを失うも、寧ろ印度の保全に焦慮す。（Ⅱ－24）

印度皇帝即位式

一九一一年十二月、英国国王は玉輦をデリーに運び、最も荘厳なる即位式を行った。（Ⅱ－56）これによって、海上の女王を以て甘んじたりし英国は、更に陸上の君主たらんとして、セシル・ローズのアフリカの夢、カーゾン卿のアジアの夢、この二つの偉大なる夢が実現せらるべく見えた。（Ⅱ－36）

しかし、翌十二年にはハーディング印度総督の新首都デリー入都式行進に爆弾が投ぜられ、絞刑台に上った一青年は、「吾は卑しき生命を母国のために捧ぐる光栄を誇る」と宣言して刑場の露と消えた。故国の青年は悲しみと感激に涙滂沱たり。（Ⅱ－56）

(2) セポイの大反乱

英国の印度征服、印度統治は「分割統治」（divide and rule）政策である。

印度民族運動の嚆矢となったセポイの乱に対して英国は、パンジャーブのシク教徒、アフガンのイスラム教徒、ネパールのグルカ兵などの積極的支援、封建的領主の分割買収、農民の分散性などに助けられてようやく鎮定することができた。結果は、反乱軍に推戴されたムガール皇帝バハードゥル・シャーは廃され、一八七七年女王ヴィクトリアはインド皇帝を宣言、ビルマ・バルチスタンを合わせて、東西四千㎞、南北三千㎞、印度洋を内海にして大英帝国が完成した。

〝印度では十二マイルごとに言葉がちがう〟と言われる言語八五〇の大国になった。

印度が英国の手を離れて幸福になるや否やは疑問である。（Ⅱ－610）

第一次大戦に対して印度は全力をあげて英国のために尽くした。

『印度の王侯及び人民は、過去百五十年以上に亘り、その保護の下に平和と文明の祝福とを確保してくれたことに対し、偉大なる英国民に感謝の実を示すべしと互いに誓いあった。（一九一五年ボムベイ国民会議においてシンハ議長声明）。かような次第で英国は八十万の印度兵を募集し、十七億五千万円の軍事公債を発行することができた』（Ⅱ－525）

大戦が勃発するや英国は、「戦後に自治を与える公約」の下に印度の全面的協力を得た。

しかし、協力の褒美はローラット法であった。この法律は印度総督に（間諜の密告でも）「何人たるを問わず、無審理で逮捕・監禁・投獄する」権力を与えた。しかも、戦争終結と共に必ず廃止する約束の法は永久的法律になってしまった。ガンディの抗議の非協力運動はじまる。

(3) ガンディ

ガンディが印度における政治的支配者になったのは、実に崇高なる人格による。（Ⅱ－443）

予（大川）はガンディを「政治家として現われたる印度精神」と呼ぶのを一層剴切なるを信ずる。

ガンディの政治的理想は「自治（スワラージ）」である。既に政治的に覚醒し、その正しき進路を学べる印度は、晩かれ早かれ英国の鉄鎖を絶ち、希有荘厳なる独立の凱歌を奉するであろう。（Ⅱ－446）

印度独立史は、不服従運動と弾圧投獄、円卓会議のぐるぐる回りであり、節目々々には断食と甘言、その都度ガンディは分断された印度を統一し、その純一清潔の魂を英国を富ますために捧げて来た。ローラット法、ガンディ・アーウィン協定。二度あることは三度ある。ガンディは断食には克ったが、イギリスには復た負けた。（昭一八・四）（Ⅱ－910）

ガンディを通して印度人に与ふ

『我等が印度から学んだ最も貴いのは宗教であります。

日本は大東亜戦における日本の勝利が、印度独立のために、千載一遇の好機たるべきを信じ、古へ釈尊より受けたる最上の返礼として、印度独立のために能くする限りの援助を提供せんとする以外、また他意あるのでない』（Ⅱ－928）

（註）マハートマ・ガンディ（1869-1948）はジャイナ教徒の生まれ。生涯四回投獄され、十一回断食した。46年からヒンドゥ・イスラム両教徒融和の行脚中、48年一月二九日、ニューデリーで反イスラムのヒンドゥ教極右派の一青年に暗殺され多彩な生涯を閉じた。

〝マハートマ〟はタゴールから贈られた称号「偉大なる魂」

(4) 英国政府へ宣戦布告

大川先生は、『コットン』以来、印度から次々の賓客の受入れ、講演、出版などに多忙をきわめていた。

一九一六年五月、東洋人としては初めてのノーベル文学賞に輝いた（1913）ラビンドラナート・タゴールが来日し、大川先生はこの機に、『印度に於ける国民的運動の現状及び其の由来』を発刊した。巻頭には、『印度の形勢は果たして平穏なるか』と、巻末には、『印度人は自由を』『印

度国民によって治められんことを望む』と結んでいる。先生は更にタゴールのシャンティ・ニケタン（平和学堂）の協力者・英人ピアスンの『印度のために』を翻訳出版した。

果して、この二書は英国側の激昂をかい、日本政府に発売禁止、「大川の日印協会追放」を要求してきた。ここに、先生は「予は何故に日印協会を退会せるか」を公表し、毅然として英国政府に宣戦布告した。復興アジアの嚆矢である。

「私（大川）は印度研究によりて世界人から亜細亜人となり、列聖伝の執筆によって亜細亜人から日本人に復（カエ）った。」（安楽の門112頁）

(5) ネール首相の招待

半世紀の年月が流れた。一九五七年十月九日、訪日したネール首相は宿泊の迎賓館に大川先生を招いた。先生は病重く、印度独立に辛酸をなめた両雄は遂に相見えることは叶わなかった。

(6) 鳴神上人（ナルカミ）　歌舞伎に活躍するヴェーダ仙人

インドの仙人はリシという。リシはブラーフマナの出身で、ヴェーダは夫々の家系に伝えられたと言われ、神々と人間を媒介し、忍耐強いが一度怒ると自然現象を左右して人々を苦しめる。リシの中で最も広く知られているのは、リシヤシュリンガで一角仙人という。隠者の子で雌ジカから生まれ、頭に一角があり、女性を知らずに森の中で成長する。

谷間の流れ　緑野に
土の香りに　大空に
みちたる世々を　結びけん
大亜細亜
あゝ　その生命　貴しや
（寮歌 第三節）

ローマパーダ国では神々の呪いによって干害（カンガイ）が起こり、一角仙人を連れてこないと雨が降らないというので、王女が行って誘惑に成功する。

平安時代、鳴神上人（一角仙人）は約束を守らなかった帝に怒り、京都北山の滝壺に雨の神・竜神を閉じこめてしまう。雨が降らずに日照に人々は苦しみ、朝廷は絶世の美女「雲の絶間姫」を上人のもとへ送りこむ。上人は次第に姫の色気に迷い、ついに祝言の盃を交わして、初めて口にする酒に酔い潰れて前後不覚、姫は秘法のしめ縄を切り、竜神を逃がして雨を降らせる。

仙人が色香に堕落する前半、欺かれた憤りから多彩な荒事を展開する後半と、歌舞伎十八番一六八四年初演の市川団十郎が得意の見せ場である。

（参考）「栗粒よりも小さい(小)、天と地よりも大なる(大)」漢数詞

(大)	(小)
1	一
十	分
百	厘
千	毛
万	糸
億	忽
兆	微
京	繊
垓	沙
秭	塵
穣	埃
溝	渺
澗	漠
正	模糊
載	逡巡
極	須臾
恒河沙	瞬息
阿僧祇	弾指
那由他	刹那
不可思議	六徳
無量大数 (10^{88})	空虚
	清
	浄 (10^{-23})

四、大川・イスラム・スクール

「回教の真理は一切を包有する」

1. 大川先生のイスラム著書

古蘭（コウラン）

「古蘭三昧二年なり
アリフ・バー・ター・サー・ジーム・ハー
アラビア語独習の如何に難（ムズカシ）かりしぞ
阿英両文の古蘭を入手せる時
このアラビヤ初学者は
如何に其の胸を躍らせしことぞ」

「私は古蘭原典と、十種に余る和漢英仏独の訳本を取寄せ、昭和二十一年十二月一日から読み始めた。それは私が乱心中の白日夢でマホメットと会見し、以前難解であった個処も明瞭になったところが多かった」「予はこの訳註が陳勝呉廣たることを以て満足するものなり。

昭和二十四年十二月　大川周明」

師の姿　いま鮮やかに端坐して
コーランひもとく　その背揺かず
（一期生　逆瀬川澄夫）

（註）陳勝呉廣　前六〇九年、楚人陳勝は、呉廣と共に秦末の悪政に苦しむ民衆を指揮して叛乱の兵をあげ、劉邦、項羽らの挙兵の魁となる。「ある事の魁をした人にたとえる故事」
大川先生は、一九一三年「道誌」に宗教講話「マホメット及び其宗教」を発表している。

復興亜細亜の諸問題
（一九二二年六月）
亜細亜は第一に自由を得ねばならぬ。真のアジア問題はその時に始まる。

亜細亜建設者
（一九四〇年十二月）
亜細亜を正しき動向に導けるものは、実に彼等の荘厳なる魂に外ならぬ。

近世欧羅巴植民史
（一九四一年十月）
政治的には欧羅巴の帝国主義の勝利、経済的にはその資本主義の昂潮、人種的には白人世界制覇の跡を辿るもの。

回教概論
（一九四二年八月）
回教の研究は興味の点からも、有利の点からも、人の心を惹くべきものがある。

マホメット伝
（遺稿・一九六二年七月）
彼は人間のうちで最も美しく、最も勇敢で、最も輝ける顔をして、最も鷹揚な人であった。
彼の顔には太陽の光が輝いているようであった。

2. 学課

一期生の派遣先は仏印、タイ、蘭印、印度。二期生はアフガニスタン、ペルシャ、トルコ、アラビアであった。廊下は国際通りになった。遠い国であった。遠い国が近く目の前にきた。

大川先生

大川先生の「現代アジア」「植民史」「回教」「マホメット伝」「アジア建設者」は、厚い原書何冊かを机の上におかれて、大きな眼鏡の奥から輝く眼光、滔々淡々と力の乗ったお声から、生徒はアジアの叫びを肌に感じた。筆記ノートはすぐ一冊になった。（山本記）

丸山順太郎先生（フランス語）

丸山順太郎先生の王朝貴族の風格も、教本「ル・プティ・ショーズ」の新鮮なユーマニテに満ちて、どこかフランスのエコル・プティ（？）のように楽しかった（山本記）

先生の授業はユーモアあふれる話をしてくれた。お声は透明で甘く綺麗で、フランス語の素晴らしい発音を、よく口を大きく開けて縦横十文字に早口に開けたり、閉めたりされた。僕達も真似するように訓練された。

僕は、先生にフランス語を学んだことによって、それ以来の生き方、考え方などに幅広い視野を与えられた。（永上記）

浜野末太郎先生（英語）

英語は、現在頑ななる保守主義者によって排斥されているが、敵を知らずして勝利を得ることは難しく、敵を知る上で最も大切なことは敵の言葉に通ずることを忘れるなかれ。今や没落の途を辿りつつある老いたる英国に代わり、独り世界の王者を誇る米国を知るためにも、英語は絶対に必要である。また現在外国の新聞報道は、ほとんどユダヤ系に握られ、日支事変に対して反日宣伝のみが行われているが、その裏を読み取らねばならぬ。

蒲生禮一先生（インド語、ペルシャ語）

蒲生禮一先生は、情熱の先生だった。先生自らコンニャク版を刷って来てくれた。イラン冨士・エルブルズの雪解け、ブルブル（ペルシャ・うぐいす）春の歌声、サーデイの「薔薇園（ゲリスタン）」の悲歌、オマル・ハイヤームの「酒姫（サーキー）よ、〝われらはどこから来てどこへ行くやら？〟」（山本記）

先生は、熱のこもった、教壇に立ち放しでジェスチャーたっぷりに教えて下さった。

ある日、牧羊の話をされた。「肥った山羊が歩く。山羊の巨大なオッパイか、嚢を仰ぎ見て、人は皆思わず、よだれを垂れるんだよ。」若かりし僕達にとって素晴らしい異国の大いなる夢を抱かせるに十分であった。（永上記）

（蒲生先生のインド語）講義で最も人気が高かったのは、蒲生先生のインドであった。なによりも真剣に聞き耳を立てたのは、先生の体験に基づく食べ物であった。その証拠にインド語の方

はコロリと忘れてしまったが、食物の話はいまだに鮮やかによみがえってくる。
羊肉のライスカレー、羊の尻にブラブラしている脂身、サラットしたカレー、皿に残るバターのような油（先生はギヒーと言われた）、カルピスになるミルク（先生はダビー）、ベタ焼のナンに生徒達は、生唾をのみこみながら、全神経を集中した。
先生ご自身もご体験当時は、よく肥えておられたそうで、今は胴が二つ入りそうなダブダブのズボンからも十分想像できた。（石田記）

前島信次先生（コーランと回教）
いつも忙しそうに早口で出てくる回教の興味津々たる不思議な世界の数々、まるでアラビアン・ナイトのような。舞台はイラン、イラクあたりからアラビア大陸に至る広大な大地の物語。学者だなと、いつも畏敬の念を持った。特に開祖マホメットの洞窟の中の「おお、外衣を纏う者よ、起きて警告せよ」の開示からメッカへ無血入城までは圧巻であった。

佐藤　弘先生（国際政経）
先生は、研究所の最も若手の講師で、授業の合間々々に寸鉄人を指す皮肉は実に小気味よかった。ある日、授業中に空襲警報、緊急避難。ところが先生は皆を壕の上に集め、空を見上げて敵機の来るのを観察、爆弾投下の力学を説明されたのは、一同舌をまいたものだ。戦後「はだか随筆」がベストセラーになった。ペンネームは佐藤弘人。オナラからお色気…抱腹絶倒。研究所のことにはまったくふれていなかった。

村川堅固先生（西洋史）
先生は高名なギリシア・ローマ史の権威者で、いつも大きなユーラシア大陸の地図を使われて、「すべての路はローマに通ず」アッピア街道の話や古事を語られた。

この他の諸先生方

八木亀太郎	ペルシャ語	ムフシン	アラビア語
大久保寿治	トルコ語	小林　元	イスラム史
アバナイ	トルコ語	井筒俊彦	イスラム思想

徳川義親師（礼法）
大川先生とは水魚の交わり、我々にもお顔を赤らめて、情熱あふれる武士の礼法を教えて下さった。尾張徳川のお殿様からの礼法、箸の上げおろし、フォークの持ち方にも、武士の心が散見された冥利に尽きる教えであった。
自分は小さいとき、寝相が悪かった。その時、枕の両側に鞘をぬいた刀を置かれたが、三晩はこわくて眠れなかった。そのおかげで今では一晩中一寸も動かないで眠るようになった話には、武士の覚悟に感銘した。

植芝盛平師（合気道）
合気道の真髄は、「敵を導きて我が意の如くせしむる」ことなり。

「武は神なり。武は経綸を行うものなり。」

「魄の武道でなく、魂の武道に到達したい。魂の武道こそ神の武道である。自分が倒れたら誰かの五体に乗り移って、この願望と遂げたい。」（師を見舞った児玉寮長記）

植芝流は「相手の力によって敵を倒す」、正に神術である。

白髪かくしゃくたる開祖・盛平師は御子息吉祥丸さんと石川高弟をつれて、紋付袴でお見えになった。卒業の時に参段をいただいた。生涯使ったことはないが、いかなる場合でも人生に自信をもつことができたのは有難いことであった（山本記）

中島菊治師（古式綾小路流雅楽）

新日本音楽の創造。西洋の芸術が、あたかもロック・クライミングによって高山を征服する如きものであるのに対して、日本の芸術は六根清浄を唱えて登山する境地のようなもので、音楽における一器一声にもその差が表われる。（大川塾寮歌は師の作曲による）

先生はいつも笙を持ってきて、まず一曲をおごそかに奏してから話を始め、宮中お歌会の朗詠を教えて下さった。静寂陶酔境であった。

土俵開き

昭和十五年六月、寮庭の椎の森の中に立派な土俵が完成した。土俵開きには立行司式守伊之助初め井筒部屋から鶴ヶ峯、源氏山、二瀬川以下大勢の力士が参加、厳粛な古流式典の後、模範取組があり、終って力士相手に私達のぶっつかり稽古があったが、てんで一突き土俵外

だった。その後は三段目の一ノ海関がきてくれた。吾々も鳥海山、逆瀬川、諏訪海などと四股名をつけて横綱を争った。正に裸一貫の切磋琢磨であった。

3.『復興亜細亜の諸問題』 イスラム語録

（）数字は全集第二巻のページ）

(1) 剣かコランかの信条を真向に振翳（フリカザ）し、宗教と政治とに間一髪なきマホメットの信仰に、いたく心惹かれしもまた実に此頃の事であった。(6)

(2) ドゥ・カストリー曰く、「回教国土内に於てキリスト教宣教師が回教徒に対して採るべき行動は唯一事あり。彼等をして回教徒たらしめ置く事これなり」(189)

(3) 回教に於て、宗教と法律及び政治が、極めて密接に結合せらるゝことは、植民政策上における回教徒の意義をして一層重大ならしめるものである。(175)

(4) ムハムマッド・ベン・ラハル、「回教の真理は一切を包有する」(178)

(5) 「一滴の血、わが肉体に残らん限り、吾は国民と自由と真理のため戦わん。アラーとマホメットの名に於て、吾これを誓う」（青年トルコ党入党の宣誓）(127)

(6) 「勇しき心、確乎たる足取りをもて死に進め。行け、吾児よ。時世のため、感情のために曲

げられざる、荘厳なる審判を行い給う神の御許に行け。人間の審判が君に宣告せる死こそ、却ってエジプト国民に与うる偉大なる教訓として、君の生命其ものよりも貴くあるぞ。人間の慈悲なきを恨まざれ。神の慈悲こそ無辺なるぞ。さらば、吾児よ。さらば、さらば」(157)

(7) 「吾等は、この種の回教運動が近き将来の世界政局に於て、重大なる役割を勤む可きことを確信する」。若し斯くの如き、聯盟が成立するならば、そは疑いもなく亜細亜復興の先駆となるであろう。(116)

(8) 復興亜細亜の前衛たるべき回教連盟が、その怖るべき姿を現すべきことは、万一の僥倖に非ず、寧ろ理由ある期待となった。(209)

(9) もし支那共和国が一個強大なる組織を、その内訌から生み出すならば、チベットは全アジア運動における日印支三国の接触点となるかも知れぬ。(ギボンズ記者)(37)

(10) インドはガンディに導かれて新しき時代に入るであろう。今や世界最大の革命家は、まがう可くもなくレニンとガンディである。(70)

(11) アフガニスタン統一の英雄アブドゥル・ラーマン汗

「湖の北岸には一頭の老虎が目を輝かし、彼岸には一群の餓狼が彷徨している。かくて白鳥は常に湖心に泛ばざるを得なかった。」(79)

(12) ペルシャにおける英国勢力の掃蕩が、アジア復興に対する意義は、実に深甚である。(104)

(13) 『植民帝国、これ実に欧羅巴にとりて致死の罪悪である。それ故に此の苛責を脱せんとするならば、その隷属の民を解放せねばならぬ』(フランスの一哲人)(784)

(14) 勇将アクバルは太平洋の波打つ岸に馬を乗り入れ、

「アルラーよ、若しこの海がわが行手を遮らずば、予は更に西方未知の国に進み、神の唯一なるを教へ、異教の民に妙法の利剣を加えんものを」『近世欧羅巴植民史』(V-6)

(15) 一八九八年ドイツのウィルヘルム二世がダマスカスに於て「全世界の回教徒は、永久に朕の友情に信頼せよ」との名演説の深意は、印度洋上における英独争覇戦、並にスペインに勝った米国の太平洋上における日米争覇戦の端緒はこの年に開かれたるが故に、一八九八年は真に世界史的に深甚なる意義を有するものである。(240)

(16) ボルシェヴィキ最大の関心事は、先ずペルシャの赤化にあった。(109)

「マホメットはボルシェヴィキなりき」

「ボルシェヴィキは回教の友なり、新回教なり」と。

大川先生は「共産主義は理論としては決して正しい理論ではありません。不完全であるために、一旦党の力がなくなって、その実践運動が不可能になると同時に、見る影もなくその思想も崩壊してしまう」と予言している。『新東洋精神』(992)

第二章　大川先生の太平洋平和構想

アメリカの資本と日本の技術をもって
中国を開発し、太平洋の恒久平和を計る。

一、大川先生の対支和平工作

「日本は支那と戦うべからず」

1. 満洲国独立

(1) 満洲日記

一九二二年八月十二日。土曜

四方際涯なき此の草野に牛馬でも放して、世を離れて暮らすのも一生だ、などと考へる。北満の一角に理想的な日本村を造る。村が出来たらどうする、斯うするなどと際限なく空想しているうちに興安嶺に差かかる。

満蒙問題

一九二六年十二月二十四日。

九段階行社において陸軍中堅将校と満洲独立問題について討議。

参集者は板垣中佐、永田鉄山中佐、東條中佐、阿南侍従武官、外七、八名錚々たる面々十数名。

大川「満洲は陸軍によって独立せしむべきである」と、東條と激論。

東條「そんなバカができるか。ほどほどにしろ」

両者、アワヤ、掴み合い。

板垣中佐「ここで喧嘩しても、満洲は独立せんよ」

この会合は満洲独立問題が、軍部の中で公然となった最初のものであった。

満蒙独立の炬火は点火された。(1)

(2) 一九二八年九月。**張学良と再三の会見**（Ⅳ－596）（全集 第四巻1頁）

先生「日本と支那の指導原理は王道に外ならぬ。

故に吾々は共通の理想のために戦うものである。」

張「三民主義は過渡的思想で到底支那を救うに足らぬと信じる。

自分は飽迄も儒教の政治思想を奉じて終始する覚悟である。」

両者意気投合、張の礼状は酒田の大川家に保存されている。

全国遊説

一九二九年五月から全国を遊説。満蒙の危機を訴える。

会場は立錐の余地もない超満員、国論は沸騰し湧きに湧いた。

一九三一年六月。『満蒙問題の考察』発刊。

日本の特権は東洋の平和を保全する必要から獲得せるものに外ならぬ。

一九三一年九月一八日。満洲事変勃発。

一九三二年六月。『満蒙問題の重要性』発刊。

もし満洲を失なうあらば、吾国は直ちにロシア・支那・アメリカに圧迫され、列強の限りなき軽侮を浴び、憐れなる地位を辛じて極東の一角に保ち得るに過ぎぬことになるであろう。誰か、日清、日露戦争を侵略のための戦争というか。

(3) 満洲国独立

一九三四年三月一日。「王道楽土」「五族協和」の旗印を掲げて満洲は独立した。五族は、漢・満洲・モンゴル・日本・朝鮮民族を表わし、国旗は赤・青・黒・白・黄の五色旗である。

因に、モンゴル人民共和国は一九二四年十一月独立。

2. 浙江財閥工作

(1) 日本は支那と戦うべからず。

戦争は勝たねばならない。日本は、「東洋の王道の干城」を貫かねばならない。紀元前から日本・支那・印度は鼎の三脚、いずれが争っても、日本の、そしてアジアの精神文化は崩壊する。日支戦うべからず。直ちに日支和すべし。

(註) 孫文「西洋の覇道の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか、あなた方日本人国民がよく考え、慎重に選ぶことにかかっているのです」(一九二四・11・28 神戸高等女学校講演)

一九三七年七月七日、日中戦争始まる。先生は新京に飛んで、国民政府の首都南京を攻略すれば戦争が長期化する恐れがある。そのため関東軍要路の同志と謀って、進撃攻略を中止して日支戦の即時解決を要請した。しかし、事は志の如くならず、南京は陥落(12月13日)

翌一九三八年一月十六日、近衛首相は「国民政府を対手とせず」と声明を発表し、八月の漢口攻略作戦に、国民政府は重慶にこもって、日中和平の途はふさがれた。

一九四〇年一月二四日。研究所英語教師・梶原先生(在上海領事館)講話

「日支事変は完全なる失敗であり、独り中国共産党のみが最大の成功を収めている。蔣介石政権が次第に立直り、その抗日戦力は侮れないし、国共分裂離反は期待できず、日本軍は全面的に不利な状況になりつつあり、今や支那大陸の聖戦は帝国主義戦争になり下がって、事変解決の道もなく、日本国民は本当のことを知らされていない。二千六百年の歴史的革新の時期に当り、正しい日本に立ち帰らねばならない」

(2) 汪精衛・南京政府樹立

一九四〇年三月。支那の現状を熟知した大川先生は、汪政権工作の中心人物・影佐禎昭大佐を国賊と罵った。影佐は「自分も政権樹立には反対であったが、日本政府が速やかに政府を樹立するべく焦慮するので、己むを得ず尽力した」と語った。(2)

和平対手は蔣介石ただ一人。大川先生訓話 四月十八日(木)

「日本は汪兆銘政権なるものを樹立して全幅の支持を与え、政府首脳はこれを以て日支事変が解決されるが如く国民に思いこませているが、愚かなること甚だしい。支那側は汪精衛な

る人物が日本の操り人形であることを知っていて、何等変らない受取り方である。
また日本の指導者達は、援蒋国があるため重慶政府が抗日戦を続けているように国民に信じこませ、それを打破れば蒋介石は屈伏させ得る如く考えさせているが、事実は蒋あっての援蒋国であり、全く逆なのである。
先般英米独などの大使が重慶へ乗込んでいるが、その目的は日本との和平を勧めるためであったが、その条件を蒋介石が見て断固拒否したのである。彼は後数年で日本国内が崩壊する故、いま頭を下げて和を乞う必要はないとして、たとえ外国の援助がなくとも、断然抗日戦は続けると言っている。
一体物事の争いは、その対手と交渉せねば決着するものではないわけで、日本は汪政権樹立の前に、大公報で示唆した蒋介石の心情を察して対応すれば、簡単に解決した事だっただけに、現在の日本にそれだけの大政治家がいなかったことが残念である。日支事変はいっそう混沌とした状態にあり、汪政権を立てて喜んでいるようでは将来の見透しはなく、いよいよ暗に入るものと言える。」

(3) 大川・東條会談 一九四〇年十月末（汪精衛政権承認の直前）ナチス独逸リッペントロップ外相。国民政府駐独公使・陳介を通じて蒋介石に対する和平を斡施。
蒋は、日本軍の撤兵を条件として同意。リッペントロップは松岡外相に通告。
松岡は東條に図ったが、東條は拒否。松岡は大川博士に東條の翻意説得を求めた。
大川博士は諄々として、

「独逸の仲介こそ和平の絶好の機会。この機会を逸しては和平は困難である。
撤兵は日本を救うものである」と力説した。
東條は、「支那より撤兵することは靖国の英霊に申し分けない」と拒絶した。
博士は、「神は貴公よりも遙かに見透しがきく。」と捨台詞を残して袂を分った。
博士はこの事があってから東條の識見の低級なるを諷して『東條は下駄なり』と罵倒していた。下駄は足の下に履くには重宝なものだが、下駄を頭の上に載せた国民は不幸であると。

(4) 一九四二年一月二日 **大川・石原・蒋君輝会談（蒋君輝 記録）**
私（蒋）は大川学院（大川塾）で大川先生に紹介されて、石原莞爾將軍に初めて会った。
大川先生は、私を「私（大川）の知る中国人の友人の中で蒋先生ほど誠意を持っている人は他にいない。蒋先生の率直な話は中国人の気持を代表している。お互い同志と思い、一切遠慮なく話し合ってもらいたい」と、紹介してくれた。
私は、「日本は『東亜新秩序』という看板を掲げて、それは、中国の文化を破壊し、財産を奪取し、姦淫焼殺、暴虐な行動であった。中国では「困獣猶闘」、どこで何が起るか分からない」と訴えた。

討匪行　関東軍参謀部
どこまで続くぬかるみぞ
三日二夜を食もなく
雨降りしぶく鉄かぶと
すでにタバコは無くなりぬ
たのむマッチもぬれはてぬ
飢え迫る夜の寒さかな

將軍は「よく分かりました」「中国人は日本にどんな希望を持っているか」と聞かれた。
私は、「日本軍の大陸からの全面撤兵であり、今が一番よいタイミングである」と答えた。
將軍は、「よく分かりました」
博士は、「問題は東條だ。東條が反対している」と言った。
一九四二年二月。**日本は深刻に反省せよ。**
「非は支那側に在りとするも、五年に垂んとする必至の努力を以て、尚且其非を認めさせ得ぬとすれば、日本は深刻に反省すべき時ではないか」（Ⅱ－895）

(5) 上海財閥系企業を解放

支那事変発生以来すでに五年、日本軍が先ず手をつけたのは上海十六紡績工場と五大印刷出版社の接収であった。上海の経済は麻痺し、失業者は街に続出して民心は窒息した。不測の混乱発生さえ察知されるところであった。
蒋君輝は「中央を動かす力を持っているのは大川博士である」と、取るものも取りあえず東京へ飛んで来たのであった。待つことひと月、先生と朝食をとりながら答を聞いた。
㈠軍管理は一切解除。
㈡中国人の財産は中国人自ら管理する。日本人は一切干渉しない。
首を長くして待っていた業界は、「中華民国紡績聯合会」「文化出版聯合会」を結成し、他の業界も便乗して聯合会を作って頼みにきた。また支那側から原料綿花出回り阻止の報復をうけた日本側紡績も操業停止を免れた。

(6) 浙江財閥は、蒋・孔・宋・陳の四大家族、宋家三姉妹である。

宗霭（アイ）齡
＝
孔祥熙（孔子75世、中国銀行総裁、行政院副院長兼財政部長）
宗慶齡（後に中華人民共和国副首席、スターリン平和賞）、亡命中日本で結婚（一九一四年）
＝
孫　文（国父、三民主義。中華民国臨時大統領。一九二五年没）
宋子文（国民政府行政院長）
宗美齡（後に中国婦女反共抗ソ連合会会長）
＝
蒋介石（国民政府主席、連合軍中国戦区最高司令官）
陳果夫・陳立夫（蒋介石の復心。果夫は経済方面、立夫は文化教育方面を支配）

浙江財閥の財力

蒋介石（1887～1975.4）は浙江省奉化県に生まれ、保定軍官学校を卒業後、日本に留学、その生涯は、孫文の広東軍政府大本営参謀長となって（1923）以来、戦争の生涯であった。
蒋は、四度の北伐によって北洋軍閥を打倒し、孫文が「革命未だ成らず」と遺言した（1925.03.25）中華民国国民政府を組織建設した。

また、蔣は、この頃すでに紅軍を編制して各地にソヴィエト政権を樹立し、国民党軍と対戦していた中国共産党を五回にわたって武力討伐し、華中、華南を取り戻した。

蔣・毛の戦は、西安事件（1938）による国共連合・対日協力戦争の十年を除いて、廿一世紀の今日まで続いている。

引き続き、盧溝橋（1937.7）以来十年にわたる対日戦争、第二次世界戦争連合軍中国戦区最高司令官（1942）、続く国共内戦、更に台湾に移って（1949.12）大陸反抗の二十五年。

合計すれば、蔣総統の反共・反日五十年にわたる戦争資金を、惜しみなく支えてきた浙江財閥の膨大無限な財力は測り知れない。

(7) 浙江財閥工作

大川先生は、昭和十八年以降、特に頻繁に上海を訪れて、中国要人と会談しているが、板垣支那派遣軍総参謀長からの手紙にもある「浙江財閥を相手とする対支工作」の詳細は分っていない。

一九四〇年一月十三日。支那派遣軍司令部より、板垣征四郎中将からの書簡。

『浙江財閥を対手とする対支工作を盟兄に御願いする件、並に一年六万円軍より援助すること、但し対米工作の成就を以て前提とする等の御提案委細了承仕り候。』(3)

大川塾寮長・山岸敬明は、「この新会社（汎太平洋通商航海会社）は、米国の資本と日本の技術を合わせて、中国大陸における綿花栽培など種々の大規模な産業開発を目的とする合弁会社であり」、実現すれば、日米関係、支那問題も一挙に解決できると自負していた。

参議院議員・稲嶺一郎は、

「戦時中、しばしば上海に出かけられ、上海を拠点にしてしきりに浙江財閥と連絡し、秘かに蔣介石側と交渉を行っておられたようである。

(8) 大川先生の「死力を尽したき存念」

肅啓

日本も愈々興廃の決せられる非常時と相成り申候。月末にはまた支那に赴き、行詰れる中日干係の打開に死力を尽したき存念に御座候。日本に取りて可能なる唯一の活路は、中日干係の好転と被存候。匆々

昭和十八年九月十一日　　大川周明

肥田春充先生　待者

右の手紙以後も三度上海を訪ね、必ず蔣君輝はじめ紡績業界の巨頭に迎えられ、仏租界趙主教路に泊り、「群鳥喧時鶴一声」の風貌の持主と親しまれていた。

(9) 大川先生と蔣君輝

すでに戦争を見通していた先生の「行詰れる日中干係の打開に死力を尽したき存念」は、戦争の帰趨、或は体制がいかに変ろうとも、太平洋平和構想は將来のため、これを貫ぬき、浙江財閥とも提携して中国の綿花産業、紡績工業、更に太平洋の海運産業に合弁事業を目論見していた。

紡績業界のリーダーは、中華民国紡績聯合会秘書長・蔣君輝（常務理事・江上達）であった。

蔣君輝は、風光明媚、景勝地、太湖の北・常州の生れ、東京高等師範理科を卒業し、帰国して、各地の大学講師を歴任し、教育家として国民政府から在日留学生監督処長に任命された。

蔣君輝が初めて大川塾を訪問したのは昭和十四年七月八日で、この時は大川所長が「中国人王氏」と紹介し、王氏は「言忠信、行篤敬」(註)と題して講演し、先生が通訳をされた。

大川先生は、全面的に蔣君輝を信頼し、石原莞爾將軍に、「最も誠意をもった人」、「お互いに同志と思って」と紹介している。

(註)「忠信篤敬」言語をまことにし行事を篤くつつしむ。
論語、「子張問行、子曰、言忠信行篤敬、雖蠻貊之邦行矣」（貊は支那北方のえびす）

蔣君輝　姓は蔣介石一族を示し、彼を通じて、先生のことは蔣介石に流れ、またその逆も充分に考えられることである。

彼は終戦後、蔣介石から陸海空軍甲種一等勲章を授与され、戦時中は陸軍上校（大佐待遇）、つまり諜報員であった(4)。戦時中は弱者支那のために日本と戦い、終戦後は敗者日本のために支那と戦った。国民政府の戦犯名簿作成委員に加わり、国民政府の戦犯狩り行過ぎを押え、既収容

戦犯の釈放に努力した。

また上海に上陸した連合軍から日本に対する、日本人婦女子五百人を慰安婦としての供出要求を知った彼は、秘に蔣総統に訴えた。総統は「対日要求は全て国民政府を通ずるべし」と連合軍に申し込んだため、この難題は立ち消えた。

日本大使館は、日本人戦犯の釈放のために働いたことに対して感謝状をもって叙勲した。

蔣君輝の盟友・大川塾の理事・岩田冷鉄は、彼を追悼している。

「君は日支激動の時代に生きて両国の間に脈々と流れる地下水存在の信念を貫き通し、その具現に身を以て戦って来た。」蔣君輝は、戦後日本に永住し、大川先生のご葬儀に中国人代表として参列し、日本で死去した（昭和57年）。

日支三千年の歴史は流れる。

蔣君輝「願わくは、お互いに東洋文化の継承人を以て自任し、痛癢相関、道義是尚の精神を忘れざらんことを」

蔣介石「怨に報ゆるに徳を以てす」

大川周明「吾々の精神、即ち日本精神は、支那の思想文化、印度の思想文化を受入れることによって今日あるを得たのであります。即ち儒教と仏教を取入れ、その思想を根底とした文化から今日の吾々の精神が出来上がっておるのであります。」

3. 大川先生と呂運亨

白人の植民地解放を叫んで、自国の植民地に横をむいて知らぬ顔はできない。

先生は朝鮮の事情を憂慮していた。

先生は若手志士・呂運亨に白羽の矢をたてた。

呂は青年のころ朝鮮独立運動を起こしたり、共産党に走って米国に追われたりしたが、宿命的日本の統治下にあって、朝鮮の独自性を貫ぬく方針に大川先生とは民族を超えて断金の交わりをした。その頃米国にいた李承晩よりも人々の人望を集めていた。

先生は門下生（狩野 敏）に信書を預けて京城に送った。

呂は「大川先生は私の最も尊敬する一人です。先生ほどの方からこれほど見込まれた私は光栄です。士は己れを知る者のために死ぬといいます。幸いに先生の驥尾(キビ)に付して(5)アジア民族永遠の平和のために微力を捧げ得るならば、私の死花も咲くでしょう」と、上京して先生と肝胆相照らす。

呂は、先生の肝煎りで、外務省からの行動の自由と費用の申し入れをきっぱり断る。

「私の双肩にはアジア十億の生死が掛っていると自負しています。日本政府から費用が出ているとしたら、それが他民族に知れると知れないにかかわらず、私は完全に日本の回し者になってしまいます。私の自負は半減し、私の誠意をこめた説得も、及ぼす効果は全滅することは明らかである」と。

呂は五度くらい上京したが、記録は何もない。彼は風の如く仏印に飛んだ。

小磯国昭大将が朝鮮総督に任命され、半島の著名人を招いた祝賀会の席上、呂は日本憲兵隊に逮捕され、一回の取調べもなく、禁国一年半を言い渡された。

先生の小磯宛書簡を託され、獄中に呂を見舞った狩野敏は、

「水の如く淡々として語る烈々たる魂の躍動に打たれた」と述懐する。

戦争が終って、李承晩が大統領に就任する。呂は衆望を負うて副大統領に推されたが、日ならずして、一九四七年、凶弾に倒れてしまう。若き志士、花開かず。無念。

（註）

(1) 田中隆吉著作集 266

(2) 同右 105

(3) 大川周明関係文書 634

(4) 関岡英之「大川周明の大アジア主義」122

(5) 「驥尾(キビ)に付す」驥尾は良馬。史記に青蠅さえ良馬のあとについて一日に千里も行ける。才能のない人が賢者のあとにつき従って事を行えば実力以上のことをするの例え。

二、大川先生の対米戦争回避工作　「日本は米国と戦うべからず」

1. 汎太平洋通商航海会社の設立

社　名　汎太平洋通商航海会社
　　PAN-PACIFIC TRADING AND NAVIGATION COMPANY
設　立　一九三九年八月三〇日
本　店　アメリカ・ネバダ州カーソン市ノース・カーソン・ストリート511 (1)
資本金　三億ドル
社　長　ジョン・F・ドーラン（John F. Dolan）(2)
営業内容　アメリカと諸外国、特に東洋・太平洋地域との間の全ての商品の売買・輸出輸入業務
営業開始　九月二三日　ロサンゼルス事務所において

（註）(1) カーソン市はネバダ州の州都。サクラメントの東北方五〇〇km、タホー湖岸の避暑行楽地、一八五八年建設。
(2) 社長ドーランはカリフォルニアの不動産王・共和党保守派の有力者H・チャンドラーの秘書を二十年務めた実務者。

石油・ウォルフラム鉱 バーター貿易経過表

1938. 7	米国、対日輸出禁止（金属・武器）
39. 8	**パン・パシフィック社** 設立（ネバダ州）
. 9	ロサンゼルスで営業開始
.12	米国、対日通商航海条約廃棄
40. 7	米国、対日・石油輸出許可制
.10	**パン・パシフィック社**、ガソリン6万トン輸出申請 米国国務省許可　EB52号
41. 2	**パン・パシフィック社**、アメリカ・メタル・オア社とウォルフラム鉱1,000トン契約
. 5	メタルス・リザーブ社と再度ウォルフラム鉱3,000トン契約
. 7	米国、日本資産凍結
. 8	米国、対日石油輸出全面禁止
.12	太平洋戦争勃発

（註）1．社名をパン・パシフィック社と略称。
2．ガソリン6万トンの日本輸入がおくれたのは、EB 52号のオクタン価75－77に対して日本大蔵省が飛行機用92オクタン価を主張したため。
3．輸入ガソリンは昭和通商に売却されることになっていた。

ハル国務長官

10月25日，1940

大統領宛メモ

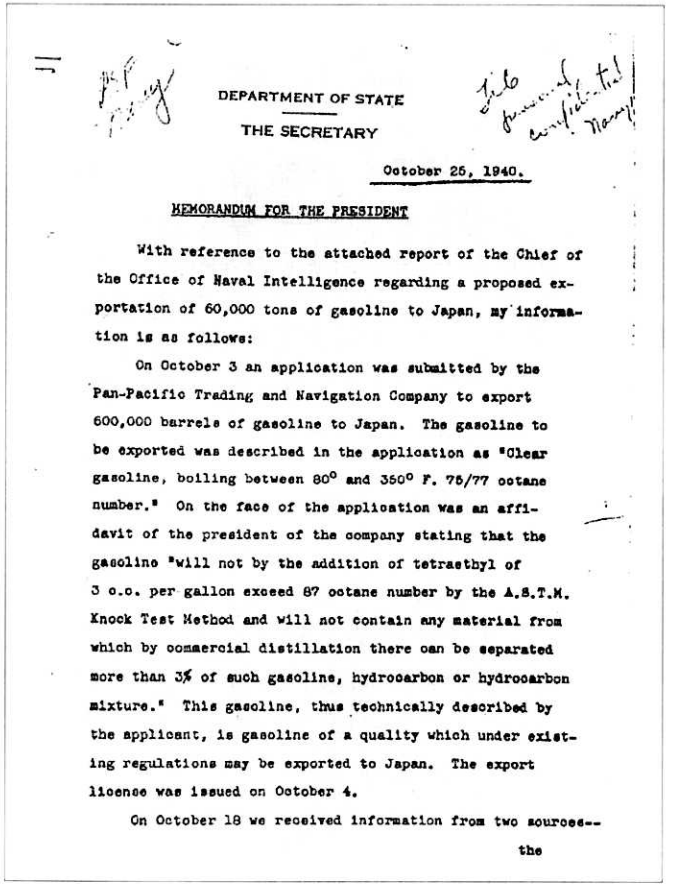
日本へガソリン60,000トン輸出申請に関する同封の海軍情報部長報告に関連して、私の情報は下記の通りである。

10月3日、パン・パシフィック通商航海会社からガソリン600,000バレルを日本へ輸出許可申請を受け取った。輸出ガソリンは 80° から 350° F. でボイルする75/77オクタン価の“クリア・ガソリン”として申請されている。申請書には会社代表者は宣誓書に供述している。

“ガソリンはガロン当たり30.0の4エチールの加入によってA.S.T.M.ノック・テスト法.87オクタンを超えないこと、更に商業蒸溜によってガソリン、炭化水素、又は炭化水素混合物の3％以上を分離することのできるいかなる物質も含んでいない”

申請人にかく技術的に記述されたこのガソリンは現行対日制限法以下の品質のガソリンである。輸出許可は10月4日発行された。

(註) A.S.T.M. (Standard of American Society for Testing and Materials)
試験並びに材料に対するアメリカ学界基準



DEPARTMENT OF STATE

THE SECRETARY

October 25, 1940.

MEMORANDUM FOR THE PRESIDENT

With reference to the attached report of the Chief of the Office of Naval Intelligence regarding a proposed exportation of 60,000 tons of gasoline to Japan, my information is as follows:

On October 3 an application was submitted by the Pan-Pacific Trading and Navigation Company to export 600,000 barrels of gasoline to Japan. The gasoline to be exported was described in the application as "Clear gasoline, boiling between 80° and 350° F. 75/77 octane number." On the face of the application was an affidavit of the president of the company stating that the gasoline "will not by the addition of tetraethyl of 3 c.c. per gallon exceed 87 octane number by the A.S.T.M. Knock Test Method and will not contain any material from which by commercial distillation there can be separated more than 3% of such gasoline, hydrocarbon or hydrocarbon mixture." This gasoline, thus technically described by the applicant, is gasoline of a quality which under existing regulations may be exported to Japan. The export license was issued on October 4.

On October 18 we received information from two sources--

the

汎太平洋通商航海会社の石油輸出許可に関する米国・ハル国務長官のルーズベルト大統領宛メモ（ルーズベルト図書館蔵）（大塚健洋「大川周明」167ページ）

米国に設立された日米合弁会社パン・パシフィック社は、資本金三億ドル、当時も今もびっくりする大金、正に乾坤一擲である。否々、驚くのは大川先生の経綸の大きさである。日米戦を回避して、日、中、米の三国をテコでも動かす信念である。

先生は、石油のバーターにウォルフラム鉱一千トンを受注した。ウォルフラム鉱は中国の特産、中国に発注して半年、一年はかかる大注文である。

日米の技術、資本を動員して中国を開発する太平洋平和構想のスタートである。

九九%は成就（大川先生訓話、一九四〇年二月八日）

この仕事の第一段階は九九%成就して、来月中に実現し、否応なく日本を動かす力として認めさせることになるが、次の第二段階の支那工作は、多分来年三月を見込に完成することになる。それが成功した暁には、日本が現在の窮地を脱して大躍進をなし、世界史に偉大な足跡を印す第一歩となるであろう。

天空海濶（大川日記、一九四一年三月九日）

羽田飛行場から空路上海に向かふ。此度の旅行は三年来の対米工作に終止符を打つものであり、且つ日支事変を一挙に解決すべき重大なる意義を有するものであるから、出立するまでは心を悩ましたが、いざ空中を翔り初めると、心裡の葛藤は綺麗に拂拭され、無我無心になって了った。文字通り天空海濶の気持ちである。神に通ずる至誠を以て事に当る以外、如何なる方便も術策も無用である。（哲学者・神学者・大川先生が「神」と対話される場面であろうか）

因に、大川先生は一九三九年初頭、アメリカ側ハリー・チャンドラーと二〇億ドルの民間借款

を進めたが、ついに実現にいたらず、同氏の示唆をうけて合弁貿易に転換したという。

2. ウォルフラム鉱買付け

上海に飛んだ大川先生は、板垣総参謀長はじめ要路の各司令官に協力を依頼した。

ウォルフラム鉱は、南支那が世界生産の七〇%を占めていた。蔣介石政府はウォルフラム鉱の密輸出を厳重に禁じていた。

軍から全力をあげてのウォルフラム鉱買付命令が昭和通商㈱広東支店に下った。(註)

産地は、日本軍の入っていない敵地内にあり、まず中国人工作員を派遣して敵情を探りながら、土匪の頭目と接触、懐柔して保有する鉱石を放出させるという、命がけ危険な仕事であった。

買付けた鉱石を縦横の迷路・水路を二、三十トンのジャンクで運ぶのも、いつ襲われるか、全く油断できない危険であった。

船は焼玉エンジンのオンボロ・ジャンクに竹の皮の丸屋根を中央から掛けて、少しでも日本船に見えいようにし、交換物質の綿布、綿糸、硫安、薬草などを積んで行く。

集められた鉱石は、九龍の選鉱所で選鉱し、品位六〇%以上が合格品として、五〇kg入り麻袋に詰めて大阪の兵器廠へ送られた。

(註) 昭和通商株式会社。昭十四・七・二九「陸機密第六七号」陸軍大臣直轄の民間商社。三井物・三菱商・大倉商出資。資本一、五〇〇万円。社長 堀三也（陸大33期）

3. 寝耳に水

「寮長二年の回想」　山岸敬明

昭和十六年春頃まで、大川先生は日本と米国は決して戦うことなしと判断されていた。自身でも、徳川義親候をはじめ各界の有力者と共に、米国側政財界人、特に国務長官のあたりとも連絡をとって、極秘裡に対米折衝に努められ、汎太平洋通商航海株式会社の設立についてもほぼ成功の自信をもっておられたので、戦争は避けられると考えられたわけである。

この新会社は、米国の資本と日本の技術を合わせて、中国大陸における綿花栽培など種々の大規模な産業開発を目的とする合弁会社であり、この大構想が実現すれば日米両国間に戦争の必要はなくなり、中国問題も一挙に解決できると自負されていたのである。そして私もこの新会社の上海支店長に予定されていたものである。

大川先生は、開戦の直前まで、ハル国務長官から公文書が来て、計画が軌道に乗るものと期待されていた。十二月八日、突然日米開戦の報を聞いたときは、さすがの大川先生も全くの寝耳に水で、大分驚いておられた。

先生は、手元にあったそれまでの米国側との連絡書簡の一切を焼いてしまわれたので、あの時の先生の奔走尽力を伝える資料はなく、一般には殆どその経緯を知る人もない。

「大川博士の先見の明」　参議院議員 稲嶺一郎

大川先生から大いに啓発されるところがあったが、特に対中国、対米国関係について教えられるところが多かった。先生は一般に言われるような〝右翼〟ではなく、大戦前夜の東京で、私は先生が米国との関係改善のために種々奔走されている実情を聞かされた。

当時大川先生は日米の合併会社「汎太平洋通商航海会社」を設立し、米国から石油を輸入することに尽力したり、中国大陸における壮大なる開発構想を実現して日米の対立を解消すべく苦心されていた。

その後戦時中は、しばしば上海に出かけられ、上海を拠点にして、しきりに浙江財閥と連絡し、秘かに蔣介石側と交渉を行っておられたようである。（昭和五三年九月二一日、砂防会館にて）

全て焼却　第一期生　三浦琢二

その時、先生はストーブの傍らの机に向かって、電報を呼んで居られたが、私にそれを焼き捨てるように命ぜられた。私は命ぜられるまま、ストーブの火口をあけ焼きすてた。

この電報が、その時の先生の沈痛なお顔が今もって彷彿として思い出される。

第三章　みんなみ秘話

○数字は「みんなみ歌集」の番号を示す。

第一話　（みんなみ一号）

大東亜戦争開始前夜、豊田誠規一期生はカラチ領事館勤務。
スパイ容疑で英国官憲に検挙されて厳しく訊問された。
豊田「日本人として祖国日本のため働くのは当然のことで、
英国の人も、もしその立場にあれば同じ事をするでしょう」
豊田はついにその態度を変えなかったため、英国側は「日本青年恐るべし」と、
日本領事に話した。

一、大川先生 ①

駐タイ大使館　浅田 俊介 参事官

「大川先生はとんでもない理想家だ」

駐タイ日本文化館館長　柳沢 健

「私は大川が大嫌いであった。
しかし、今ここに居るあの青年達が大川の弟子であるなら、私は今日から彼に対する評価を
変えねばならない」（バンブアトン・キャンプにて）

1. コールフィールド女史　一期　岩崎 陽二

昭和十四年十二月二十四日、雪の東京駅ホーム

先生は中年のアメリカ女性に、

「この方はタイ国で盲学校を開くために、今からタイに出発する。諸君がタイに行ったらお世話になると思うが、諸君はこの方のすることをまねたらよい」と言って、彼女に「私の息子達をよろしく」と頼まれた。

彼女は、府立四中の英語教師で、タイの外交官から、タイに盲学校がなく目の見えない子供が動物のように捨てられていると聞き、アメリカに帰って盲学教育を学び、タイに盲学校を作るべく、その夜出発の日であった。

私は心中いささか不満であった。アメリカ人の、それも女のまねをせよとは。しかし、知らず知らず私はただ日本のみを良しとする流れに染まった軍国ボーイであったことを、まもなく反省させられた。

2. 先生の伝言　二期　友田 光男

昭和十七年の五月下旬、大川先生から武田信近氏に托された、「是非伝えてくれ」との伝言を受取った。

「大東亜戦争は、日本の敗北に終るだろう。そのことを肝に銘じ、それぞれの国に一人でも多く変らぬ友情を保ち得る心の友を作るよう努力せよ」と。

3. 身を鴻毛に　岩崎 陽一

昭和十八年八月、私は報告とお別れのために上京し、先生のお宅に伺った。

「君、残念ながら戦争の見透しはついたよ。これ迄以上、お国のために身を鴻毛の軽きに比して御奉公して下さい」と。

敗戦を覚悟しての先生の言葉は、私の胸を貫いた。湊川楠正成の討死を連想した。

〃青葉しげれる桜井の　里のわたりの夕まぐれ
　早く生い立ち大君に　仕えまつれよ　大君に〃

4. 「五年後に戦争が」　六期　岸本 晋司

昭和二十年四月初旬、所長室におそるおそる伺候し直訴した。

私「萩山に疎開して、学業がお留守で、ただのうのうの毎日が無意味と思われます。満州にでも行かせてもらえないでしょうか？」

先生「戦局は熾烈をきわめ、阿南陸相は本土決戦に備えている。六月まで待ちなさい」

終戦の玉音放送を拝し、中津に押しかけた我々に、先生は諄々と説かれた。

これからの日本の進むべき道、我々のなすべきこと、世界情勢に関することなど、塾生は塾生らしく本と末とを十分にわきまえ行動すべきであると。

特に私にとって耳が痛かったことは、

「与えられた畑の草むしりも満足にできないものに、何ができるか？」と。

先生はまた「五年後に戦争が、そうでなければ十年後に必ず戦争が起こる」と言われた。

五年後、昭和二十五年に朝鮮動乱が勃発した。

5. 東大病院の大川先生　二期　倉橋 正夫

真に狭い部屋だった。奥様がベッドに向かって椅子にかけて居られて、その後ろは通れない程であった。私も立ったままだった。

米軍或は監視の人もいたようでもなく、いと、たやすくお会いできた。

「先生、戻って参りました」

「福井の方は皆無事か？」

先生が私の生国をはっきり記憶しておられたのに、今も鮮烈な感激を思い出す。

「制服はあるか。これから直ぐ天皇陛下に報告に行くのだ。これを持って行け」と、奥様に紙片を求められ、便箋の真中に、

『天皇陛下　大川周明』と、万年筆ですらすらと書いて下さった。

この「紹介状」は大切に保存していたが、筐底深く秘しすぎて、今どこを探しても見当たらない。まぎれもない先生の特徴ある筆跡がありありと眼に浮ぶ。

二、大川塾

「書物に魂を打込んで、愉快な境地にならなければ、効はない。」

1. 入所から卒業まで　二期　山本 哲朗

中学校推薦は、各県一校、一校一名、四年修了見込、その他厳しい条件、身體強健、意志鞏固、秘密厳守、数理的才能、家庭的繋累少ナキコト、親権者同意等。

第一次試験は書類詮衡された。

第二次試験は東京の東拓ビルで行われた。私は母と初めて上京した。甲府盆地の夕焼富士が美しかった。

面接試験

「尊敬する人物は誰か？」

「西郷南洲です」

「尊敬する人物を呼びすてする奴があるかッ」

軍服の偉そうな試験官から一喝された。それから何を聞かれたか覚えていない。落ちても諦めよう。

合格通知はうれしかった。制服の寸法と靴の寸法を知らせよと書いてあった。

父は「所長大川周明」の名前を見てビックリした。

「日本一偉い人だから、しっかりしろ」と、何度も何度も言った。

研究所は見晴らしの良い高台に、建てたばかりのすばらしい建物であった。

恐る恐る入っていくと、もう皆来ている。長い廊下に並んだ。

番号！

「1、2、3、……19、20！」

四人ずつ五班に分れた。この番号で運命が決まったようだった。支給された作業衣も手を通すのが勿体ないほど、何もかも真新しい。田舎から着てきたものはすべて脱がされて、中身だけが自分。その自分も昨日までの自分は他人となって、「さようなら」して母がつれて信州へ帰ってしまった。

翌五月一日から、一瞬のよそ見もできない生活に入った。広い玄関に大太鼓があって、打ちならすのは学年当番。呼吸を整えて「さあ、打つぞ」と、「その響きで心が分るぞ」と言われた。

所長当番は、窓に向かって大きな先生の机、難しい洋書和書がびっしり並んだ書棚、ゆったりした中央の応接セット、広い窓、何もかも綺麗すぎて、手をふれれば、指の跡を消すのにもっと苦労する。鳥の声をききながら気楽なのは庭当番。楽しいのは炊事当番、大きな釜で四十人のメシを炊きあげた、直径一メートルもある大蓋をあげる時の嬉しさは忘れられない。

食事前には礼拝、所長訓話があった。

朝の礼拝の「身滌大祓（ミソギオウハライ）」は短く簡明であったが、夕食の「大祓詞」はとにかく長かった。とても覚えられない。覚えられたら神主になれただろう。

「己が母が犯せる罪、己が子が犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪……」（母と子はこんなに罪をおかすのだろうか。）

大川先生の処には大勢の来客があった。我々はコチコチになって自己申告をした。

松井大将、土肥原中将、東條中将、松岡洋右氏、それから……どなたも新聞で見るより、ずっと立派で、しかも優しそうな方たちであった。

寮の**モットーは「正直と親切」**、将来アジアの人の中に入って共に生きる「まこと」の友人をつくることであった。勉強は無試験、無競争で「己をつくる」こと。寮歌は二期生渡部亨作詞、中島菊治作曲である。中島先生は宮内庁の楽師さんで笙を奏じて朗詠を教えていただいた。

この頃、先生からアメリカとの石油貿易が成功した話をきいたが、先生のお仕事については我々は何も知らなかった。ただ一途の勉学に青春をぶっつけた毎日であり、悔なき全力の日々であった。そして、夢中ですごした二年の月日がまたたく間に終って、大川先生から卒業証書を一人ひとりに渡された。さらに墨痕鮮やかな揮毫をいただいた。

2. 食糧難時代　六期　石田　龍

寮生活で、多くのことを学んできたが、食べ物のことにふれずして語ることはキレイ事にすぎると言わざるを得ない。

（炊事当番） なにかの料理に腕をふるった覚えは全くない。

直径一メートルもある大釜で貴重な飯を炊いたこと。菜は僅かばかりの油をたらしてゴマかしたこと。味噌汁に寮庭を探し回り、ウラナリのヘチマを薄切りにして具にしたことは好評を博したこと、くらい覚えているが。

飯を盛り付けるときに、自分の丼に人知れず飯を詰めこむのに苦労した。他人が配膳するので、ちょうど自分のところへ来るように深い読みに基づいた難しいパズルだった。

月次祭は、月一回唯一のたらふく食える場であった。肉は金輪際なかった。名もない魚スキであった。炊き始めるか否かに皆が箸を出し、菜っ葉もコンニャクも生のうちに、おまけに殆ど噛まないから、当然、腹下しとなり、高歌、放吟、支那放浪の歌、昭和維新の歌、妻を恋う歌、歌に酔って悲憤慷慨。終わる頃は便所は満員だった。

（外出の楽しみ） 日曜の外出許可は楽しみであった。国電の駅付近には一軒くらいは雑炊屋があった。必ず行列ができている。二時間、三時間待たされて運よくありつけたとしても、米粒がやせた菜っ葉の根っ子といっしょに濁った汁が丼一杯。それでも一杯流しこむや、走ってまた行列の後につく。ごくまれに二杯めにありつけても、寮の夕食の際、一日雑炊屋に並んでいた報告はなかなか言いにくいものであった。

（横山さん） 小使いさんの横山さんは親切な人であった。よく慰めてくれた。

「お前たちは可哀想だよ。こんな時代になっちまって、食う物も満足に当らねえでサ」

横山さんの部屋の押入れの大きな箱に、非常用の米が備蓄されているという情報が流れた。

横山さんが外出した。当番の一人を見張りに立てて部屋に忍び込み、押入を開けると大きな茶箱に米が九分目ほど。よく見ると米の表面には「大」の字が一つ。用意の容器に一、二升をかき出すと、手の平でならし、「大」の字を書く。まんまと成功して、その夜は満腹して安らかに眠った。

夢よ、もう一度。木箱にはピッタリ、紙で目張りをしてあった。あゝ無情！

同じ押入に赤ん坊の頭ほどの塊があった。わずかばかり削り取って、久しぶりの甘味をつくづくと賞味した。次のときには握りこぶし、その次のときは、かけらさえお目にかかれなかった。

寮長用の配給の酒が、量は少しも変わらないまま、しだいに純度が落ちていった。

（大豆と芋とごぼうの恨み） 昭和二十年四月頃、萩山の山名道場へ移って晴耕雨読、聞こえは良いが、やったことは畑の草むしり、これも余りまじめにやったとは言えない。それに堆肥作り、近所の農家への勤労奉仕、芋の買出くらいであった。既に挫折感が寮生を覆い始めていた。

この頃、米の配給は一日一食がかつかつで、あとは大豆とか芋をゆでただけであった。

大豆は虫にさされたあとが出来物になって困った。シラミとは飯炊き釜で皆の上着を煮こんで縁を切ったが、ノミとは最後まで仲よくした。

あるとき三拝して農家で買った芋は、苗を取ったあとのカスであったらしい。煮てもゴリゴリで、かじっても味もそっけもない。ごぼうは空腹を満たすのに大いに役立った。芋と大豆は恨み骨髄である。

（家鴨を食ったとき） 昭和二十年八月十五日、混乱から立ち直れていないある日。それまで萩山で飼っていた家鴨をつぶそうということになった。くじ引きで、死刑執行人と料理人が選ばれた。みんな瞬間の悲鳴と包丁の音を聞き血を見てしまった。

その日の夕食、宿願の家鴨パーティはまこと通夜であった。黙々と肉をかみしめながらも、ついにウマイという言葉は最後まで聞かれなかった。

獄中歌 ①

3. 暗号解読　五期　髙橋哲郎

私は、トルコ班で卒業と同時に陸軍特殊情報部、参謀本部内の暗号解読班に勤務を命ぜられた。暗号解読の最も盛んな国は、左右に大国をひかえたポーランドとかフィンランドであったが、

ついにアメリカとソ聯の暗号は解読できなかった。そこで中立国トルコに目をつけて、私と東大言語学教師の柴田武が徴用された。

トルコは第二次大戦最後まで中立で通した数少ない国の一つで、東京、ワシントン、モスクワ等、世界の主要都市に大使館を置いて、アンカラと暗号交信をしていた。東京では田無にある通信隊が無線電報をキャッチして、解読班に届ける仕組みになっていた。解読班は井の頭線高井戸駅の近く浴風園内にあった。

暗号解読は、机に向かって数字ばかり見ていれば分かるものではなく、キャッチボールをやっていて、突然インスピレーションが働いて一文字が解け始めるという調子である。

一年ほど経って解けた!!　完全に解けたのである!!

ある日、私の手元にキャビネ版のプリントが五〇枚ほど渡されてきた。それはトルコ大使館の金庫の中の書類と思われるもの約五〇枚ほどの写しであった。

ある雨の夜、三人の忍者がトルコ大使館に忍びこんだ。戸締り、金庫の中の書類の盗み撮り、翌朝は何事もなかったように戻さなければならない。プリントの端々に指の影が写っていた。カメラマンと三人になる。（戦後発刊された「陸軍中野学校」に大使館忍び込みの一件が出ていると聞いた）

その写しの中の一枚のみが田無から送られて来る電文と、日付と文章の長さが合致したのである。トルコ暗号はすらすらと解読されていった。

数日後、海軍解読将校が来て、わが解読班の実力に驚嘆、賞賛の言葉を残して去っていった。終戦の前日、精根込めて乱数表を作りあげた。私にとっては、二度と経験できない楽しい仕事であった。

三、タイ　「日タイ戦わず」

1. ベンチャペット　岩崎 陽二

タイの戯曲「廿五の厄年（ベンチャペット）」（昭和十八年駐日大使になったウチット・ワータカーン作）の近代性と面白さに取りつかれ、そのまま翻訳することになった。

パーリ・サンスクリット語源言葉は、当時の日本人には難解で、中国人・粛元川のタイ・漢辞典が唯一の頼りであった。分らぬ時はタイ有識者に聞いて夢中で翻訳した。一行の詩のために三日三晩考え、明け方に、はっと日本語が浮ぶことも度々であった。

六〇パーセント位進んだとき、作者に翻訳許可を貰いにいくと、秘書が出てきて励ましてくれた。

出来上がった原稿を真先に稲嶺先生に見せた。先生は大変喜んで、

「内心完成するとは思っていなかった。よくやった。預かって、日本に持って帰る」と。

先生は、これを調査局の「新アジア」に発表してくれたおかげで、宝塚が「母なる仏塔」と改題し、越路吹雪が主演して、大喝采を博したときいた。

戦後アジア経済研究所の村島さんから、

「あれがタイ語からの直訳なら、貴方は日本人で最初のタイ文字からの翻訳者です」と言われて、光栄の至りである。

2. 魚釣り　一期　逆瀬川 澄夫

昭和十五年八月、バンコクへ赴任。

タイ小学校へ入学。真新しい制服に半ズボン、革鞄を横抱きにして登校し、朝礼で校長先生から全校生徒に紹介された。

「あの日本人、大人なのに一年生なのは、本当に頭が悪いのかもネ」と評判。

唱歌の時間に「東京音頭」をせがまれて、前へ出て直立不動、太い短足むき出しにアンコール三度も歌わされた人気歌手誕生であった。

或る日、武官室から呼ばれ、土木技手と南タイを二週間に亘って旅行した。初めての国際列車、古都ペブリの緑の街並み。土木技手が持参したヨーロッパ発行の美女の裸体画集二冊は、挨拶に回ったタイ官公署の夜の招待ではタイ人の目をひいた。美人裸体にはいたずら書きがいっぱいであった。それは、カメラを持たなかった二人の眼に地形その他の記憶を再現するためのヒントを書込んだものであった。我々はマレー国境地帯深く旅をたのしんだ。

暫く経って、今度はプラチュアップキリカーンの海水浴場に神経衰弱保養に行った。

気分転換に海釣りを宿の主人に頼んだところ、若い腕の良い船頭を呼んでくれた。

「もっと沖の方がよさそうだ」と、私が注文すると、

「海岸の岩礁付近が穴場だよ」と、彼は言う。

彼は、私の強引さに反対もできず、大分沖まで出してくれた。私は釣糸をたらしても、上目づかいに海岸の地形、風物をしっかり頭に灼きつけた。

やがて戦争勃発。私はプラチュアップに上陸、はげしい二日間の戦闘後、警察隊との停戦交渉

に、一人の警察少尉が、「やあ！」と、手を出してきた。彼こそ、あの時の船頭であった。
戦いすんで、彼と駅前の飯店で互に無事であったことを乾杯し、肩をたたき合って「ハッ、ハッ」と笑い合った。

開戦の日

昭和十六年十一月、私と住田は社長（カオパープ社）に呼ばれ、「一時帰国せよ」と告げられた。心浮きうきであった。支度金で英国布地の背広一着を四日間で特注した。
見下ろすバンコクの街々が遠のく頃、中年のガッチリした麻服の男が坐席に近づいて、茶色の封筒を渡して去った。陸軍用箋に、
「西貢ニ降リテ南方総軍司令部参謀部へ出頭セヨ」と。
サイゴン着。司令部参謀部へ出頭すると、
「おゝ、大川博士の弟子か。よく来た。待っていた。国家非常の折、御奉公頼むぞ」
「軍属として奏任官中尉待遇に任ずるぞ」と。私達の年齢、経験では破格の待遇であった。

住田はアランヤ国境進攻部隊へ、私はプラチュアップ上陸作戦へ。
多数の輸送船、護衛艦艇が広い湾内にひしめき、連絡用舟艇が波をけたてて走り廻っていた。
八日午前三時頃、部隊長命令。
「止むを得ない。武力を以って進駐する。但し万一を考え、日・タイの国旗は携行する。」
時に昭和十六年十二月八日払暁、空に残星、プラチュアップ上陸作戦はその幕を切り、丸二日間の戦闘が開始された。

戦い終わって、部隊長は私の両手を握り、
「通訳官。貴官のお陰で停戦が叶い、これだけの犠牲ですんだ。厚くお礼を言う」
『本戦闘における通訳官の活躍の功績は顕著なものあり』

3. 荷物運び　倉橋 正夫

十二月一日、私と池田は浅田総領事からシンゴラへ出張を命じられた。
とても多いトランクの山があった。持つとベラボウに重かった。
翌日、シンガポール行き国際列車の特等コンパートメントに乗りこむ。大使館の屈強の何人かが来てトランクを運びこむ。シールに日の丸のマークが貼ってある。「ハジャイ駅では、三井、三菱の出迎えがある筈だから、それらの人が荷物を運んでくれる。決してポーターに持たせるな。持つときは軽々と持て」と言われた。池田は、トランクに腰かけて車窓を眺めていた。勿論眠る余裕はない。
途中何事もなく、出迎えの大勢の人に取りかこまれて、荷物は無事に領事館に入った。
岩崎、伊藤が居ったが、ゆっくり話す間がない。館内は中野学校やらの人で忙しく、「マレーの虎」谷 豊とも連絡がついており、あとは上陸が何日何時かということだけだった。
私たちが運び込んだ重たい荷物は、「無線電信機」と、不測の事態を防ぐための機関銃、その他の小火器であった。
シンゴラの身ぶるいするような雰囲気に、今更バンコクなど戻るものかと、勝野領事にかけあったが、

「待て、待て。まだ大仕事があるのだ。これを持ってバンコクへ戻ること。中には持ってきた無電の暗号書（乱数表）がある。途中列車が長時間停止した時は注意せよ。開戦の時は直ちに焼却せよ。ガソリンとマッチを添える」と。

無事にバンコクに帰った。

七日、夜は高島事務官邸で現地人に見せびらせの盛大なる「スキ焼会」

既に坪上大使はピブン首相に面会を求め、日本軍のタイ国通過の交渉に入ろうとしていた。

在住日本人の婦女子は、ひそかに港内碇泊中のバタビア丸に集結移乗していた。

カンボジア国境では先頭戦車の砲頭に、住田がタイと日の丸を振って突破していた。

一方シンゴラでは上陸の秘電は入ったものの乱数表が解けない。肝心の時刻が解けない。

海から響く機械音に海辺に飛び出てみて驚いた。すでにダイハツが岸に揚がって来ている。

在留邦人が車輌一台ずつを海岸に持っていくこと、シンゴラ駅の機関車を押収してカマを焚いて待っている準備は何一つ実施されていなかった。

タイの上陸地ではタイ守備軍との間で激しい戦闘になり、ナコンでは六名の邦人が虐殺された。二人は昭和通商の出張員で、私は田甫に埋められた遺体を掘り出してバンコクまで運んだ。当時二歳だった遺児は五十年父を探して、血痕のついた壁の前で涙の対面をする。

この上陸時のそごについては戦記物では、タイ軍或は英軍による暗号書の押収を恐れての焼却処分となっているが、実際は私がバンコクへ持ち帰っていたのだった。日時が読めていたら…。

後記「ナコン事件」（154頁）をお読み下さい。

4. 泰緬鉄道（戦場に架ける橋）　五期　山田　勲

泰緬鉄道は、泰国ノンプラドックからビルマのタンビザヤまで四一五キロ。千古斧鉞を入れない人跡未踏の難工事、インパール作戦に間に合わせる突貫工事であった。日本人一万人、現地人七万人、英蘭の俘虜五万五千人を動員。栄養失調、過労、悪疫で死者四万二千人、枕木一本に一人が眠っていると言われ、戦犯裁判で三十二人の死刑、七十九人の有期・無期を出す、無理な、日本の鉄道・土木工学の技術を結集した難工事であった。

復讐と分かれど逃るる術もなし

現地調査　逆瀬川 澄夫 ②

「日本軍は国際捕虜協定に違反し捕虜を酷使し多数の死者と病人が出ているが、食糧も医薬品も与えない」と。ニューデリーから短波放送を傍受した各地のインド人連盟が、インド兵捕虜の使役状態の調査を要請してきた。軍から、シンガポールとバンコクのインド人連盟から各三名と日本側から中外商業（日本経済新聞の前身）のシンガポール特派員斉藤英三郎氏とバンコクから私が指名された。

一週間かけて、奥地まで調査した。現場の労働は過酷に映ったが、それは日本軍兵士も同じで、「隊長自ら毎日ツルハシをふるっている」突貫工事であった。

捕虜の食事の采配は軍医に任せていた。惨憺たる有様で栄養どころか、飢えを防げれば上々であった。米はタイ産のポロポロ三等米、竹藪の細い筍と熱帯野菜のヤシ油炒めとオシタシだけであった。最後の夕食で二人だけに目玉焼きが出た。格別の待遇で、部隊で三羽飼っている鶏がやっと今朝卵を二個生んだので「客人に出しなさい」と隊長の命令だったと言う。

マラリア蚊が群がる上半身裸の作業にキニーネはなく、皮膚の弱い白人捕虜の勢帯潰瘍に薬はない。

現場は、バンコクからトラックで五～六時間、そこでは飽食、大量の残飯を捨てているのに、鉄道建設部隊の軍医が「食糧なし、薬品なし」捕虜虐待の罪で死刑になったことを思えば、断腸の思いである。

クワイ河の鉄橋はまがりなりにも完成していた。日本軍と捕虜の一致結束の成果だった。線路伝いに歩いて二日、ナムトックに壮観な瀑布、露天温泉もあって、誰が立てたか『野獣に用心』と立札があった。作業には象が多く使われ、樹林には猿が多かった。

枕木　山本 哲朗

マレー半島の鉄道は本線と枕木を残して、あとは全部持って行かれた。

マレー半島は熱帯ジャングル、木材の宝庫である。格好の地はパハン州の山地であったが、そこには無傷の共産軍何千かが残っていた。更に英国王室の財産であり誰も手をつけられない。

パハン州ベントンは木材の集散地、製材工場は軒を並べて、仕事はなかった。この町の頭家・呉福に交渉した。

彼は森林伐採の許可、米の充分な支給、そして日本軍を入れないことを条件とした。

私は、野豚が走り、孔雀が頭を出している草原を飛ばして、リピスの林野局の責任者を訪ねた。彼は古式豊かな英国式紳士で粛然と聞いてくれた。

翌朝彼は十糎もある古色蒼然とした金縁皮の台帖を出してきて、

「一区画与えます。サインして下さい」と言って頁を一枚々々開いてくれた。私はサインした。

昨夜おそくまで「インド独立のために」と熱弁したのが効いたらしい。

お米は東海岸ベラ川の港町クワンタンまでクアラ・ルンプールから二〇〇㎞。この川の夜は夜光虫が金波銀波に輝やき夢の世界である。クワンタンで仕入れた米は、途中の町の入口でインド人の警察に押えられ、その度に、「インドの独立のために」で通過した。すぐ米は無くなって、こちらは一泊泊りの海を楽しんだ。

ある時、パハンは危ないと言って、軍が車を出してくれたことがあった。呉福は慌てた。「軍が来れば命が危ない。あなたの命は絶対守るから二度と軍と来ないでくれ」と言う。終戦時にシンガポール街道は一時封鎖されたが、私の彼らの通行証で通過できたと聞いた。

労働者　倉橋正夫

私の吐根農園にも十五人の徴用がきた。軍に納めるエメチンを作っているからと断ったが、駄目だった。彼等は家族に泣いて別れを告げて、ゴム林を後にした。果たして何人が戻ってきたか。

一、五〇〇人を集めよ　友田 光男

昭和十八年八月半ば、労働者一、五〇〇人を集めよと命ぜられた。

シュエボーには私の東亜青年聯盟の支部があった。更にド・バマ・センエタ党の支部もある。共に心よく受けてくれ、牛車に揺られて募集の遊説に出たが、県知事の激励をうけて軍隊式に小隊・中隊を定め、隣組組織を作って留守家族を面倒見ることにした。シェボーからマンダレー迄七十哩、橋は落され千五百名の牛車の大行進が炎天下、土埃の中を往く。

終戦後タンビザヤから思出の泰緬鉄道でタイに向かったが、偶然にもシェボーの労働者数人が兵隊姿の私を発見し、飯場に皆を集めて大歓迎してくれた。また、皆が出し合ってくれた百バー

ツには嬉しさに感涙であった。

5. ハラキリ　逆瀬川 澄夫

ビルマ独立義勇軍に配属した私は、チェンマイ地区で募集したビルマ人志願者をバンコクまでの輸送命令を受けた。北部タイ地区鉄道司令部はチェンマイにあった。

問題は、どう、タイ側に特別列車を出してもらうかにあった。

義勇軍大尉の襟章をつけても不首尾は必定である。考えた末、領事館の友田・橋爪の両君の力を借りることとした。

私は、大川塾タイ班で二年、タイに来て大学に一年、タイ語はタイ人なみ。しかし、ここでは一切日本語で話し、両君に通訳を頼んだが、両君はアラビア語班でタイに来て三ヵ月、挨拶もやっと、大丈夫かな？

鉄道司令は、「日本軍の移動の便宜は図るが、ビルマ人の輸送のため特別列車は出せない」と、極めて頑固である。両君の通訳は双方の発言を十分にどころか、全く通訳になっていない。私はハラハラ、思わずタイ語が飛び出そうになるが、じーっと我慢、両手で軍刀を握りしめて黙っている。すったもんだの末でも、お互い全く通じないのだから、司令は「メチャイ・ノー」である。

私の軍刀が鳴った。わざとブロークン英語でおもむろに名（迷）セリフ。

〝アイ　ジャパニーズ。ユーキャンノット　アクセプト　ジャパニーズ　マスト　ハラキリ。アイ　ハラキリ　ヒヤー　ナウ〟

大袈裟に刀を抜く真似をして、左手で上衣あげ、右手で腹一文字に切る恰好をして見せる。

さすがの司令も慌てて、〝オー　ノォ！　ノォ！〟

三日後にチェンマイ発バンコク行き列車に、ビルマ兵専用の客車四輛を提供してくれた。

私は、同盟国の鉄道司令に対して得意のタイ語で非礼を詫び、心からお礼した。

6. 自殺未遂　寮友　武田 信近

何はともあれ、日本人がここに収監されていることをケントンの町の人に周知させることが、毒殺を免れる唯一の自衛手段である。覚悟を決めて、飲まず食わずの完全断食二週間。満願の次の朝、自殺の準備に取りかかった。

私はかくしていた安全剃刀で左手首の血管を切って、あたりに血を散らした。それからアテブリン五〇粒余りを噛みくだいて呑みこんだ。睡眠薬も飲んだ。そして久しぶりに腹一ぱい水を呑んだ。薬が吸収されないうちに指を突込んで戻さなければならない。

それから「ウンウン」、七転八倒の苦しみである。

異変に気付いた雑居の囚人達の知らせで、看守がかけつけた。半鐘代りの鉄板を打ちつづけた。トラックがとんで来た。警笛をならしつづけて、独房から私を病院に運んだ。

医者、看護婦総動員で胃洗浄、浣腸の連続である。腹が一ぱいになると、体重をかけてグーッと圧すと、水が口から鼻から肛門からの大噴水で、部屋の中は大洪水である。それがどの位つづいたことか。

脈を取っていたドクターが何度も強心剤らしいものを注射する。絶食と放血、腹一ぱいの水、溶けた薬物は急速に吸収された部分も少なくないらしい。脈も体温も大異常であろう。だんだん

気も遠くなり、感覚も麻痺していったようである。
ドクターは瞼を開いて瞳孔を調べた。私は瞬きできない。ウツロの目をして我慢である。警察も看護婦達も心配そうに見守る中で、ドクターも必死である。顔をたたいたり、脇をつねったり、くすぐったり、笑いも出来ない。つらい苦しい辛抱である。
真夜中に起上がって、あたりをキョロ・キョロ見廻した。ドクターはじめ全員の歓声があがった。枕元のカルテに書いてあった。
「十三時間意識不明」
この病院は、町の中央の小高い岡の上の教会と、くっついて建てられていた。バンガロー風の清潔な建物である。神父や修道女達が代る〳〵見舞にきれくれた。
「日本人が捉まっている」と言う噂は町中に広がったらしく、花束や果物、卵、ケーキなどを持って訪ねてくれるシャンやビルマの女達の見舞いも、跡を絶たなくなった。
神父は、胸の十字に手をよせながら祈ってくれた。
「神に授けられた生命を大切にしなさい。神は常にあなたを見守っていられる。私も一日も早くあなたが両親のもとへ帰られるよう祈っています」
この本当に善意の人達を目的のためとは言へ、完全に騙し終えての悲しい一期一会である。

7. 「ナムソム・ボーイ（ジュース・ボーイ）二度の軍使　岩崎 陽一

（山下司令官の通訳） 開戦と同時に南タイに上陸した山下兵団司令部は、山腹の要塞に立てこもったタイ軍司令官と、なんとか停戦を実現しようと、参謀一名と通訳に私を軍使に選んだ。銃

剣の林に囲まれたタイ軍司令部に到着すると、顔なじみの南タイ州知事や地方警察司令官が飛んできて「ナムソム・ボーイ・イワサキが来た」と私の手を握った。以後、山下司令官がタイに居る間、専属通訳を果した。

（日タイ戦わず） 昭和十七年夏、日タイ間の雲行きは怪しくなり、「明朝五時を期してタイ国軍が日本軍を攻撃する」と情報が入った。この情報が真実とすれば、日本軍は先制攻撃以外に手段はない。その夜、大使館内で極秘会議が延々と続いた。
私が呼ばれて、バンコク警察副司令官チャルンから情報を得るよう命ぜられた。時間も用意もない。意を決してチャルンの家を直撃した。副司令官はパジャマ姿でお誕生の孫と遊んでいた。
「ナーイ・イワサキ、何の用事ですか？」
私は、これこれ、しかじかと、ぶっつけた。
「ナーイ、何をばかな。それが本当なら、今頃こんなことをしていられるものか」
私の帰りを待っていた山田参謀長は、「ご苦労、信じます。」と解散した。
日本とタイを衝突させようとした恐るべき情報を真に受けていたら、日・タイの今日はどうなっていただろうか。

四、マライ

「今ぞ　出で征く印度洋」

1. エンサイクロペディア・オブ・イスラム　倉橋 正夫

昭南では兵站宿舎オレンジ・ホテルに泊った。山本と私は毎日のようにラッフルス大学と植物園へ出かけた。大学では膨大な数の書棚を、西南アジア関係の図書を探した。

アッと息をのむ本に出会った。

"The Encyclopedia of Islam VOL. I・II"であった。

目黒時代、蒲生先生が「ぜひ欲しい本です」と嘆かれたのを再三耳にしていた。

一日、花屋から全部の花を買ってブキ・テマへ行った。両側の並木は折れたり倒れて、満足な木は一本もなかった。まだ硝煙の臭いも血痕も残っていた。根元に花を捧げて回った。軍用車が通るだけで人通りはなかった。

2. 産業開発　倉橋・山本

倉橋正夫と山本哲朗は昭和十七年三月、シンガポール軍政監部に属し、半島の産業開発に当った。倉橋は、アミーバ赤痢の特効薬エメチンを採る吐根（イペカクアンハ）の栽培に成功して、戦後イギリス軍司令官から「日本軍が良いことをしたのはこれだけだ」と褒められたという。残念ながら、インパール作戦には間に合わなかった。

山本は東部ジョホールのイギリス王家のジャングルから泰緬鉄道の枕木を買入れ、更にウォルフラム鉱山を開発した。

3. 青春　秘情　山本 哲朗 ③

私はシンガポールを夜たった。ホームには誰もいなかった。カーブした線路が青い月に光っていた。その向うに母が立っていた。ランゲーンに入隊しなければならなかった。

クアラ-ルンプールで汽車はながく停った。サラセン風のドームが神秘の夜だった。

わが青春の町よ。さようなら。

「トワン・ミステ・マリ」（必ず帰って来て下さい）と、みんなが送ってくれた。

フレーザ・ヒルのホテルから親元をはなして連れてきて、一緒の家で生活した三人の子供達も、元気で学校へ行っているだろうか。

一人の女性が瞼に浮んだ。ある日曜日、私は財産を全部まとめて、中国人のタイピストに送ってやった。彼女は私の隣でよく働いた気立のいい娘だった。

「あなたと楽しい日々を送ったことを幸せに思います。私の全てを愛するあなたに送ります」と、走り書をそえた。

「どうして、愛していると言ってくれなかったですか？ ここに居る間に。」と彼女からの返事。

「私には、いつでも戦場が待っていた。だから、それは言えなかった。いつまでも、いつまでも、幸せに」と返事した。

今、私は戦場に行く。その娘は川向こうの住宅街に居る。目の前だが、今宵永久に渡れない橋となる。悔いはない。私はビルマで彼女の手紙をうけとった。

「愛しているなら、今日知って、明日死んでもいいのです。それが本当の愛です。必ず生きて帰って来て下さい。いつまでも、いつまでも、待っています」と。お互いの最後の便りとなった。

4. 将校クラブ

山本 哲朗

森の都クアラ-ルンプール郊外の高級住宅に日本軍の将校クラブがあった。

家主は中国人で戦前ロンドンの錫の相場を左右したほどの大富豪で、大広間にはイギリス王家の即位式に参列した古い写真が飾られていた。イギリス型老華僑の頭家で、子供たちはロンドンの大学を出ていた。

広い芝生に面した大理石のホールに、日本軍はタタミを敷きつめて、誰に聞いても〝アタイ、お茶の水よ〟と言う、塗りたくった女たちが毎日毎晩、三味線太鼓をだいて、〝ツーツー　レロレロ　ツーレロ〟歌って踊って、世紀のマレー作戦の勝利を祝っていた。

外には当番兵が青い月を見上げていた。誰か故郷を思わざる。

一九六〇年、彼を訪れた。彼は私に、

「ミスター・ヤマモト。これを見てくれ。何も恨むことはないが、広間のカーペットを半分に切られたのは忘れられない。」

カーペットはイギリス王家のＶＩＰを迎えるためにロンドンに特別注文したものであった。

私は錫鉱山の復興で彼の力をかりることも度々であった。

五、ビルマ

「濁流に伏して流るゝつわもの」

『凡そ天地の間に、亡国の悲哀にまさる悲哀はないであろう。それは魂ある人間にとり、堪え難き屈辱、忍び難き苦悩、限りなき寂寞でなければならぬ。それ故に総ての国の独立運動史は、悉く悲壮なる血と涙の歴史であり、ビルマの国民運動史も、その例に洩れない。

然るに大東亜戦争は僅かに半年ならずしてビルマ全土よりイギリス勢力を駆逐し去るに至った。ビルマの安泰を盤石ならしめるために獅子奮迅の努力を払うことこそ法師の英霊に対する最上の供養である。』「オッタマ法師を憶ふ」　大川周明

1. ワォーの決戦

（読人知らず・ビルマ独立義勇軍先遣隊？）

ワォーの近郊は日英戦車隊の真向からの激闘の地である。英戦車の秀れた火器に圧倒され、一度は敗色に包まれたが、持ちこたえた日本軍によって形勢逆転、ラングーン攻略への緒となる。

街道の両側の溝の中、田甫の中に重なり合い、或は点々と英軍兵士の死体が遺棄されている。死体はガスで水ぶくれ、カラスが群がり死体をつつき、舞いおりたコンドルがするどい嘴で肉をひきちぎる。死臭が鼻をつく、どの死体にも眼球がない。小石を投げたくらいではコンドルはびくつかない。棒切れを投げるとカラスの群はさっと飛び上がるが、近くの大木の枝に止まり、我々の通り過ぎるのを待つ。無数のカラスの群である。干からびた溝に仰向けになった兵士の破れた上衣のポケットから妻子と思われる写真が覗いていた。戦争とはこういうものか。涙も出ない非情さ。

ワォーはマンダレー街道をペグー（ペグー王朝の古都）から約50㎞北上した三叉路を東進したシッタン渡河の橋頭堡

2. 隻脚六十年　二期　田岡 義計 ④

至近弾炸裂。余りに近いので死角に入って左足首だけがスッパッとスッ飛んだ。焼火箸で叩かれた感じ。ヒョイと見ると足首から先がない。親指だけが残っている。骨二本で繋がっていて、肉は全くない。それが編上靴をはいている。足の上から下の土が見える。血が噴き出ている。

下手すりゃおれは死ぬナ。動脈をやられている。ゲートル切って縛りあげて止血。

何とか道路まで這い上って、自分の中隊のトラックに拾われて助けられた。ドンドン血がふき出している。

二月二十八日通り

ガーナの首都アクラのメーン・ストリートに「二月二十八日通り」がある。

大戦中、義勇軍としてアラカン戦線に投入された黒人兵が帰還して独立後、イギリスに「約束した給料よこせ、職よこせ」と、二月二十八日にデモした記念の通りである。西アフリカではビルマで戦った黒人兵に会うことがよくある。

なつかしの軍票

ナイジェリアからダメオ（ベニン）に入る税関。

フランス風のベレー帽の税関吏（パスポートを見ながら）

吏「貴殿はどうして片足が無いんだ？」

「俺はビルマのアラカンに置いてきたんだ」

吏「ソーカ？　わしもだ。ちょっと待ってくれ」

彼が奥から出してきたのは、すり切れたビルマの「大日本帝国軍票一〇ルピー」であった。

かって命をつないでくれたお札である。奇しくも二〇年後に借金を払わせられた。

3. 戦場の出合い　一期　大屋敷 久男

プローム滞在のある日、私は「独立運動に反対する者あり。その妻は日本人である」との報告をうけた。エー・ワン映画社の社長夫人という。彼女は田舎者を装い、黄粉を顔にぬたくりつけ、すっかりおびえ切っていた。

彼女と話し合っていくうちに、一部の反対派の中傷にすぎないことがはっきりした。

私は、異邦、戦場において、みごもっている一同胞の姿を見て、彼女のために安全通行保証の証明書を書いた。

後日、ラングーンでバッタリ再会し、しばし語り合う。元気な姿にやっと安堵した。

4. 青年道場（プライベート・スクール）　友田 光男

昭和十七年六月二十八日、東亜青年聯盟設立総会。

バーモ博士から祝金五万ルピー受取り。二万ルピーが贋札であったので、交換してもらう。

聯盟は、「日本人はいかなる社会運動にも干与することはまかりならぬ。」「ビルマ人が自主的に青年運動を起こすことは一向にかまわない」と軍政部から命令されていた。

塾長・舎監はビルマ人、私は顧問として起居を共にした。

塾の日課・生活。朝六時に起床し、大川塾と全く同じ。違ったのは、朝の礼拝は朝日に映えるシュ

エダゴン・パゴダ、日本語教師が私、そして生徒は誰一人便所掃除に手を出さないので、私が便所当番をする破目になったことの三つだけであった。便所当番は次々に私を手伝って交替するようになった。

塾は、敵産（英国財産）管理課長・稲嶺一郎氏の御配慮で、チャーチル・ロード（現在はコメンコチン路）の高台にあって、ベランダからはラングーンを一望し、パゴダと眼前に対していた。

青年聯盟の本部も同氏からボンダリー・ロード135,旧印度人の豪邸を与えられた。

稲嶺氏は厳しく敵産を管理し、日本商社の要請は全て拒否していた。

ある時、私は商社から頼まれて同氏に事務所をお願いに行ったところ、静かに諭された。

「君に貸したのではないよ。間違ってもらっては困るよ。あれはビルマの青年に貸したんだ。ビルマ人は長年英国人の召使だった。奴隷だった。彼等に独立したら、英国人と対等なんだという誇りと自信を持たせるためなんだ」と。私は、稲嶺氏の深慮に敬服した。

後日、オン・サンの堂々たる態度、交渉に、大英帝国アトリー首相がタジタジだったこと。終戦後、東亜青年聯盟が全ビルマの青年の心をとらえていたことは楽しい思出である。

5. バーモ暗殺未遂事件　友田 光男

昭和十九年二月十五日、浅井得一が訪ねてきた。彼はバーモ長官を暗殺するために来緬した。浅井の計画そのものに賛同したわけでもなかったが、ビルマ国防軍の中にくすぶっている反日感情並びにビルマ人の中にある反バーモ感情を考えた時に、バーモ長官を暗殺した後、オン・サン将軍を中心とした軍事政権を確立することがよいのではないかと、協力を約束した。

私は、浅井に、帰ってくるまで軽率な行動はとらぬよう念を押して、ウ・チョウ・ミイエンを同行して、オン・サン将軍の官邸に向かった。

オン・サンは夜分遅い来客から、バーモ暗殺計画を打明けられて驚いたが、

「私は国防大臣で、軍の指揮権は軍司令官ネ・ウィン将軍にある。彼と相談した方が良いだろう」と、賛成もしなかったが、反対もしなかった。

宿舎に帰って、浅井が居ないことに気がついた。彼はバーモ官邸に行ったという。

すでに事は終わった。計画は失敗だ。

十六日、午前七時半頃、憲兵が私を逮捕に来た。

憲兵隊の取調では、ビルマ軍の対日不信、ビルマ人が日本から離れている事実を詳しく説明し、今のような政策を続けるなら、ビルマ軍は必ず反乱を起こすであろうと申立てた。

軍事法廷　三月二十一日

問「バーモ暗殺後どうするつもりであったか？」

答「当然軍が収拾されるものと思っていました」

問「陛下が御推挙になったバーモ総理を暗殺するのは逆賊ではないかッ」

答「実際にバーモを推薦したのは日本軍当局であり、バーモ総理は必ずしもビルマ国民にとって良き指導者とは思われません。しかし、この事件で陛下の御宸禁を悩ましたことについては如何なる処刑にも余んじて受けるつもりであります」と答えた後、涙が溢れた。

最後に、「私と共に逮捕されたウ・チョウ・ミイエンは、その罪があるとすれば、私がその罪を負いますので釈放して下さい」と、お願いした。私に対する論告には厳しい中にも温かさがあっ

た。しかし、ビルマ国軍の反乱を言及したことについては、論調激しく批難された。

（求刑） 浅井　無期懲役　**（判決）** 監禁十五年
友田　監禁三年半　同　三年
牛島　同　二年半　同　二年

閉廷後、私は裁判長坂口大佐の部屋に呼ばれた。大佐は、「今日の君の態度は立派だった。ウ・チョウ・ミイエンは釈放した。明日一日だけ釈放するから会ってこい」と言われた時は、涙がでる程嬉しかった。ウ・チョウ・ミイエンは青年聯盟副委員長として東京で大川先生、遠山満翁に会えた事を一生の思出と語っていた。

判決後、一ヶ月位いたった頃、バンコクから菅先生が面会に来てくださった。

先生から「君を信じている」と言って下さった言葉が今尚忘れられない。

徴兵検査　五月十五日

ある日、私は炊事当番中に、ビルマ人未決囚が食事をとりに来たのと出会った。その食事はとても人間が食べられる代物ではなかった。慄然とした。

植木・刑務所長は、大川先生が五・一五事件での巣鴨拘置所の看守長であった由で、「何かの因縁があるのだろう」と言われた。私は、「どうか、彼等の食事の改善を」とお願いした。

その翌日から私は朝の買出しに看守と出かけ、ビルマ人の好む野菜等を買出して、食事は大いに改善された。

十一月二日、大佐から木村兵太郎司令官の署名のある軍罰免除の書類をもらって、「軍隊に入ったらしっかり頑張るよう」にと励まされた。六日タンビザヤ林独立歩兵守備大隊に入隊した。

六、印度

「二人で普通の日本人を見せよう」

1.『インパールを越えて』　国塚一乗

世紀のシンガポール作戦において、英印軍の投降作戦を成功させた二人の日本人の活躍を見のがすことはできない。その二人は国塚一乗中尉と大川塾一期の伊藤啓介であった。

『インド民族は、きわめて自尊心の高い民族である。古代の輝かしい精神文化はもちろん、英国がインドを植民地とする以前のインドの支配者ムガール帝国は、その華麗なアグラやデリーの宮殿、タージ・マハルなど、インド人が世界に誇りうるものである。

この偉大な過去をもつインド人の心を得ようとするなら、インドの伝統、文化に対する尊敬の念、インド人の生活慣習への同化しかない。それならばよし、二人は今日かぎり日本式生活はやめ、万事インド式にしよう。日本食は全廃。毎日、カレー・インド食をニコニコしながら手でこねて食べることにした。公務が終われば、インド人将校のように白い柔らかな腰巻に着がえて、インド煙草を飲む。上厠(じょうし)しても紙をつかわず、水で手をつかってインド式に処理する。そして、インド英語をしゃべる。

よし、二人で普通の日本人を見せようと決意した。まず日本人は、英国人とここがちがうということをみせなければならない。』

戦火砲火の雨降る中で、身に一鉄もない腰巻姿の「普通の日本人」が英印軍十万の心を掴む、インド独立に捧げた使命と情熱の書である。ここに引用させていただいた。

国塚氏は光機関シンガポール本部で私（山本）の上官であり、幅広い人間性、語学力は驚嘆の

連続であった。戦後カルカッタのインド人街の二階で、古書、絵画、民芸品に埋もれて、坐るところもなかった。国塚さんの「印度は三日でいい。それ以上長く居ることはない」と言われたのは忘れられない。（山本記）

2. ダイナマイトを喰った軍曹（イラワジ会戦　一九四五年二月）　二期　奥田重元

イラワジ川の茫漠たる中洲を偵察中、朴訥そうな軍曹に率いられた斥候に出会った。

「英軍も羊羹を食べるのでしょうか」

叢林には英軍の梱包多数が草や木の枝にカムフラージュされていた。

クラフト紙に包まれたダイナマイトであった。ゼリー状の肌ざわり、色つや、正しく羊羹そっくりで、嘗めると舌先は甘味も感じられたが、木箱には EXPLOSIVE と印刷されていた。

腹いっぱい食べたという軍曹に、「ダイナマイトが全量排泄されるまで激動を慎しみ、特に野糞は小石などの上はさけ、枯草のような柔らかいものの上にされると良いですな。さもないと爆発する恐れがありますぞ」と。本気にした軍曹は顔を引きつらせて聞いていた。

「冗談、々々」と打消したが、軍曹は部下を集めて「そろり、そろり」と去って行った。

3. シッタン渡河　山田　勲

永井と輸送指揮官大尉の下、ボース閣下、機関長・磯田中将、印度仮政府・日本大使館の高官ら、ラニー・オブ・ジャンシー婦人部隊を護衛し、乗用車六台、トラック十五台で出発した。

敵機は夜間でも空際を狙って低空で銃爆撃を休めない。

シッタンの渡河点につく前に夜が明けたので、ジャングルに待機。

ボース閣下の両側に立哨している時、「大丈夫だから休め」と言われた。

ドイツの鉄帽を被り、ダスターを着て、遥か西方を仰いでおられた姿を今でも忘れられない。

〝チャロー・デリ〟（進め！デリへ）

夢絶えて、落ち行く英雄の悲哀な姿、心情察するに余りあるものでした。

4. 永井の戦死　⑤

ジャンシー部隊の二艘の筏をつないでいたロープが切れて荒波に流されていく。

永井とロープを腰に縛り、暗夜の河を泳いで筏をつかまえた。ロープを結んで岸にあがった。

永井はその晩、濁流を渡り、その朝、爆撃で戦死した。

遺骨を抱いて　一期　石川信雄　⑤

穴を掘り遺体を毛布に包みました。

下士官が斧で永井の手首を切り落としました。一回で手首は切断できません。

　永井よ。痛いか。我慢してくれ。一緒に帰る約束だったのに…

私は胸が詰って、何も出来ませんでした。遺体を埋めて、手首を焼きました。

翌日、遺骨を抱いて、永井君と共にモールメンに向かいました。

5. チャンドラ・ボースの撤退　山本 哲朗

印度国民軍チャンドラ・ボースは、一戦も交えず先を争って三十六計と決めこんだ日本武士道に呆れ返って、ランゲーンで玉砕を覚悟した。しかし、最先任ロガナダン軍医少将の「ネタジーには印度独立の使命があるではないか」と、懇々たる説得に動かされた。

ボースは進む時は先頭、退く時はドシャ降り泥濘の最後尾の後を軍靴を血マメに染めて歩いた。

四月二十七日払暁、魔の川シッタンを渡ったネタジーは、途中何度も引き返して来る磯田・光機関長に「私の最後の一兵が安全に来るまで、車には乗りません」と自らいつでも戦える食糧、弾薬、手榴弾の入った背嚢を背おって、モールメン行進の先頭を五月一日まで歩き続けた。

五月二日、ネタジーはジャンシー部隊の泰緬鉄道の手配をすませた。

五月七日、途中橋が落ちていて行軍したり、休憩したり、昼寝て夜歩いて、ようやくバンコクについた。ネタジーは昼もいそがしくて寝なかった。

ボースは全員が汽車と船で出発するのを見届けて、自動車で鉄道に沿う難路をバンコクに向かった。同行したのは蜂谷公使、磯田中将、国民軍兵士一個分隊僅かの人であった。

ボースは将兵に「予は常に諸君と共にある」と誓った天の試練を克服して、五月一四日、バンコクに到着した。私もこの頃ビルマを撤退した。枕木は新しかった。峠の頂上スリー・テンプル駅に慰霊の棒が立っていた。ダリアの花が風に吹かれていた。捕虜が二、三人腰をおろして、もう話す事も尽きたのであろう。ただ黙って空ろの目、靴の先から汚い足が出ていた。

6. 偉人ボースの霊衣　一期　大塚 寿男

退却行軍の朝。山中に野営の一夜が明けた。ボース・磯田両将軍が並んで歩いている後姿を見た。ボースの後姿は周囲の大木をも圧する巨人の姿に見えた。

磯田閣下は、恰も巨人に従う小人の如く何とも小男に見えたことか。

全インド国民軍がネタジーと仰ぐボースの偉大さを、今更の如く涙あふれる感激をもって実感させられたのは、このときである。人間には霊衣というものがある。

7. 志士チョップラー

「インド本国に潜入させる要員数名を選抜し特殊訓練した。愈々某日夜トラックに乗せて、海軍基地（バタワース）迄運んだ。岸壁には潜水艦が眞黒な巨体を横たえていた。要員達は、待機していた支部長以下数名の関係者に簡単な言葉で見送られ、艦に乗りこんだ。（桝村）

港近くに平佐君が隊長のオスマン第一部隊があった。この部隊にチョップラーという温厚な紳士がいた。五十八歳、セレンバンの女学校長であったが、烈々たる祖国独立の志は固く、苦しい訓練に堪え出発に先立ち、チャンドラ・ボースからの

「神は汝と共にあり。成功を祈る」

と言う電報に感激し、心に刻んで祖国に向かった。

彼はアラビア海のカチャワル半島に上陸し無線で活動に入ったが、病を得て終戦少し前に祖国独立を念じつつ没した。彼の精神力の強さと固い信念は印度国民軍地下活動の鑑であり、印度独立の知られざる蔭の功労者である。（服部）

十九年に入り、インドから送信されてくる暗号電報は海軍根拠地司令部から受取ったが、電文は完全なものが少なく、中間が抜けたり、乱文だったりで、解読に苦労した。徹夜も屢々であった。内容は、インド本国における英印軍の配備、艦船の動向に関する情報であった。（桝村）

8. 山内秀三の自決（昭和十九年八月二十七日夜）　倉橋 正夫

「山内さんは、その晩、仲間同志で雑談したあと、

〝日本は不滅だ、アッハハ　アッハハ！〟

と笑って部屋へ戻り、シャワー室で左腹をかっ切った日本刀で首をひと突きして自決した。隣室にも呻き声ひとつ聞こえなかった美事な自決だった」と同僚は語る。

自決現場の朱に染まったタイルを涙ながら洗って片つけた倉橋は言う。

「山内さんは、ペナンで訓練指導しカルカッタへ潜入させた兵士が、英国軍に捕えられ、すべての情報を吐かされたというニュースが参謀部の耳に入り、その責任をとらされたのだ。

私は遺体の始末をした。涙滂沱。遺品のなかには、可愛らしい子供の赤い靴と青い靴が一足ずつ入っていた。

その十日後、その情報は間違いだった。虚報だったことが判明した。

せめて十日早く分かっていたら、山内さんは死なずにすんだのだ。残念無念。

山内さんはアズハール大学で学んだイスラムの権威者、一九四〇年六月十日には大川塾でイスラムの講演をなさったこともあり、シンガポールの軍政監部宗教教育科では共に働いた先輩でもあった。

思えば貴重な人材を失ったものと痛恨千歳に忘れられない。

終戦、バンブァトン特別抑留所で、英軍取調官から執拗に山内さんの行方をきかれた。死亡は架空でどこかに隠れていると見て探し回っていたようであった。」と。

9. オマル・トモダ　友田 光男

終戦によって、バンコク旧競馬場キャンプに収容され、印度兵が修理したジープの最終チェックをしていた。

ある日、警備のパタン族出身の軍曹が本を読んでいた。覗いてみるとペルシア語の小学生用教科書らしかった。二、三行読んでいくと、軍曹はびっくりした。

「どこで勉強した？」

「東京のモスクだ」

彼は、そのモスクは大きいか？　小さいか？　信者は？　驚いて、矢継ぎ早の質問である。

「名前は？」

「オマルだ。オマル・トモダだ！」

この日から、私は印度兵から〝オマル、オマル〟と呼ばれ、関心と好意を集めた。

ある朝、作業場に出ると、いつものように四、五人集ってきて、

「朝食は食べてきたか？」「うん、食べてきた」

みんな不審な顔をして、いつもと違う。

「オマル、今日から断食に入ったことを知っているか？」

「シマッタ！ 知る筈はない！ バレちゃうか？」
とっさに口にでた。あわててはいかん。
「ジハード（聖戦）だ。あなた方は勝って戦争は終った。私は日本へ帰るまで終ってない。聖者マホメットはジハード中は断食しなくていいと言っている」
「そうだ。そうだ！」と、今まで以上に煙草や砂糖を好意して呉れる。車で送ってくれる。
数日後、連隊本部に呼ばれた。リーダー格の将校から
「日本は戦争に負けたのではない。エムペラーの命令で戦いを止めたのだ。日本に帰ったら青年達に伝えてくれ。一日も早く再興するように。我々はその日を待っている」と。
その言葉に私は思わず涙が溢れるのを止めることが出来なかった。

七、ベトナム

「強いベトナムは民族的試練、修羅の坩堝から生れるのだ」

フランス破れたり。
「歴史の批判を受けるのは、ただ予一人である」ペタン元師
（註）ペタン（1856～1951）一九四〇・六月、フランス第三共和国首相、対独降伏、政府をヴィシーに移転。
四五年四月、逮捕され八月パリで裁判・死刑。デュー島で服役中死去。

一九四〇年代以降の仏印は、特にフランスの崩壊により煩わしい転変に翻弄された。
一九四一年七月、日本軍は、ヴィシー政府との「共同防衛に関する日仏議定書」による南部仏印進駐。議定書は仏印の主権を尊重し「静謐方針」を方針としたために、ベトナム愛国者は「一つの首に二つの縄をかけられ」弾圧される。
一九四五年三月、ヴィシー政府崩壊による平和か、武力行使か。明号作戦発動、フランス主権の停止。アンナン・ルアンプラパン・カンボジア三国の独立。
一九四五年八月、日本降伏、抑留。米英仏軍進駐、中国軍、ベトミン侵入。撤退。
そして最後に残された特別調査、残留。
変転極まりない運命に国家も個人もさらされていく。

1. 要人救出

(1) ソン・グォク・タン救出　二期　加藤 健四郎

（独立カンボジア王国首相）

一九四一年・9月、「日本人の一人も居ない所」を希望してバッタンバンに出張所を開設した。治安は悪く、陸上、海上に盗賊、海賊が横行し、加えてタイ国保安隊の暴行に住民は泣いていた。

ある日、如何にも骨太のカンボジア人を匿うことになった。クメールを愛し、独立に命を惜まない気迫に圧倒された。

彼を日本軍の軍属に変装させ、二人で大洪水の町々を小舟を乗りついで、やっとの事でバンコクの日本大使館浅田参事官に托した。別れるとき、彼は握った手を離さなかった。

首相になった彼に会ったとき、彼は東京で大川先生にお目にかかり、大川塾を見学し、「是非あの学校を作りたい。あなたに頼みたい」と握手した。

彼の手には、大川先生の心が流れていた。

敗戦も決ったとき、彼とトンレ・サップ（大湖）に潜入して残留を約束して待ったが、「フランスに逮捕された」と連絡されて、再び銃や竹槍のベトミンが群がる中をサイゴンに帰還した。

(2) ゴ・ディン・ジェム救出　加藤 健四郎

（安南王国内務大臣、ベトナム共和国大統領）

ゴ氏は、ベトナム独立の黒幕として、フランス当局の逮捕は目前に迫っていた。

ゴ氏の自宅ツーランから安全な汽車で脱出し、途中から車でサイゴンまで突破することになり、

私と三浦さんが行くことになった。

ファンラン駅で待ち合せした。客がみな降りて誰も居なくなったとき、粗末な安南服を着た労働者が頼りなく歩いてくる。私は数間先を歩いた。三浦さんは木蔭に車を置いていた。彼を押し入れて、左右から守って、いつでもの用意に拳銃を握ってサイゴンへ走った。

この頃から形勢は逆転しはじめ、俄に安南人の逮捕が相ついでいた。

呉廷琰（グオディンジュム）　非業の最期を悼む　一期　西川寛生

一九五〇年八月二十二日、フランスの豪華船マルセイエーズ号が横浜港に静かに着岸した。

ジェム氏とは五年ぶりの再会であり、福田屋旅館の歓迎夕食会で、呉氏は「目下のベトナムではフランスの推すバオ・ダイ帝の南ベトナム政権とホ・チ・ミンの社会主義勢力の北ベトナムとが争っているが」「その両陣営から超然として、自らの信念に基づく、真の民族独立への道を志す」との抱負は感銘を与えた。

一九五四年七月ジュネーブ協定、フランス植民地が終りベトナム独立。一九五五年十月、国民投票の結果、バオ・ダイ帝は退位し、ジェム首相が初代大統領に、「ベトナム共和国」を宣言した。

それから波瀾八年、謎の軍部クーデターによって護送装甲車の中で射殺され、悼ましき非業の最期をとげた。

夫の不測の死を知らされたマダム・ニューは、「これが終わりではありません。始まりです」と言ったと伝えられたが、まさに非情の歴史が待ちかまえていた。

2. 明号作戦（一九四五・三・九）

(1) 安南国王救出　加藤 健四郎

古都ユエは、国王バオダイの建国以来二百年、王城の地である。
日本軍は武力処理後「帝位廃止は行わない」方針であったので、皇帝救出が最大の任務となった。王宮内の出来事、皇帝の動静は、朝食からお休みまで、一切もれなく即時に連絡が入るようになっていた。
一九四五年三月九日、昼になって、皇帝夫妻が王宮内に居られない連絡が入った。皇帝専用機も侍従もそのまゝであると。
夕闇が街の角々まで忍びよってきた。城門の巨大な鉄扉も閉じられた。
私は金子大尉と黒の安南服に着がえて、腹に拳銃をはさんだ。
「7・7・7」　武力行使!!　明号作戦開始。城門は外から押せばすぐ開いた。
城壁から飛び出してくる安南兵士の背後からフランス軍の銃撃、無残！
王宮は弾幕に阻まれて進めない。濠に小舟がつながれていた。舟べりに銃弾がピチピチ水煙をたてる。夜空に曳光弾が一瞬美しく流れた。王宮マンカ城の背後に回った。
独歩大隊長から、「どうも安南人の要人らしいが、夫婦者を捕えたから調べてくれ」と。
大型高級車に青年紳士と品の良い婦人が乗っている。皇帝だ！
「安南の独立のための戦いである。
明日から安南人の安南です。どうか　ご安心下さい」
皇帝は車から出られて、「今日は私にとって永久に忘れられない日である。よき記念日である」

と、固い握手をはなさなかった。
三月十一日正午、戦いすんで、帝は独立を宣言した。
三月十五日、独立記念祝賀会に街はわいた。
私はその日、ダォ・ズン（民声）新聞社の応接室で藩佩珠の同志と話していた。
彼は私に「血を流さないで本当の独立はできない」と。

(2) マルタン城攻撃　五期　田中　寛

三月九日、明号作戦。中隊長の伝令通訳。出陣式に茶碗酒を飲んで緊張して身震い。
「さあ、行くぞ！」と轟々と地響きを立てる戦車を先頭にマルタン兵舎の夜襲に出動する。
何せ、節約で射撃は許されず、擲弾筒と軽機のみの攻撃。
敵の火線は衰えず戦死傷者が出始めた。
中隊長「田中ッ。あの壕に行って怒鳴って来い!!　抵抗を止めろ！
さもなくば皆殺しにするぞ！と」　私は走って壕の近くに伏せ、
「セッセ・レザム!!　セッセ!!」　ドナッタ！　ガナッタ！
分ったか、どうか、分らなかったが、母がくれた千人針を頼りに叫んだ。
戦車砲の攻撃、敵火線の衰え、
中隊長「第一小隊！　突っ込め！」
指揮班も突撃に入り、走った、走った。当るなら当れ、破れかぶれのクソ奴胸。
入隊したばかりの一ツ星。鉄砲も撃ったこともない初年兵のお手柄であった。

(3) 船舶工兵一等兵軍使　一期　三浦 琢二

真暗闇の中をフランス軍要塞の中央門に向った。白衣、白帽、白手袋、白靴の立派な大日本帝国陸軍の軍使である。

「日本軍の軍使である！　司令官殿と会談したい！」

時間がない。正十二時まで十分しかない。やっとフランス軍指揮官が鉄扉の向こうに出てきた。顔は見えない。押し問答のくりかえしである。

「無血開城を要求する。ダコールか、ノンか？」

「ノン、ノン、司令部から命令がない」

その時、一発　ドカーン。メコン河の砲艦が発射した。数メートル、わき!!　一番危険は私だ。数秒で正十二時である。

「ダコール！　受諾する！」

私は持ってきた白旗を左右に大きく振った。交渉妥結！　命拾いしたのは私だ！

日本陸軍史上、白旗を振った兵は私たゞ一人であろうと末代までの自慢である。

(4) 高台教信者と共に（カオダイ）　西川寛生

一九四五年二月、安部隊サイゴン隊に勤務。

安部隊はフランス軍武装解除、重要施設接収、独立運動党員の糾合を任務とした工作部隊であった。高台教は信徒二〇〇万、本山タイニン市、クオン・デ殿下を推戴して独立運動を推進していた新興宗教であった。

三月五日、教団代表者との最終打合せで教団青年隊を動員しての協力に達した。早速教徒二〇名と共に南部デルタ地区の要衝タンアン市に向かい、フランス人を排除し掃討作戦を終了した。

四月十二日、軍司令官から高台教協力が第一位の明号作戦戦功表彰を受けた。

3. 米軍上陸の想定

(1) 象　山を上る

六月に入り、米軍のインドシナ上陸を想定して、サイゴン放棄、安南山脈密林遊撃戦の準備に山岳民族十数名と象五頭を連れて、バン・メ・トウの空家に本格的訓練を開始し、酋長の長男の協力承諾を得ることができた。象の言葉までは通訳できなかった。

(2) 通信網の移転　三浦琢二

一九四五年三月、サイゴン軍政管理部隊勤務。

サイゴン郵政省には日本から有線、無線の専門家二名が配属されていた。管理部隊長加藤少佐はフランス郵政省の技師長と極秘裡に現在海岸線に沿って設置されている通信網を海岸から遠くはなれた山岳国境沿いに移転する計画を練っていた。

(3) 慰安所監督官　三浦 琢二

私は、中村機関に戻って、思いもかけない仕事の併任となった。慰安所は軍参謀部直轄で、監督官の仕事は夕刻、慰安所を見廻り、女将に慰安婦の健康状態、慰安所内の秩序などを聞き、閉所時刻にもう一度見廻り、酔っぱらい、乱暴している者があれば憲兵隊へ引渡すなどであった。

慰安所は、日本、朝鮮、支那、現地の女性と四カ所の建物に分れて、女将もそれぞれにおり、総勢百名近くの大世帯、見廻りも四カ所。約六カ月ではあったが、奇妙かつ貴重な体験であった。

4. ベトナム戦記

(1) 星が一つ　四期　伏見三郎

私はハノイ北方三〇キロのバクニンに師団司令部をおく熊本六師団に配属となった。この部隊は中国太原をふり出しに、中支・南支と徒歩で戦いを続け、インパール敗戦後のビルマの急を救うべくやってきた精鋭師団で、司令部には多数の中国人捕虜が自由に動き回っていた。彼等は荷物をかつがせられ、日本兵の後をついてきた連中で、当然軍隊のメシの数は私よりずっと多いので、何をやっても私より早くてうまい。この連中が私の襟章を見て不思議そうな顔をするし、出入りのベトナム人には「チ・コ・モッサオ」（星がたった一つ）と珍しがられた。

(2) 忠烈　ベトナムに散った勇士・原田俊明 ⑮

明号作戦後の日本軍とバオダイ政権に対するベトナム解放軍の戦いは、もはや全面的武力対決以外はなかった。

原田は「日本人とベトナム人は戦ってはならない。否、戦わされてはならない」と、固い信念をもって、安隊員一名、ベトナム青年と三人は、北ベトナムの岩山を騾馬で辿って、二度にわたって相手側幹部と会談し、ようやくベトミン副部隊長に会う機会になった。

「五月九日、安隊員、工作中敵手に陥つ」

急行した捜索隊（山口・二期生）はダイトウ町郊外タイグンの古式蒼然たる廟宇に三人の惨殺遺体を発見した。

「ベトナムは一度、修羅の坩堝に投ぜられねばならない。

民族的試練から、強いベトナムが生れるのだ」

彼の生前の言葉であった。

後記「原田明は一体どこに」（152頁）をお読み下さい。

5. 南方総軍の最期　服部五郎

(1) 光機関バリン出張所の最期

七月も終りになって、米軍上陸に備えて南部仏印サンロックに転進することとなった。

町に出て石油缶四梱包をハンダ付けするように命令された。二缶には海峡ドルの紙幣がぎっしり入っていた。残り一缶に金の延べ棒、一缶はダイヤモンドで、その金額は測り知れない。この四缶こそ光機関バリン出張所の軍資金の総てであった。

戦後英軍はいち早く之が返還を要求してきた。マレー人に呉れてやったら、思えば残念至極である。

出発前に不要な在庫品の配給があった。押収品のポマードが一ダースずつ配給されたが、町の食料品店で一個二〇〇円、計二千四百円也で売払った。兵隊の月給とは比べようがなかった。私は五百円を世話になったマレー人に送り、図書の総てをピナン図書館に寄付した。

(2) サンロック

八月十三日早朝、貨車はサンロック駅に着いた。民家が二、三十軒あるのみで侘しい処であったが、景色はすばらしかった。ゴム園の丘陵地帯に赤・緑・青の美しいバンガローが、営々と築きあげた仏人の努力の結果を物語っていた。水道は出ていた。ここで米軍の上陸に備えて準備す

るという感慨は湧かず、静かな田園風景であった。

(3) 八月十五日、運命の日がやってきた。

思出の写真、書類、紙幣を全部焼き捨てた。工作用のピストル三百挺を空井戸に投げこんで、弾薬類はゴム林の窪地めがけて軽機関銃で盲打ちして二時間半で打ちつくした。他にする事もなく、赤い夕陽がゴム林の中へ落ちていった。

総司令部命令　八月十七日。

「光機関ハ現在地ヲ撤収、サイゴンニ帰還サレタシ　以後ノ行動ハ各人ノ自由トス　尚トラック及ヒ貨物ハ適宜処分サレタシ」

我々は、六名全員で光機関の総てをトラックに積みこんでメコン河に落とした。メコンの流れは静かに流れて行った。私は餞別に貰った軍刀も一緒に投げこんだ。軍刀は軍人の魂であった。

(4)「総軍司令部通信隊」これが私の戦後の第一歩であった。

南方軍は健在であった。その数二万、南方軍百三十万を総べる元締めとして厳正な軍規の元に整然としたニッパヤシの兵舎が数十棟立ち並び酒保も床屋も賑やかさを保っていた。

さすがに軍務はなく、一度だけ給料として六十三円五十銭を貰った。

まもなく通信隊はビンホワの飛行場格納庫に転進。

数万羽のアヒルが飛行場を西に東に移動し、安南人の物売りが往来し、ウドン屋も出来て繁昌した。

一度だけ電話線の架設に出たが、私には銃を持って歩哨に立つ位しか能がなかった。

点呼以外に仕事はなく、毎日大福餅を食ったり、うどん屋に坐りこんで日を送った。

(5) 使役 ⑥

間もなく色々の使役に出るようになり、糧秣の使役にでた。約二万トンの米で百三十万南方軍の二年分との事で、こぼれた米が船から倉庫までの通路に数十センチ埋まっていた。百キロ俵の米は重く肩にくいこんだ。

九月下旬、総軍畜産班に出向いた。ビンホワ飛行場を見下ろす丘陵地で、田植えの終わった青々とした稲田が美しく、はるかデルタ地帯まで続いていた。ニワトリ三万羽、アヒル五万羽、豚三万頭、牛三千頭、全くすざましい数であった。

毎朝弁当と水筒を持って、近くの丘陵まで三千頭の牛を連れて放牧し、夕方になると牛を連れて牛舎まで一キロ余りの道を往復するのが日課であった。朝食の味噌汁に牛肉がたっぷり入っていたが、固くてまるでゴムまりを噛んでいるようだった。

畜産班は三十名余りで和気アイアイ、ヒマを持て余して捕物帖や昼寝専門の部隊であった。

(6) 武装解除 ⑦

十二月に入って武装解除があったが、前夜すりつぶした菊の紋章の銃を広場に置いてくるだけだった。鍛え々々た歩兵の魂もこれでサーヨナラでした。宿舎も格納庫から仏軍のレンガ建てに移ったが、野菜作りは虫がついてうまく行かなかった。

軍楽隊が入って来たが、商売道具は何もなく、一日中麻雀ばかりしていた。一人の将校が「黄昏の聖雀（サンジャック）」という歌を発表し、全軍に歌われ、明るい希望を持たせてくれた。

ある日、寺内元帥の官舎の設営に出たが、敗軍の将とはいえ、マウントバッテン卿との関係もあり、ペナン当時の宿舎程度の設営ができた。

(7) 英軍総司令官・元帥マウントバッテン伯爵と俘虜・元日本軍一等兵　三浦 琢二

元帥閣下がB級戦犯収容所を視察に来られた。

元日本軍中将以下、上からの順序で誰も皆尻込みして、最低の私が代表して、「尊敬する元帥閣下が観閲にお見えになられたことを光栄に存じます」と挨拶した。

元帥と握手を交わした。我が家の後々の光栄であった。

英印軍はお家芸のランニングを披露し、わが方は三回戦の短い野球試合を披露した。

連合軍軍事法廷判事に早期判決を陳情

収容所では何の取調べもなく月日が過ぎた。いつまで未決の状態が続くのかと不安が拡がって、衆議の結果私が早期判決を陳情することになった。私の陳情に対して、「当法廷としても放置しているのではなく、しばらく事態を見守り、静かに待つように」と言われた。判事は温厚なオランダ人で、陳情の機会を与えられたことを謝し辞去した。

私の報告にキャンプの一同もやや安堵した様子であった。

一路故国へ

(8) 昭和二十一年を迎え南方軍三万はサンジャックに集結することになり、各部隊は荷物を大八車に積んで、途中充分な食糧もあり、気楽な行軍であった。

サンジャックの港に出入りする船を監視する望楼の使役に出された。望楼の上に畳六帖位の部屋があり、通信隊から届けられる弁当を食べるのが仕事であった。私は出入りの船を見下ろし乍ら柱に落書した。⑧

五月六日、いよいよ出港。大安丸、七千三百トン。

私は甲板に出て去りゆく越南の山々を眺め、五年に亘る悔いない全力を尽くした行動と己の運命の強さを泌々感じた。『慷慨時に利あらず』⑨

遺　恨　　読人知らず

北斗の星座　昔今　変らぬ光瞬けど
春秋六年泡沫と　守る操のあと悲し
経綸の図失しはて　渡南の志今いずこ
青春夢はつきぬれど　男子の思い誰か知る

八、終戦

1. だから日本は負けた　岩崎 陽二

抑留最初に私を調べたイギリスの特務機関員が言った。

「君の若いのにも驚いたが、地位の低いのにも驚いた。日本が負けるはずだ」と。

マー・マーイ　岩崎 陽二

八月十五日、祖国の敗戦を悲しみ、雨に打たれたまま、夜のバンコクを歩いた。

シンゴラ時代から世話になった元・地方司法長官に別れを告げに行った。彼は言った。

「ナーイ・イワサキ。何をしょぼくれた顔をしている。日本は明治以来、英米を相手に戦争をやれる迄何年かかったんだ。また一からやり直せばいいではないか」と。

日本の敗戦と同時に、意外にも、あの背後から突きさすようなタイ人の視線が消えた。引揚船が岸壁を離れるとき、廻りに数多くのタイ人の小舟が群がった。「日本人帰れ！」と予想した言葉とは全く違った叫びが起った。

「又来いよ（マーマイ）、又来いよ（マーマイ）」目頭があつくなった思いを今も忘れない。

船は鹿児島に着いた。焼野原から人影が集まった。手製の日の丸の旗が振られていた。

「お帰りなさい」「御苦労様」私は又泣けた。自分達こそひどい目を見ただろうに。

「日本人は生きている。」

タイと日本のこの二つの思い出が、私の戦後を支えてくれた。

2. 半弦の月　逆瀬川 澄夫

昭和二十年八月十三日、その日もバンコクの空は快晴、朝方降ったスコールに街路樹も生き生きとし微風も伴っていた。私は宣伝車に乗り街に出た。マーケットの横に黒山の人である。取り巻く群衆の中には拳をあげて何か喚声をあげているものも見える。

その夜涙も出ず心は虚ろだった。松島大尉をつかまえ、私は大川塾出身者としての心情を吐露、一つの計画に対する決心を伝えた。そして夜晩く軍衣を脱ぎ、半ズボンと半袖シャツに着がえ、軍靴を短靴に履き替え、既に眠っている古参兵達や誰へも挨拶せず、「元気で無事で頑張ってくれよ」との大尉の言葉と見送りを背に、車の往来も極く少なくなったルンピニー公園横でサムローを呼びとめ、人影ないバンコクの市街地の一角シーピヤへ向けて走らせた。

半弦の月は高く、無数の星が煌めき夜の帳は黒く深く家並を覆い、人々は安らかな眠りについて居た。

斯して私の戦中は幕を下ろした。時に齢満二十四歳と十三日目の夜の事であった。

3. 例の件（アヘン処分）　三浦 琢二

八月十五日、玉音放送、終戦。

全員が部隊事務室に集まって整列し、天皇陛下の玉音放送を拝聴した。

言葉もなく、只々、涙を流すのみであった。

翌朝三時頃、伝令が宿舎に駈けつけ、メモ書き文書を手渡して帰っていった。それには極めて簡単に『例の件処分せよ』とのみ書かれてあった。

『例の件』とは一体何であるのか。

①重要機密書類か　②貴金属宝石類か　③アヘンか。

アヘンとすれば何処にあるのか。直ちに在サイゴンの日本軍兵舎・宿舎の主なるところを走りまわった。バールで風呂場のドアをこじあけた。中には、乾電池の大きさの鉛管に詰められた純度九九パーセントのアヘンが麻袋に入れられ約二、〇〇〇キロあった。換金作戦にとりかかった。

私は、日ごろからサイゴン地区の蔣介石総統の裏の代理人は、ショロンにある中国華字紙の社長と目星をつけていたので、電話帳で探し、電話に社長を呼び出した。

「私は三浦という日本軍代表である。日本軍最後の宝物を蔣総統閣下に差上げたい。当方も若干金が要る。宝物の値段の一万分の一位にしか当らない四百万ピアストルと引替えにしたい。こちらには二人しか居ないので、貴方も二人でこられたい。金と引替えにトラックごと品物を持ってゆかれたい。絶対約束を守り、信義にもとる行為はしない。」と、いろいろ交渉した。

彼もしばらく考えていた様子であったが、

「二時間位後、私と運転手の二人で四百万ピアストルを持ってそちらへ行く。お互に信頼し、金だけ受取って、貴方が殺傷沙汰などおこし、品物を渡さないことのないよう約束を守って欲しい。」と交渉は成立した。

じりじりしながら緊張した空気の中で、待つこと約一時間半ばかりで、彼は運転手と二人で乗用車でやってきた。私はトラックの運転席で四百万ピアストルを確認して受取り、彼にトラックの鍵を渡し下りた。

さて、このあと、この資金は、松下社長が軍と秘かに、約二千名の若者を将来のベトナム国軍の幹部となるよう養成していたが、この養成所の解散資金とすることに決した。かくして、『例の件の処分』は一件落着した。

4. 漁船で脱出　西川寛生

八月二十五日、中国籍漁船80トンで、夜半出航。船員は船長、機関長以下五名、中野学校、憲兵ほか、料亭「菊水」の夫妻、合計十六名で満員。三浦一期生を訪ね後事を託し別袖。

サイゴン市内は無政府状態で、越盟（ベトナム独立同盟会）の大規模デモで五万人が武装部隊と行進、その歓声が夜に入っても潮騒のように聞える。深夜闇にまみれて静かにサイゴン港を後にする。ツーラン沖、海岸を北上、香港沖に英国艦隊の展開の中を、汕頭へ。台湾海峡で颱風に奔浪され狂瀾怒濤。九月五日、佐世保に入港せんとして機雷に触れて大爆発音三発、米軍飛行艇二機飛来。木造小漁船のため助かったらしい。呼子港に上陸。無事に故郷へ。

重大戦犯容疑者　三浦琢二

昭和二一年十二月、連合軍捜査官二名が収容所を回ってきた。

『名前は西川寛生、年齢四十歳前後、身長・体重は幾ら位。重大戦犯容疑者として捜査している。誰か知らんか？』と。私は何も知らんと突っぱねた。

西川達が出航の翌朝、林・軍政部長（憲兵大佐）が押取り刀で、「貴様の仲間の西川が弾薬庫を破り、機関銃などを持出し船で脱走した。貴様は何処へ行ったか、事情を知っているだろう」と、どえらい剣幕であった。

5. 奇しき帰還　二期　山口知己

ハノイ→フーランチョン→ランソン→南寧→重慶→上海→南京→広東→佐世保

昭和二十一年三月、「中国の南京政府に使節を派遣し、ベトナムに援軍を要請することになり」そのため通過中の日本軍のトラックに便乗して、国境を越えて南寧まで、ベトナム人三名と車上の人となる。南寧には夜半暗くなって潜入した。

広西省の国民党と交渉し昆明へ行くことを決定。昆明在住のベトナム人の協力を得て、雲南省首席蘆漢将軍から南京政府国防部長・白崇嬉将軍宛書簡を戴き、重慶へ飛行機で飛び、一カ月滞在。国民党内部の問題で対策の取りようもなく無聊をかこつ。いづこからともなく流れくる日本歌謡に郷愁ひとしお。

七月二〇日頃、南京へ出発。順調に飛んで上海から汽車で南京に入る。南京では先着のベトナムの元首相陳仲金（チャンチョンキム）が南京政府と交渉し、結果は中国共産党との相剋に苦しんでいる時であり、ベトナム領袖も時に利あらず香港で再会を約して上海から船で香港へ。

ベトナム復興に尽力した志士たちも疲労の色をみせ、入手する情報も不利なものばかりで苦脳に沈んでいた。香港と広東の間を往来しつつ、ベトナムへ帰るべき初志も揺ぎ、市内で連絡将校の腕章をつけた日本軍将校に笹川知南と名乗って広東日僑集中営に入った。

ベトナムに残った同志や悲運に斃れた同志の鎮魂を祈らない日は一日もない。

6. 捲土重来　大日本帝国陸軍一等兵最後の日　山本哲朗

八月十八日、初年兵には長い一日だ。太陽もやっと西に傾き一日の仕事が終わる時間に、

「山本一等兵は居らんかッ。参謀長閣下がお呼びだ。すぐ行け！」

参謀長閣下は、まだ夕陽が差しこむ蒸風呂の部屋で扇風機もつけないで、司令官と向かい合って冥目していた。

「おお、ご苦労。まあ坐れ」閣下と兵卒は天国と地獄だ。この将軍が「死ね」と言えば、私はいつでも死ななければならない。直立不動である。「とうとう　来たナ」情報は流れていた。

「戦争は終った。だが、皇軍は負けたのではない。十年したら必ず捲土重来、米英打倒のために進撃してくる。お前は、それまで地下にもぐって帝国陸軍必勝の礎になってくれ」

「ハッ　山本一等兵ハ今夜戦死シテ、帝国陸軍の礎トナルノデアリマス！」

一等兵の空っぽの頭では閣下の前で、これだけ復誦するのが精一パイだった。

「ウン、ヨシ〳〵！それでこそ帝国軍人のカガミだ。しっかり頼むゾ！さすが大川塾だナ」と。閣下は御満足だった。

その夜、裏門はあいていて衛兵は居なかった。皎々たる月が水路にうつっていた。

倉橋、山本は昭和通商バンコク支店現地従業員宿舎に居候し、頭髪の伸びるを待って、倉橋は吐根農園、山本はウォルフラム鉱山に潜入する計画であったが、タイ警察に発見され、邦人キャンプに収容された。

国家のために　五期　高場　寛

八月十五日夜、参謀長緒方大佐に呼ばれた。

「君等は大川塾ときいている。ついては国家のために、このタイに留まり残留要員になってく

れ。金は三、〇〇〇バーツ支給する」と。

山田君と、「国家のためなら」と、取りあえず大使館のガードマンとして二ヵ月程たったところ、ジープが来てバンコク刑務所へ連行され、翌日から毎日、日本から来た任務、どこから出発したか、一ヵ月程執拗にきかれた。

自分の戦死通知　二期　小林　隆

敗戦、光機関でも南方軍からの指令だとて、「大川塾生」に対し、「日本軍が盛りかえして来るまで、第五列として潜っておれ」と説得された。そして帰国してから自分の「戦死通知」を受取る破目になった。今になってコピーでも取っておくべきであったと残念に思っている。

友を偲ぶ　小林　隆

瑞光の学びやあとに南方で
散りにし友のいくたりありしか

九、取調べ

「地獄の行路」

1. バンブアトンの取調べ　山本 哲朗

日本語の多少分かるらしい英印軍の温厚な中尉と、日系二世で米軍のマークをつけた若い下士官の取調べを受けた。

われわれ「大川塾生」は根こそぎ、別棟の拘禁所に収容された。二階の木造板張りの個室で、タイ警察官の監視は何をしても自由だった。食事も運ばれた。バンコクから北へ、ゆっくりとした水路を舟で半日かかる。この急造の邦人キャンプは在留商社の家族で満員であった。その中から、どうしてわれわれを識別したのか、今でも疑問である。

マライにおける私の光機関の行動については既に調査がついているらしく、

「ドクター・オオカワを知っているか」と何度も聞かれて、「そんな医者は知らない」で通した。

「イシャではアリマセン・センセイデス」。「知りません」。二世はおとなしかった。

そのうちに「研究所のことは東京でも調査をすんでいる」ともいう話で調査もなく、最後に顔見せ用の番号札をぶらさげて写真を撮られて釈放、帰国となった。

熱演　バンブアトン　逆瀬川 澄夫

取調官は唇の赤いスマート中尉、名の如くキリットした容貌物腰ながら抜目ないずる賢い面も合わせもつ、底意地の悪い印象が残っている。

まさか死刑なんてことは無かろう。悪くて十年、いや三年位か、持久戦の覚悟。

出鱈目を言うわ、仮空の名をあげるわ。急に腹痛を訴えて取調べを中断させるわで、相手も手

こずったようだが、結局は空まわりだった。
調書が作られ一週間もすると、こわい顔。何のことない。調書の内容はすぐ東京へ送られ、東京では予め調査完了で、こちらの申立ては全て嘘と分ってのこわい顔。こちらも当分は神妙に申立てる。
仮病の時は、脂汗も流して熱演だった。そんな時はキャンプから博愛会の院長だった伊藤医師が渡船でこられたが、召喚されていないキャンプにひそんでいる同志への連絡は、付添ってくる看護婦さんの手へそっと丸めた紙切れを渡す方法をとっていた。

お尻丸出しのバンクアン刑務所（バンコク郊外）

長い青竹に通したバケツ二つ。刑務所守備の英兵の便所の汲み取りである。汚物がペチャペチャ、シブキがパンツ一枚の体にかかる。これが日課だったが、耐えられなかったのは用便だった。ドアは無く、正面から見張りに見据えられて、腰から下はむき出しのまま排泄、馴れない身には出るものも出ない。それは屈辱そのものだった。
白人は女性でも、とっさの場合は胸は覆うが、下は意に介さない由。羞恥心の違いであろうか。公衆便所でも大便所のドアのない丸見えが多い。ここの刑務所でも、英人の衛兵はドアも間仕切りもないコンクリートの溝に三人並んでお互いの尻を拝みながら用を足している。私にはどうもいただけない。日本に生れて良かったと思う。

2. シンガポールの取調べ　逆瀬川 澄夫 ⑩

冷たいコンクリートのたたきに正坐を命ぜられ、わし掴みにした日の丸を私の顔にこすりつけ、床に投げ、バカでかい靴で踏みにじり、ポイとゴミ箱に捨てられたときの悲痛だった思い。故国の親兄弟、友人、知人との秘かなるつながりを一刀両断された思いであった。
千人針だけは、理解できなかったのか、手に取って見ただけで、ポイと返された。
胸と尻にＰＯＷ（戦争犯罪者）とナンバーを大きく烙印された囚人服を着せられた時は、運命も決まったかと思った。
昼も夜も何しろ、ただ復讐である。食事も二週間は極端に少量、十段程の階段さえ上るのにあえぐようになると、夕食のカユがおじやに多少似てくるといった按排で、とことんいじめ抜かれた。朝食は、四センチ角、三ミリ厚のインディアン・ビスケットが四人で十枚、残った二枚を四等分する。ジャンケンする。割った四枚を並べて大小を調整し、粉を小さいところにつける。この配分を見つめる八つの眼は真剣そのものである。ある朝、私も見覚えある将官が四つに分けた結果にクレームをつけるのを見た。悲しかった。生の極限に対峙した人間の老若、位階を問わぬ生への執着本能とでも言うのであろうか。

3. 地獄の行路　山田　勲

青春虜窓 ⑪

バンブアトン特別抑留所
取調官は英海軍のダンバー中尉なる者で、「大川塾、大川塾」と執拗に問い、卒業生の名前をとことん訊かれたが、あくまで大川塾でなく講習会であると主張し、顔も見たこともない先輩など判らぬと言い通した。

昭和二一年五月、引揚船のニュースにキャンプは喜びに湧いたが、塾生六名は足止めされてバンクワン刑務所からシンガポールへ送られる。

チャンギー刑務所

朝食はビスケット二枚とカンコン葉の塩汁一杯、昼はトウモロコシ粉の湯一杯、一日二食だけで三歳児のおやつにも及ばない。「自分の体を削って生きている」ようなもの。

夕方六時に三十分程の拷問体操。三階までの階段を上がるさえ辛いのに、腕立て、兎跳びなど、棍棒で叩かれ、やらされる。それでも隙を見て友達と話せるのと夕焼け空を見られるのが楽しみであった。

夜、どこからか、茶碗を叩く音や民謡、流行歌が一時間くらい聞こえてくる。

翌朝九時頃になって、「万歳々々」と言う声とともにガタンと音がする。⑫

絞首刑の執行。一ヵ月に一度、歌声のきこえる夜は全く眠れませんでした。

「吾々は日本に帰れないが、君達日本に帰ったら再建に尽くしてくれ」と、言われた原田熊吉中将の言葉を忘れることは出来ません。中将は余りにもデッチ上げのデタラメ裁判と虐待に対して、イギリス国民に告ぐ長文の抗議文を出されていた。⑬

二週間たって、この世の地獄から釈放され青い空、広い原を眺めて、高い塀一つの中には、何千人の同胞が飢えと苦痛に呻吟し、逃れられぬ死に苦悩して、次々に処刑されるかと思うと、全く後髪ひかれる思いでした。⑭

痛い葡萄糖の注射を打って体力の回復を待ち、邦人の抑留されたジョロン・キャンプ、昭南神社、フォード工場の跡など見て回ったが、荒れ放題。当時は勝利の感激、今は敗戦の悲痛、うた

た涙ぼうだ、感無量たるもの。

チピナン刑務所

二十二年一月、船倉で赤道通過年越し。船倉の荷揚げ使役で梱包を解き、食い物を手当たり次第食べては、幾つかの島を回ってジャカルタへ。

チピナン刑務所は平屋建てお粗末そのもの。蚊帳を取りあげられて、蚊がぶんぶん、顔にぶっつかって来る。夜は、毛布を袋にして頭からかぶって汗びっしょり。

ガードは元俘虜のオランダ兵、アンボン兵、服も靴も敗残兵と見まちがえる米、英、日本軍のもの。新しく入ってくる者から何でも取りあげる。

裁判は市の公会堂。出廷人はみな鎖で珠数つなぎされ苦労してトラックに乗り降りしていた。

死刑囚は、獄庭にある鉄の檻の中で、重い鉄の玉をつけた鎖で足をつながれて、一角にあるコンクリートの穴蔵に入って寝る。虐待と屈辱の限りの果て処刑されていく。

三月初め、慚く私の調べになって、ほんの一、二分で間違いと判明、ホッとした。「ISAOとHISAO」のミスだったと通訳に告げられた。それでも二週間おいてやっと釈放された。船を待っている間、獄庭の草刈りと電柱立てをやらされていた。

食事をしていると、インドネシア人が大勢集って来て、じっと見ている。飯桶を洗って水を砂利道に捨てると、競って砂利ごと集めて持っていく。

三月二七日、タンジョン・プリオク出港。船中五人が祖国を目の前に死亡。白い航跡の中に浮きつ沈みつ、やがて波間に消えて見えなくなっていった。⑭

4. 無罪釈放、なつかしの祖国へ　三浦 琢二

終戦当時、日本海軍に残された空母は鳳翔一隻のみであった。この空母は病院船として就航し、バンコクで重病人を収容し、サイゴンへ寄港した。

私は、知合いの米兵にマージャン台二、三台を艦に積んでくれと頼んだ。彼は、気軽にOKしてくれ、そのうえ野戦用一斗缶入りコンビーフ一〇缶をプレゼントするという。翌日、艦には甲板に"Mr.Miura"の送状がついたコンビーフとマージャン台が三台積まれてあった。コンビーフは乗組員の食糧に寄付して喜ばれた。

「サイゴンよ。サラバ！」

ベトナム婦人未亡人と少女二人と母が甲板上まで見送りに来てくれた。

未亡人は前サイゴン警視総監夫人で、日本人軍属を下宿させて、さんざん面倒を見てやって裏切られた怨念に「彼を探し出してマッカーサーに訴えて絞首刑にする」と息巻いて、私はさんざん手古摺った女。子供と母親は毎日キャンプの前を通って食べ物を持って来てくれた純情な親子であった。

第三十三話（みんなみ33号）

「吾等ベトナム独立の捨石たらん」

昭和二十一年四月初旬

ハノイ市郊外・紅河河畔ブロッコスノール街雑貨タバコ屋。

残留邦人を探していた総領事館・井上書記官

大川塾五期生　佐藤正二（酒田中学卒）

井上「ブロッコスノールのこの店で遭えたのも何かの縁でしょう。

山口・梶谷両君の友人である私の忠告をうけて一緒に日本へ帰りましょう」

佐藤「リーダーとの盟約を破るわけには参りません。

越人独立党の彼等を見捨てる事は友誼に反するのです。

すみませんが、この遺書を酒田の両親に届けていただけませんか？」

井上「万事承知した。考え直したらハイフォンに来なさいよ。要心して生き延びて下さい」

やさしく見送る（親日ベトナム人雑貨屋の）姉妹らにも挨拶して、佐藤君は肌寒いクラッシャン（霧雨）のそぼ降る暗闇のシタデル（砦）の方向に消えて行った。（梶谷俊雄記）

二、軍国の母 五題

「ただ一本の琴線」

1. 「奥さま」の思い出（大川兼子・大正十四年、大川先生と結婚）

山本愛子

「奥さま」とは、湯河原の第一回南方会にお供をいたしましてから、何回か、ご一緒に旅行する機会がございました。

大変厳しいお方でしたから、私などしょっちゅう叱られたり、教えられたりばかりでございました。

京都の南方会へ行く時でした。

その日は、京都に着くまで、印度カレーの作り方をよく教えてもらいました。中津へお伺いしました時、いただいたカレーがとても美味しかったので、いつか、その作り方を伝授していただく事になっていたものです。帰りの新幹線でも、「もう覚えましたか」と、何度も復習させられました。こうして、印度のボースさんが奥さまに教えられたという、純正印度カレーの秘法が、奥さまのマナーと一緒に私の家に伝わって来たのでございます。

奥さまは、偉い人の事など一度も話されませんでした。奥さまからお伺いした先生は、わがままな、時にはお酒をめし上がりすぎて手におえなかったり、またよく女性関係で苦労をかける帝王でいらっしゃったようでございます。

「大川は一代だけ」と、おっしゃられた先生、私には想像もできない嵐の中の男の生涯、その壮絶な道をつきそわれた奥さまの一生は、「あの時は」とおっしゃるお顔に、とても話し尽くせない、つらい、かなしい道ではなかったでしょうか。

「ゴゼンサマ」になってお帰りになられる先生を、玄関でかわいいオウムが、

「マタ　ノンデ　キマシタ　ネ」と、奥さまに代わってお迎えすると、

先生は、「誰がそんなこと教えた。悪いやつ」と、オウムを叱っておられたという、そんな話を奥さまはなつかしくしておられました。そのオウムが艶な姿をそのまま飾って、奥さまの最後を見とって床の間に飾ってありましたのも、悲しい思い出でございます。

長い夏の日もすっかり落ちて、私はもう何時間も奥さまの枕元に坐っておりました。時折、うらの田圃から流れてくる風が秋の気配をそっと知らせてくれました。

奥さまは、ぽっかりお目をあけて、「たいくつですか。私はいい夢をみておりますよ」と、おっしゃってすぐまたお眠りになりました。

奥さまがいつか私の家まで遊びに来て下さった時、私の母と有名、無名の違いはあっても、夫のかげで多くの人に仕え、多くの人を使った苦労をおそくまで語りあったお二人が、最後に、

「これからはお互いに長生きして、樂しましょうね。歌舞伎もいいね。ご一緒しましょうね」と、交した言葉が私の耳に残っております。歌舞伎はとう〳〵ご一緒できませんでしたが、天国でお二人は、好きだったお茶を召していらっしゃるのではないでしょうか。（終）

2. 軍国の母（山本ハナ・明治二十三年生）

山本哲朗

私は男五人兄弟の四番目です。母は、五人を次々に戦地に送り出しました。

軍国の母は、日の丸の小旗を振って行列の先頭に立ちました。

「勝ってくるぞと勇ましく・・・」「死んで帰れと励まされ・・・」

行列は駅の広場まで続きました。「出征兵士バンザイ」の時、母はどんなに辛かったでしょうか。

「青葉しげれる櫻井の里のわたりの夕まぐれ・・・散るは涙か、はた露か」

母は私が小さい時から歌ってくれました。これが親子の最後かもしれない悲しい歌でした。

あの日から七年の年月が流れました。私は誰もいない駅に復員しました。

わが家の仏壇には白木の箱が三つ並んでいました。一つめは長男、二つめは次男、三男はマニラの憲兵隊本部にいましたから生死不明、まだ帰っていませんでした。

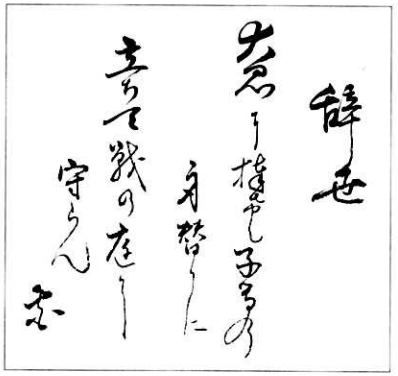
一つめも二つめの箱も軽いものでした。何も入っていない。長男は「山本兵義之霊」と書いた紙一枚でした。次男も紙一枚でした。兵隊の命、戦死なんて、こんなに軽いものですか。

「そんなもの、軽いものなんだ」

三つめは重かった。持ち上がらない程重かった。母の遺骨でした。母は毎日、五人のわが子の身替りを祈っていました。母の悲しみの涙が、岩のように、岩となって、私の膝に乗ってきました。私は母の箱を抱いて放すことができませんでした。

母は明治の生まれ、武家の長女でした。女学校へは女中がついて通いました。

「辞世」を残していました。



「大君に捧げし子等の身替りに
立ちて戦の庭に守らん　花」

母が嫁いできたのは貧しい山村の農家でした。村では長男以外は皆県外へと出ていきました。父も次男でした。

お寺には、新しい兵隊の石塔がたくさん立っていました。若者が戦地から古里に帰ってきたのです。

母は女手一人で苦労して五人の子供を学校へ出しました。試験に受かれば本を買うお金がない。受からなければ「百姓に学問はイラネエ」と、母をバカにしていた村人に「ソレ見ろ」と白眼視される。母は敷居をまたげなかったと、よく言いました。うら山の木の下で何度も泣きました。この子を残しては・・・

母は「これからの男は学問がなければ」と、歯をくいしばって働きました。お産して三日めには他人の畑の草取りまでしました。母の体はボロボロでした。五人の子を戦地に送るまでは死ねないのです。「途中で死んでもいいから」と、日赤病院の院長に手術を頼みました。

戦争の時代の男の子は、誰も孝行できなかった。

母は五人の子供の誰にも見送られないで死んで行きました。千里はなれても、ただ一本の「み国のために」という琴線に結ばれて、軍国の母は雄々しく悲しく生きた女の一生であった。（完）

3. 原田明（グエンディエンミン）は一体どこに

中村　芙美子

（註）「兄」は大川塾一期生・原田俊明。
ベトミンとベトナム独立共同作戦工作中殺害さる。

その日、ベトナムに兄を呼び戻す電報がきた。上の兄は、もう、とうから中国大陸のどこかで戦っていた。

兄は、二階の一室に私を呼んだ。「座りなさい」と兄の声は厳しかった。私は黙って坐った。

兄は私の目をじっとみて言った。

「今は戦う時じゃない。だが、日本はもう走り出してしまった。

今、日本が置かれている立場は、ひどく厳しいものだ。それなのに、政治家も軍人も必要な手を打たないどころか、ますます、苦境に陥るような事ばかりやっている。住民の迷惑など一切かまおうとしない。僕はいつも、そんな様子をやり切れない思いで見てきた。

今、本当に必要なのは、ベトナム人の心を少しでも理解し、彼等と本当に打ちとけられる日本人だ。僕は、僕にしかできない仕事があると思っている。

今度出たら、おそらく帰って来ないだろう。その時は、僕は太平洋の小さな捨て石になったと思ってほしい。

何かのときには、お父さんやお母さんの力になってあげてほしい」

私は、石になったようにじっと坐っていた。

その後、初めての兄の便りは、戦死の公報だった。昭和二十年五月だった。

私は、兄が、言ったとおりになった、と思った。

「殉国」一九歳の私に、それは美しい言葉であった。

戦争が終わった。

私は、兄がベトナムに男児を遺したことを知った。

「原田明（グエンディエンミン）」と名付けられた子供だそうだ。「原田明」を捜すことが私の悲願になった。

ホー・チー・ミン氏に手紙を書いてもみた。ベトナムは長い戦火が続いていた。

中国からの孤児たちが、このごろ、重い歴史を背負って肉親を求めて帰って来る。

私の原田明は、一体どこにいるのか。

彼の消息の知れないうちは、私の心は本当に安らぎがない。生きていてほしい。

そして、あの白い服を着ていた兄の姿と、残して言った言葉を、原田明にしっかりと伝えてやりたいと思う。

紅河（ソンコイ）を　大和心の血に染めて
散りにし友や出雲八重垣

大塚　寿男

4.『ナコン事件』

日本随筆家協会　奈良迫　ミ　チ

非業の死を遂げた父を慰めるために、わたしはここまで来たのであった。とうとうたどりついたということにこそ、今は、意味があるのだった。

それでは、わたしの父が、銃殺されるために立たされた壁は、今、わたしが腰をおろして向いあっている目の前のこの壁だろうか。シイラに尋ねた。シイラは、

「そうだ、この壁なのだそうだ」と、わたしの目を見つめて答えた。

「あの血潮にぬれた壁が　この壁？」

薄緑色のペンキであつあつと塗りつぶされているこの壁が、父の血を吸い込んだ壁なの？

わたしは、立ち上がり、壁に近寄った。

「この壁なの？」シイラがわたしの背後に立っていた。

「そうなのだ。この壁だそうだよ」

わたしは、壁をなでた。非情の思いにうちひしがれて、わたしの顔はゆがんだ。

壁をなでながら、わたしは、このとき、父の悲しみのもっとも近くまで達したと感じた。このとき、父は、わたしの傍らに立っていた。いや、わたしの傍らに立っていたのはシイラであった。シイラは私の父であった。私のこよない者と合一していた。

シータウィ寺を一目見たとき、わたしは写真の寺だという安心感を覚えた。私はその寺を昔から知っているようななつかしさを感じたのは不思議であった。

御堂でお経を始める前にお坊さんから一枚の紙を手渡され、紙には点線で人体の輪郭が型どられ、その人体の中に父の名前を書くようにと言われた。わたしは六人仲良く天国に行くように六人の名を書いた。お坊さんは荼毘のときの写真と、六名の名を書いた紙を一本の白糸でくくって、四人がそれぞれ糸をつまんだ。・・・

高僧が読経を始めた。私は目を閉じて合掌し、ひたすら、「なむあみだぶつ」と唱え続けた。涙にぬれ、合掌する両手に涙がこぼれ続けた。四人のお坊さんがいっせいに合唱を始めた。わたしは、全員の合唱の声に支えられて体が浮きあがるような錯覚に陥った。これほど全員がひとつの心になって腹の底から声を出し、故人達の冥福を祈った祈りを外に経験したことはなかった。

儀式がすむと、いちばんの高僧が、わたしの目を見つめて語りかけた。

「あなたのお父さんは、あなたのお父さんを思う心をとても喜ばれて、今、天国にあがって行かれたから、あなたも安堵して、もう悲しむのをおやめなさい」

『いつの間にか、わたしは変っていた。父は今ごろ天国から、晴れやかな心でわたしを見おろしているのだろうと信じられるのだ。もはや父は天国にいるのだから、これからは悲しまないと。

わたしは今、この一年、わたしを父のところに導いていただくために出会った、すべての日本とタイの知人達への感謝に満たされている。特に、わたしを、悲しみの淵から連れ出してくれた、思いやり深い心のシイラに対しては、お礼の表しようもない』（了）

5. スマトラの空へ

満鉄調査部タイピスト　高山明子

私は満鉄本社へ入社して一年も経たないのに、調査部マレー班の五人のタイピストの一人として、南の国シンガポールに居たのです。私は活字大好き人間で、現実の人に目を向けることのなかった女の子でした。

それが初めて密井さんと出会った時は本当に驚きました。なんと素晴らしいお人なんだろうと思いました。本当に嬉しく思いました。

お互いあまりおしゃべりではありません。来る日も来る日も山に積まれた資料のカードを書いていました。調査室で向いあってお仕事しているときが二人の時間でした。平凡な同じ毎日でしたが楽しい日でありました。

マレーの仕事も終わりに近づき、スマトラへ行く慌ただしい日を過ごし、「お元気で」と言い乍ら、握手しました。それは私が密井さんに触れた最初で最後です。やはり心の中では泣いて居ました。とても悲しかった。

スマトラへの道中は大変でしたが、思い出深いものになりました。調査室はパタンパンジャンにおかれました。軽井沢のような避暑地です。クパヒアンの密井さんからある時、お土産をもらいました。棉の実一つと黒檀の木彫りの踊り子でした。

満洲への帰国、終戦、引揚げ、四年の歳月が流れています。母と二人の妹たちは魚津に疎開していました。お葉書を出しました。無性にお会いしたかった。

密井さんはお休みだったのです。けれどきちんと和服を召されて待っていて下さいました。

母上様が「お散歩でもしてきたら」とおっしゃって下さり、目の前にあるお堀の土手に出かけました。

密井さんは立ったまま、私は腰を落としたまま言葉はありませんでした。お堀のみなも、空と生い茂る樹木の自然をじっと眺めたまま時間が過ぎていきました。私には自然の中に立ちつくす細く長身の密井さんの後ろ姿だけが残りましたが、これがこの世の最後の別れになるとは思ってもいませんでした。ありったけの私自身を手紙に書いてしまいました。

しばらく経って、密井さんからお手紙が届きました。

「肺なんて嫌だね。将来は魚族にでもなって鰓とかいうもので生きてみたい。

初夏のすばらしい立山の姿、本当に眺めたい。」

私は涙なくては読めませんでした。

私はあの世とやらへ行きましたら、千の風に乗って密井さんとあのスマトラの空へ、あの原生林の空へ飛んで行ってみたいと、夢見ております。（完）

密井其一（一期生）は昭和十五年スラバヤに赴任、いったん引揚げ、再び渡航、シンガポールで軍政監部勤務の後スマトラ島ベンクーレン東山農事に勤務、兵役、復員した。

三、みんなみ歌集

研究所は「大川塾」、寮は「瑞光寮」、機関誌は「瑞光」と題していた。講堂に遠山満翁の墨痕鮮やかな「瑞光」なる扁額が掲げられていたことによる。

「みんなみ」は昭和二十八年五月三日、日比谷松本楼における南方会設立総会で、大川先生によって、会は「南方会」、機関紙は「みんなみ」と命名され揮毫されたものである。

「瑞光」は昭和十四年四月創刊、十六年四月、第十号以降は不明。

「みんなみ」は昭和五十二年七月、第一号発行、二〇〇六年五月第33号を最後に終巻した。その後総合誌34号、「手記で綴った大川塾」が二〇〇九年九月に発刊され終結した。

寮歌　渡部亨

(三)
谷間の流れ　緑野に
土の香りに　大空に
みちたる歌を　結びけり
大亞細亞
あゝ、その生命　貴しや

(五)
大和島根の　男の子らよ
拳りて起てよ　剣を手に
拓へよ送へ　アジアより
我使命
あゝ、若き胸　血は滾る

哀輓三章

識見文章共絶倫　多
年興亞展経綸　痩
六尺英雄漢　睥睨東西
今古人
危言遭厄道何窮　衆
度投身囹圄中　筆挾
秋霜心烈日果然　頽世
起清風
立言何遜立朝勲　時際
艱難嗟哀君　渺々魂
兮招不返　哀歌空　對
暮天雲　哀輓
大川博士周明君　土屋久泰

哀輓三章

識見文章、共に絶倫。
多年興亜経綸を展ぶ。
痩躯六尺、英雄漢。
睥睨す、東西古今の人。
危言厄に逢うも道何ぞ窮せん。
幾度か身を投ず、囹圄の中。
筆は秋霜を挾み、心は烈日。
果然頽世、清風を起こす。
立言何ぞ遜らん。立朝の勲。
時、艱難に際して嗟す、
君を喪うを。
渺々たる魂兮、招けども返らず。
哀歌空しく対す、暮天の雲。
哀輓
大川博士周明君　土屋久泰

高橋喜重
鳥海は君を讃えてほほ笑めり
秋空に高し　ふるさとの山

平成21年度大川周明博士顕彰碑碑前祭　平成21年10月17日

① 豊多摩　　大川周明

日の本の北の守りをうち堅め
　みんなみ指して急ぎ下らむ

物書くと筆は執れども指こごえ
　長くは得かかず今日の寒さに

豊多摩のひとやの中に地図のべて
　千々に砕くるわが思ひかな

豊多摩のひとやの糧のともしさに
　うたた痩せゆくわがむくろかな

師　　一期　逆瀬川澄夫

師の姿　今も鮮やかに端座して
　コーランひもとくその背揺るがず

誓　　寮長　菅　勤

願わくは万世のため一心決定し
　地上に天国を成就せんとす

友は野末の石の下　寮長　椋木瑳磨太

夕まぐれ野良にふと見ゆ火のもゆる
　斃れし人を焼くというなり

夕まぐれ命（メイ）を伝えて帰るさに
　野に唯一人もろこしを焼く

② 泰緬鉄道　　逆瀬川澄夫

復讐と分かれど逃るる術もなく
　いけにえの身と君は吊され

泰緬のきびしき日々は吾も知る
　なぞあげつらい君の裁かる

③ 青春秘情　　（読人知らず）

マレーの都コーランポに
末を誓ひし　君とわれ
あゝ　純情のおもかげ秘めて
今ぞ　出で征く印度洋

服部五郎

我れ　南けん　大君の醜の御盾と
　出でたつ君を今ぞ送らん

⑤ 遺骨をつくる　　山田　勲

戦友の手首を切りて遺骨つくる
　敵機の去りし暮のジャングル

⑥ 使役

キャンプ総勢二万人、無為徒食
　三千の牛にひかれて牧場通い

④ ビルマ戦悲し　　田岡義計

濁流に伏して流るるつわものの
　むくろの中を我は進みぬ

俸給の軍票をもち身を処せる
　友の痛恨ビルマ戦悲し

歩けるだけ歩けと傷兵に
　手榴弾一つ渡して手放しけり

「軍医殿　切ったやつを見せて下さい」
　見せて貰ったバケツの中に左足

⑦ 武装解除　山本哲朗

魂の御紋を削ればただの古鉄砲
山とつまれて運ばれて行くなり

⑧ 天日　服部五郎

天は何れの日にかまた
我らアジア民族に
天日を仰がしめるであろう

⑨ 復員船

十年の客となりて異境に遊ぶ
慷慨時に利あらず　万骨枯らすも
臥薪嘗胆　我が志は行く
はるか雷州を望み見て
我が心に決す　復員船

⑩ チャンギーへ　逆瀬川澄夫

朝まだきバンコクに別れはろばろと
シンガポールの夜の冷たさ

⑪ 青春虜窓　逆瀬川澄夫

仰いで天に訴ふも　天は語らず
伏して地に問ふも　地は黙す
義憤滔々として　堰に溢るるを
はるか北斗を望み　乾坤孤空に挑まんも
如何せん波濤万里　メナムの誓早空し
青山何処に定むべき　男児の思い誰か知る

⑫ 合掌　絞首刑　山田　勲

バンザイの叫びを聞けば独房に
吾一人座し合掌しいたり

⑬ 原田中将

「吾は帰れず。日本の再建たのむぞ」と
将軍の声　耳をはなれず

⑭ 獄窓二首　山田　勲

獄庭の草除りあればにじみ出る
汗に涙のおのず混るを

作業場に出でゆく朝わが友の
新しき獄衣いたく目に泌む

⑮ 紅河　梶谷俊雄

椰子茂る林を求めていつの日か
ソンコイ河畔　みたまよ眠むれ

⑮ 墓参　逆瀬川澄夫

うら若き身を鴻毛の友は今
眠りもとわに故郷の丘

⑯ 杉野元一へ　村田勇馬

君が身は南の国に眠れども
遺髪は瀬戸の母の御許へ

海征かば　山本哲朗

休戦ラッパがなっている
山から谷から　骸骨が　カラカラ
音たてて　靖国街道を往く

祖国を守り　勝利を信じて
幾千里　海征かば　山征かば
そこに使命と栄光があったから
血も肉も砲火にさらしたのだ
祖国が私を呼ぶなら
私はいつでも　銃をとろう

軍国の母

大君に捧げし子等の身替りに
立ちて戦の庭に守らん

瑞光歌集

（歌は塾卒業前の作）

大川周明

蚤も蚊も神の使ぞこの吾を
きたへ玉はん神のつかひぞ

山岸雅春（寮長）

よしや身は何処の土に朽ちるとも
みたまはとわに皇国（ミクニ）護らん

菅　祥孝（副寮長）

大君の大御心の安らかに
治まる御代をたゞねぎまつる

西川寛生　八幡中

先駆けて南ゆく身を大神の
み声のまゝに生きて尽くさん

住田　勲　忠海中（現地残留、生涯バンコク）

来ん年は椰子の葉かげに散る月か
光もあわし　心汲みては

逆瀬川澄夫　都城商

彼は勇躍蘭領印度
君の目指すは仏印か
ビルマにマレー、タイ国が
解放アジア合言葉

大屋敷久男　東奥義

外国に月見る友もあるならん
君の御ために尽くせますらお

渡部　亨　会津中

たとへ身ははての辺に尽くるとも
とわに我が霊ぞ野山さすらふ

倉橋正夫　三国中

歌ふ声　秋風にのり海をこえ
とゞけ大陸　武士のもと

友田光男　唐津商

日の本の匂う旭はパミールの
峯をも照らす光なりけり

片野健四郎　酒田中

親は子を子は親を思ふ至情より
まさりて高き殉忠の道

伏見三郎　相馬中

大君のみことしあらばヒマラヤの
高嶺をこえむ御旗かざして

鎮魂録

（歌は卒業時瑞光に残した作）

柴田敦司（一期　印度語）京都商

昭和十八年八月、バンコク赴任、ミートキイナ出張所に勤務。

同地前線において諜者の潜入路を調査中、敵将校斥候団と遭遇、交戦中、頭部貫通銃創をうけ壮烈なる戦死をとぐ。

時に昭和十九年六月二十六日。二十五歳

両足に印度ビルマを踏んまえて
いつの日にか見る　この日の月

原田俊明（一期　フランス語）松江中

昭和十五年夏、台湾南方協会に赴任。仏印進駐、ハノイに「印度支那経済研究所」主催。安南独立運動の志士達と交わり、その信望を集む。

昭和十九年、現地にて応召。タイグエン地区蜂起のベトミンと日越協同独立工作に挺身し、三度び軍命をおびて、副隊長の説得にあたり、遂に敵の手中に落ち、同行者二名と共に殺害さる。時に昭和二十年五月九日。ソン・コイ河畔に埋葬さる。功によって二階級特進。二十五歳。

幾多の男子その魂を　留めて去りし武蔵野に
集ひ来たりし　益良夫が　身は鴻毛の
軽くして　荷ふ務ぞ　いや重し

入谷寿義（一期　タイ語）高松一

昭和十五年五月、バンコク大南公司に赴任。

開戦とともに、ビルマ独立義勇軍大尉となり、ラングーン攻略に参加勇戦。昭和十九年十一月十日、現地にて応召。森一〇四二部隊特殊自動車隊。翌二十年四月、ペグー北方五十キロ、ペアジーの三叉路において、敵戦車部隊と遭遇し、これと交戦中壮絶な戦死を遂ぐ。二十二歳。

月に歩めば大陸の
戦野しのばる秋の夜長に

江里繁（一期　印度語）熊本中

シンガポール日報社に入社、大川先生の著書を所持したため追放されてバンコクへ。BIAに志願し、水上支援隊副官としてアンダマン海を北上、昭和十七年三月五日、イラワジデルタ地帯に奇襲上陸を敢行、三月九日、ピヤポン警察隊の頑強なる攻撃を受けて、交戦二時間余、負傷した隊長を助けんとして後退中、一瞬一弾頭部を貫通、壮烈なる戦死を遂げた。独立義勇軍少佐。二十二歳。

果てしない遠い宇宙の何ものかに
誘はれて行くような気がする

庄子仁郎（一期 マレー語） 仙台一中

昭和十五年十二月、スマランのマレー語新聞「シナール・スラタン」社に赴任。十六年十一月一旦帰国。スマトラ島コタラジャにおいて、アチェ軍政部に勤務、終戦。

「アジアの復興は今から始まる」とアチェ住民の中に身を投ず。昭和二十八年四月十八日、戦死と認定される。スマトラの原野にねむるインドネシア独立の戦士。二十五歳。

怨むまいぞえ　俺らの事を
海賊稼ぎも国のため
亜細亜十億民のため

本間博基（二期 トルコ語） 鶴岡中

昭和十六年九月、タイ国バンコク日報社に赴任。開戦と同時に、ビルマ独立義勇軍大尉、モールメン兵団・泰緬国境、道なきジャングルのなかに象にまたがりて踏破、ゆくゆくビルマの青年を集めて日本軍に先行、ラングーン攻略に活躍、堂々入城す。現地にて応召。終戦と同時に、消息を絶ち、三十八年戦時死亡者として、靖国神社に合祀さる。二十三歳。

若鳥の翼もたわに西南の
アジアの空に嵐吹くなり

田村伊織（四期 フランス語） 桃山中

昭和十八年九月サイゴン大建産業（株）に勤務、現地にて応召。

歩兵第六十二聯隊見習士官。二十年七月四日、舟艇にて弾薬輸送中、トンキン州チェンカン省エンリの戦闘において、ベトコンの襲撃に応戦中、左肩から左胸部盲貫銃創をうけ戦死。

弱冠二十一歳の若き生涯を安南の独立に捧ぐ。

強く生きよ雄々しく生きよ若心
西南さして門出すわれは

川口敏（五期 ペルシャ語） 佐賀中

陸軍参謀本部印度工作要員を命ぜられ、昭和十九年五月六日、空路シンガポールに到着。光機関本部教育隊に訓練中、応召す。ビルマ野戦高射砲隊に入隊し、ペグー北方ラングーン防衛の前線陣地を死守し、昭和二十年七月二十二日、ニューアンビン北方十キロの地点にて、敵戦車部隊の包囲攻撃を受けて玉砕す。二十歳。

西南の空に輝くみ光を
うけてや進む兄を偲ばん

池野光栄（三期　印度語）金沢二中

昭和十七年七月バンコク大使館より岩畔機関印度国民軍ニースンキャンプ勤務。十九年三月インパール作戦に勇奮力戦、印度国民軍と寝食苦楽を共にし、言語に絶する困難に直面し、印緬国境モニワの前線において病にたおれ、四月二十四日、同地野戦病院にて戦病死。二十二歳。その短き生涯を印度独立の為に捧ぐ。

東亜の黎明来りぬ
世界の上に曙光近づきたり
見よ　東天を　建設の輝しき門出を
聖戦収まらば　日　中天に昇りて
世界を照破し給はん

永井俊彦（五期　アラビア語）明倫中

昭和二十年四月二十日、印度国民軍最高司令官チャンドラ・ボース閣下の護衛を命ぜられ、ラングーンを撤退。昼夜間断ない爆撃砲撃の中をシッタン渡河地点にて、敵機の爆撃に身をさらし、人馬殺傷弾を左腹部にうけて壮絶な戦死をとぐ。

時に四月二十八日午後二時。陸軍兵長。二十歳。

濁流渦巻く夜のシッタン河を腰にロープを巻いて泳いで荒波に流される筏に結び付けて婦人部隊を救ったその翌朝。鬼神はかくも非情なるか。

いず方の国にあるとも丈夫の
大和魂　ひかりかがやく

杉野元一（五期　トルコ語）修猷館 ⑯

ハノイ第四陸軍病院に衛生兵として入隊。終戦により現地除隊。二十一年四月、同期三名をハイフォン復員船に見送ったのが最後の別れとなる。六月中旬、国民党とベトミンとのビンエン会戦に国民党側戦死者の中に杉野君の中国名・陳文仁が新聞に出ていたという。二十一歳。

大君のみ光あびて我はゆく
アジアの空の夜あけ目ざして

佐藤正二（五期　ペルシャ語　アフガニスタン班）酒田中

独立四二九大隊通信隊入隊、現地除隊離隊、二十一年四月初旬、残留邦人の帰国を探していた総領事館井上書記官に「越人独立党の彼等を見捨てるわけにはいきません」と、遺書を「酒田の両親に渡して下さい」と別れたが最後。二十一歳。

乗切らむ世紀を開けん西東
吾は果なき砂漠の野辺に

伊藤鍈三（五期 ペルシャ語 アフガニスタン班）
惟信中

独立四二九大隊入隊。安部隊から明号作戦、信司令部。
終戦離隊、二十一年五月頃までエンバイ国民党訓練所に教官として健在。六月ビンエン会戦に参加戦死と推定。二十一歳。

桜咲く春を待たで吾はゆく
胸に花咲く思ひ秘めつゝ

城島忠一（五期 トルコ語）神崎中

サイゴン警備隊独立歩兵四二九部隊第四中隊に入隊。
明号作戦大隊長伝令通訳、三八軍司令部勤務、終戦により二十年十月、ドーソン収容所。二十年十月十九日コレラのためハイフォン陸軍病院にて戦病死。勲八等白色桐葉賞。二十一歳。

冬枯れの草木のたもとうっとりと
背のびしてみる武蔵野の富士

山本 哲朗 撮

第四章　太平洋戦争への道

一、アメリカの太平洋進出

「日本ほど重要な同盟国はない。」

アメリカ・太平洋進出表

1845	マニフェスト・デスティニー　（太平洋に進出せよ）
46 ～48	アメリカ＝メキシコ戦争。グアダルーペ条約 （カリフォルニア及びニュー・メキシコ　獲得）
53	ガズデン購入（メシリア渓谷）
54	日米和親条約（神奈川条約）
67	ロシアよりアラスカ買収（150万Km²、720万ドル） （アリューシャン列島含む）
98	ハワイ（カメハメハ朝）合併
	（4～12月）アメリカ＝スペイン戦争 （フィリピン、グアム、プエルト・リコ　獲得）
99	東サモア諸島を獲得
1914	パナマ運河開通（1904着工、運河地帯の永久租借）
19	アメリカ太平洋艦隊編制
22	ワシントン主力艦 制限条約（英・米・日、5:5:3）
24	カリフォルニア州、排日新移民法成立
29	南極ロス海ホエール湾に　リトル・アメリカ基地建設
30	ロンドン補助艦 制限条約（英・米・日、10:10:7）
39	日米通商条約破棄
41	（８月）大西洋憲章（領土不拡大宣言） （12月）日本、米英両国に対して宣戦布告
45	（8月）日本、米英ソ三国に対して降伏
51	（9月8日）サンフランシスコ 対日講和会議 署名

1.　膨張の宿命

(1)　**マニフェスト・デスティニー**（Manifest Destiny）「**明白な運命**」「**膨張の宿命**」

「アメリカ大陸に拡大すべき我々の明白な運命は、年々増加する数百万の人口の自由な発展のために神が定めたものである」

これぞ、アメリカの領土拡張主義を神の意志として主張し、〈白人の責務〉を鼓舞したもので、テキサス、カリフォルニア、オレゴンと太平洋岸まで進出し、更に太平洋支配に発展していく拡大思想である。

（註）デモクラティック・レビュー誌　1845年7月,8月号.

(2)　**アメリカ＝メキシコ戦争**（1846～48）

湖上（テスココ湖）に輝く金銀の宮殿に北方から異邦人（アメリカ人）が攻寄せてきたのは一八四六年五月、軍神メヒクトリ（メキシコ）は勇敢に戦ったが、戦い破れて主都テノチティトラン（メキシコ・シティ）を占領された。（四七年七月）

グアダルーペ・イダルゴ条約（1848.02.02）

リオ・グランデ川を国境とし、アメリカはニュー・メキシコと上カリフォルニアを譲りうけ、賠償金一、八二五万ドルをメキシコに支払う。

（註）グアダルーペはメキシコ・シティ北部の住宅都市、羊飼ディエゴがマリアを見た聖地。イダ

ルゴはメキシコ独立の英雄の一人。

ガズデン購入　1853年、南方の大陸横断鉄道を建設するためリオ・グランテ近くのメシリア渓谷地域116,560㎢をメキシコから1,000万ドルで購入。合衆国の大陸横断鉄道建設の領土は完成した。ガズデンは駐メキシコ公使の名から。

(3) ペリー来航・日米和親条約（1854）

たった四杯の黒船を率いて浦賀に来航、大統領の国書を渡すまでは動かないと、江戸幕府を周章狼狽させたペリー提督は、アメリカ海軍初の蒸気船フルトン号を建造し、造船所長官をへて、メキシコ戦争には東インド艦隊長官を務めた造船、航海、海戦の第一人者であり、遣日特派大使に任命されたのは六十歳に近い、温厚にして「実に寛仁大度の器量」の人物であった。

彼は、「日本人は高尚な国民であり」、交渉には「飽迄も礼儀を尽くし対等な心構え」を以て来航した。

彼が日本に最初に上陸したのは琉球国那覇であった（1853.05.26）。首里城「守禮之邦」に兵を止め「守禮」の意味を質し、水兵たちの服装を整えて禮儀正しく琉球国王に謁見した。（1853.06.08）

那覇を根拠地として手回しよく小笠原島を視察し、父島の二見港に貯炭所用地を買収した。

事前調査をすませたペリーは浦賀に投錨して（1853.06）、幕府の長崎回航の命令にも頑として動かない。

この頃、日本の周辺は黒船に騒然としていた。北はゴローニン投獄事件、南は《モリソン号と申すエゲレス船》事件、「蛮社の獄」に振り回されていた。(1839)(1)

幕府の方針は、それまでの穏便主義から『一念なく打払え』という乱暴に変った中へ（1825.2月）、外国軍艦が堂々と名乗をあげて江戸城へ迫ったのである。

ペリーは、久里浜の仮館において、国交・通商の開始を求める大統領フィルモアの幕府将軍あて親書を浦賀奉行に提出し(2)、返事は来年を約して、すなおに上海に行ってゆっくりと英気を養っていた。

浦賀から帰港した琉球では、聖現寺の一年間賃借、約五、六〇〇トンの貯炭施設の設置、偵吏追跡の禁止、自由市場交易の四カ条を承諾させ、香港に向け出航した。（1853.08.01）

翌年二月、ペリーは七隻の軍艦を率いて江戸湾に深く進入した。往復二、三年はかかるだろうと一息入れていた幕府はびっくり、しかも軍艦は七隻とふえて、江戸湾せましと黒煙をあげている。吉田松陰が外国事情視察をくわだて、金子重輔とアメリカへ密航しようとしたのはこの時であった。

横浜応接所において日米和親条約（神奈川条約）(3)十二カ条が調印され、更に下田、函館を視察して来たペリーの要求によって、了仙寺において下田追加条約(4)十三カ条が結ばれた。使命を果たしたペリーは帰途那覇に寄港し琉球王国と琉米修好条約七カ条(5)を調印し、五五年一月、二年二ヵ月ぶりでニューヨークに帰還した。

こうして、日米和親の扉が中々立派な人物ペリーによって開かれたのは、「日米両国にとって幸運」であった。彼は、将来沖縄が太平洋の中心となる重要性を説いて、その占領を本国政府に提案したが、政権は共和党から民主党に移り、新大統領ピアースに入れられなかった。

彼が去って十年後、日本は明治維新を迎えた。米軍が沖縄を占領したのは百年後であった。

（註）

(1) 1837年6月，アメリカの快速帆船モリソン号（564トン）が日本人漂流民七名をのせて江戸湾に入り幕府の砲撃により退去した。これを批判したシーボルト門下の蘭学者高野長英・《夢物語》、渡辺崋山、小関三英等、洋学者グループに加えた大弾圧事件。

(2) 米国大統領の親書を受取ったことにより、三代将軍家光の鎖国体制完成（1639）以来、二一五年続いた鎖国は終焉し、日本は固く閉じた殻を開いた。

(3) 日米和親条約（神奈川条約）十二カ条（1854.03.31）下田、函館の開港、欠乏品供給、漂流民救護、最恵国約款、（以下略）

(4) 下田追加条約十三カ条（1854.06.20）
開港細則、日米通貨の比率、石炭価格（以下略）

(5) 琉米修好条約（1854.07.10）
代表（琉）尚宏勲、馬良才　（米）マシュー・ペリー
自由貿易、アメリカ船舶に対する薪水の提供、アメリカ船からの漂流民の救助、アメリカは領事裁判権獲得、アメリカ人墓地を設置及びその保護、琉球国の水先案内に関する規定、薪水の提供に関する費用。
以上の七カ条で、琉球王国の外交文書の漢文と英語とに記録された。この条約の有効性は、一八七九年の琉球王国が終末したことにより失効した。

(4) アラスカの買収（1867）

デンマーク生まれのロシア人ベーリングは、ピョートル大帝からカムチャツカ科学探検隊長の命をうけて、アラスカを探検し、アジアとアメリカが、つながっていないことを発見した（第一次探検）。第二次では北アメリカ、アラスカ湾を探検し、帰途アレウト列島（アリューシャン列島）

コマンドル諸島のアヴァチャ島（現ベーリング島）で難破し（1741.12.19）、今もこの島に眠っている。

ロシアはシトカに植民地を建設し（1799）、皇帝から毛皮独占特許を与えられたロシア・アメリカ会社はさらに南下して、カリフォルニアでアメリカ、イギリスと衝突を起こすようになった。やがて、クリミア戦争勃発に、国も会社も財政逼迫、事業不振におちいり、アラスカを売却することとなる。一五〇万㎢、720万ドル也。おまけにアリューシャンをつけて。

それでもアメリカ国民は「そんな冷蔵庫を買ってどうする。白熊でも飼うのか？」と、民衆には不評であった。

(5) ハワイ諸島合併（1898）

ハワイ諸島はイギリスの航海者、ヨークシャーの貧農生まれキャプテン・クックの第三次航海（1776～80）によって発見された。彼は世界最初の東回り周航を成功し、クリスマス島、サンドウィッチ（ハワイ）島を発見し、北上してベーリング海、北緯70°30′まで探検して、帰りにハワイ島西岸で土人と紛争をおこし殺害され、ケアラケクーア湾のキャプテン・クックの浜に眠る。(1879.12月)

一八一〇年、裸の英雄・カメハメハ一世が群島を統一し、アメリカと極東を結ぶ通商、捕鯨の寄航地として繁栄し、平和な日々を送っていた。

一八八七年、アメリカと互恵通商条約を結び、パール・ハーバーの海軍基地使用を認めた。

海風にサトウ黍の甘いささやき、真珠の浜に粋な水兵さん、満月多情なフラダンス、三拍子そ

ろって太平洋のパラダイスは、マッキンリー・アメリカ大統領の懐（合併条約）に入り（1897）、翌年合併され、五十番目の州となる。誰か、アリゾナを思わんや。(註)

(註) アメリカは、ハワイ、マニラを中心として、一八〇〇年代に海・空軍基地を島々に建設していく。ウェーク、パルミナ、ジョンストン、ハウランド、ミッドウェイ、グアム、ベーカー、ダッチハーバー等。

2. アメリカの極東進出

(1) フェルディナンド・マジェラン（1480?～1521.04.27）

「鎧をつけた下級貴族」に生まれたマジェランは、「東を指そうが、西を指そうが、頑固に航海を続ければ、必ず出発点に戻るのだ。地球は丸いのだ。」彼の勇気は古来学者たちが夢見たことを実現したのだ。

彼は、ドロボー諸島（グアム）、サマル島（フィリピン）に到着し、地球が回りはじめてから、はじめて、生きた人間が地球を一周したのだ（1521.03.16）。しかし、彼をはげました盟友フランシスコ・セッランとティドールでの再会を果たすことはなかった。双方ともこの世を去っていた。

マジェランは古い大西洋から、新しい自ら命名した太平洋（イル パシフィコ）時代を開いた。（1522.09.08）

生き残った一隻だけが出港後三年マイナス十二日でセビーリャに帰ってきた。しかし、マジェランの姿はなかった。国王との「契約（カピトラシオン）」は何ひとつ実現されなかった。彼の屍は約束の聖堂には葬られず異国の浜辺に朽ちはてた。彼に反抗して海峡手前で逃亡し、一年早く帰ってきたアントニオ号の船長デル・カーノに「マジェランは死んだ」として、彼の栄光は全て奪われていた。

航海者は海が墓場、砂に埋もれ、波がミサを歌ってくれる。太平洋の開拓者・ベーリングも、クックも、名もなき小島の浜に眠っている。マジェランに贈られたものは、海の廃道「マジェラン海峡」の名称だけである。「彼の運命がそうなることを欲したから」である。

(2) アメリカ＝スペイン戦争（1898.04.20～1898.10.01）

米西戦争は、キューバとマニラが戦場になった。キューバは、一五九二年、コロンブスが最初の航海で発見し、ベラスケスの征服以来四世紀にわたりスペインの植民地であった。

一六世紀後半、サトウキビとタバコ栽培の農業人口は、移入した黒人奴隷と混血人ムラード、少数の地主クレオールによって維持されていた。戦争当時、黒人奴隷は四十万をこえ、アメリカの投資は五千万ドルに達し、キューバの繁栄はアメリカの製糖業投資に依存していた。

一八九五年に起こった独立反乱に対して、アメリカ大統領マッキンリーの厳正中立、苦闘するキューバ人への同情は、アメリカ軍艦メーン号爆沈事件を契機に、スペインに対する宣戦布告となった（1898.04.20）。アメリカ海軍はカリブ海でスペイン艦隊を破り、陸軍はサン・ディエゴ、プエルト・リコを占領し、終局を迎えた。

一八九八年五月一日、香港に集結していた米極東艦隊は、マニラ湾にスペイン艦隊を破りカビテを占領した。米艦には、ビアクナバット条約で革命を売った独立の志士・アギナルドが乗っていた。

彼は、「フィリピン独立を援助する」というアメリカの約束を信じ、五月十六日、カビテに上陸し、革命軍を再興し、スペイン軍に戦闘開始を宣言し、ルソン島全域を占領、マニラ攻撃の先陣に立った。革命軍四千は市内に殺到した。（八月十三日）

八月十五日、マニラ入城式に革命軍は一兵の参加も許されなかった。
「欺かれた」と叫んだが、すでに遅かった。〝アメリカよ、お前もか！〟
十月一日、パリ講和会議（アギナルド特使は門前払い）
① スペインはキューバの独立を承認する。
② スペインはフィリピン、グアム、プエルト・リコをアメリカに割譲する。
③ アメリカは代償として二、〇〇〇万ドルを支払う。
④ 新領土の市民的、政治的地位はアメリカ議会が決める。

(3) アメリカのフィリピン統治（1899.01.04 ～ 1946.07.04）

一八九九年一月四日、アメリカ大統領マッキンリーは宣言した。

「フィリピンの主権はアメリカにある」

アメリカは対スペイン戦争によって、最短の時間と最少の出費によって、最大の世界的強国、植民帝国、太平洋主権国となり、その結果は太平洋戦争に続いて、フィリピンの独立もそれまでお預けとなる。

フィリピンは多島、多海、多部族、多神の国で、歴史的に統一した国家、文化、宗教はなく、スペイン三百年の混血文化、カトリック文化が形成されていたので、アメリカの植民政策は、初期の苛酷な民族独立闘争に対する弾圧撲滅が終わった後は、上層富裕フィリピン人のアメリカ化を優遇し懐柔した穏健なものであった。

アメリカは白人至上主義、投資先太平洋として、従来の英仏等の特許貿易主義と異なる根拠地を造っていった。

(4) 東サモア諸島（1899）

サモア諸島は、一七二二年、オランダ人ロッヘヴェーンが発見し、一七六八年、フランス人ブーガンヴィル(註)が「航海者諸島（ナビゲーターズ）」と命名して海図に発表した。

ドイツの海外進出は、西には英国とアフリカ分割を積極的に進め、東には太平洋の無数の島々の陣取り合戦に夢中になっていく。

一八八四年五月、ドイツは「ニューギニア会社」を創立し、ニューギニア北岸、ニューブリテン島領有を発表した。これに対して豪州、英国から猛烈な反発が起こり、翌年三月、ロンドンにおいて、ニューギニア北部、北岸諸島、カロリン、マーシャル群島をドイツ領。ギルバート、エリート群島を英領。サモア、トンガ、ソロモン、ニューヘブリデス諸島は英独米の共同管理下におかれることとなった。

ドイツの貿易拓殖会社の事業は順調に発展していたが、米国、豪州人の参入増加に従い、加えて王族三家の内紛にからむ相互の葛藤妨害を放置することができず、三国代表は一八九九年五月、主都アピアに会した。

東サモア（197㎢）（トゥトゥイラ島）はアメリカ領、西サモア（ウポルー島、サヴァイ島）（2,842㎢）はドイツ領となった。

西サモアは一九二〇年以後はニュージーランドの委任統治領。六二年一月独立。

(註) ブーガンヴィル（1729-1811）フランスの航海家。タヒチ、ソロモン、サモア諸島等を調査し、ブーゲンヴィル島、またオシロイバナ科ブーゲンカズラに名を残す。

3. 太平洋の覇権争い

(1) パナマ運河開通（1914）

パナマ運河は、大西洋と太平洋を結ぶ、延長93㎞の世界で最も重要な交通路である。

ここに最初の斧を入れたのは、一八八〇年元旦、かのスエズ運河を成功させたフランス人フェルディナン・ド・レセップであったが、マラリアと峻険な山に阻まれて失敗した。

全ての権利を買収したアメリカが着工したのは、一九〇四年、全米の工兵隊、技術、機械、ヨーロッパ・西印度の労働者四万五千人を動員して、完成したのは一九一四年八月十五日、総費用三億七、五〇〇万ドル、世紀の大事業であった。ついに船、山を登る!! 今日まで休業した日は一日もない。パナマ運河は世界で最も

経済的。ニューヨーク―横浜間、スエズ経由より（3,356海里）短縮。

安全。 土地はアメリカが永久租借。テロに対しても地理的安全。

軍事的。アメリカは太平洋艦隊を編制して軍事力を倍加した。（1919）

(2) ワシントン会議（1921.11.12～22.02.06）

参加国 アメリカ、イギリス、日本、フランス、イタリア、中国、ベルギー、オランダ、ポルトガル 以上九カ国。

議 長 アメリカ国務長官 ヒューズ

決 議 ①海軍軍備制限条約（発言権五カ国）

②中国に関する九カ国条約

③太平洋に関する四カ国条約（日、英、米、仏）

その他七条約、十二の決議が成立した。

この会議は、第一次世界大戦後の極東体制、列国の勢力関係を策定する重要な意義をもつものであったが、日本の中国進出に対する強い警戒、阻止に終始したアメリカの対日宣戦布告であった。東京裁判で日本の中国侵略は九カ国条約違反として糾弾された。

①ワシントン主力艦制限条約（1922.02.06）

米英対日本は五・五・三、この決定によって、日本海軍永年の計画・八八艦隊（戦艦八隻、巡洋戦艦八隻）は、建造済みの長門（ながと）、陸奥（むつ）と、航空母艦赤城、加賀だけが残った。

ワシントン主力艦制限条約保有量

	主力艦及び航空母艦
アメリカ	比率 5
イギリス	5
日　本	3
フランス	1.75
イタリー	1.75

太平洋行進曲
横山正徳

仰ぐほまれの軍艦旗
みよしに菊をいただいて
太平洋をわが海と
風もかがやくこの朝だ
伸ばせ　み国の生命線

②中国に関する**九カ国条約**（1922.02.06）

中国の主権、独立、領土的・行政的保全の尊重。アメリカの極東政策「門戸開放」、中国全土にわたる商業上の「機会均等」が国際條約となって認められた。

③太平洋における島嶼属地に関する**四カ国条約**（1921.12.30）

（参加国）日本、イギリス、アメリカ、フランス

島嶼、領地に関する各国の権利の尊重、太平洋の現状維持を約定した。太平洋、東アジアにおける米、英、仏の植民地はケシの粒も手をつけさせないという。

日英同盟は終了した。日本は裸にされた。日本本土は太平洋島嶼と見なさない。

(3) カリフォルニア州排日新移民法（1924）

第一次世界大戦が終わったアメリカは、矛を太平洋覇権に向けて、その第一歩、排日運動を開始した。

もともと、アメリカという国は、原住民インディアの国に割り込んだ白人移民の国である。

＜西へ西へ＞ 何日幌馬車の尻をたたいても、まだ地の果てに着かない広大な土地を占領して、後からは誰一人として入ることを許さないのが移民法である。

昔、政府所有地を五年間開拓すれば160エーカー（20万坪）もらえたではないか（一八六二年、ホームステッド法）。またオクラホマ・シティは一八八九年四月二十二日正午、ヨーイ・ドンでマラソンを走れば、到着地まで好きな所一区画（20万坪）をもらえたではないか。アメリカは移民が開拓した国である。

日本人は低賃金である。働きすぎる。子沢山である。子供の学校の成績が良すぎる。社会になじまない。（日本人の美徳は総て駄目、怠者になれと言うのか。）

これが機会均等、門戸開放、人種平等の国だろうか。写真結婚、市民権、土地所有権、総て取りあげる加州移民法は、正に人種差別でなくて、何であろう？

時の大統領ルーズベルトは、「その結果として惹起される戦争に対して、国民全体が責任を負わねばならぬのだ」と憂いている。

加州割当移民２％は、アメリカ大陸における日本人根絶をはかった比類なき悪法である。今日のカリフォルニアに日本人、中国人なくして、その繁栄はあったろうか。勤勉は悪法を呼んだ。

日本人は農業移民である。荒野を開拓し、サトウ黍をうえ、種をまき、土に汚ごれ、しゃがんで（モンキー・シッティングという）同じ高さの目線でナスや胡瓜の手入れする。おいしい野菜が育ち生まれる。白人は突っ立って長柄のフォークで牛羊に干し草をやる遊牧民である。モンキー・シッティングはできない。野菜作りはできない。

20世紀の北でも南でもアメリカの農業の基礎をきずいたのは、日本人移民であった。

一六二〇年十一月二十一日、メーフラワー号から新大陸に上陸したファーザーズ一〇一人の夢は、いずこぞ。マニフェスト・デスティニーの栄光はすでに失われたか。

(4) リトル・アメリカ（1929）

南極大陸は、クックの第二次周航（1772～75）によってその周囲が明確かつ狭められてから、アメリカ・フランス・スペインのアザラシやクジラの捕獲船が進出し、急に大陸への科学調査、

関心が高まり、特にアムンゼン隊（ノールウェイ）とスコット隊（イギリス）の先陣争いはあまりにも有名である。スコット隊は（1912.01.17）に極点に達したが、すでに一カ月前（1911.12.14）にアムンゼン隊が到着した後であった。前者の純然たるスポーツ的探検と、スコットの学術調査を重視した探検との差。スコットは気候の不運に遭遇し、基地まで僅か18㎞の雪原で凍死した。（3月29日）

アメリカの南極大陸探検は、90°西にパーマーのパーマー半島（1820）、東にウィルクスのウィルクス・ランド（1840）に探検、調査隊を進め、また一九二九年以来五次にわたり、ロス海ホエール湾氷棚上にリトル・アメリカ基地を設営し、五五年国際地球観測年の中心基地としたが、五七年マリー・バード・ランド基地（80°1'S・119°31'w・標高1515m）に移した。マリーはバード隊長夫人の名。

南極条約（一九六一年六月二十三日発効）

加盟国は日本、アメリカ、イギリス等十六カ国

適用地域は南緯六〇度以南。

［要旨］軍事利用・核爆発及び放射能廃棄物の処分の禁止。科学的調査の自由と協力、情報・結果の交換、領有権の主張の凍結などの南極地域を平和目的にのみ利用する画期的条約である。

（註）**パーマー半島**は一八二〇年アメリカ人パーマーが発見した。**南極半島**は南極大陸から北へ伸び、ドレーク海峡をへだてて南アメリカと対する半島で、長くイギリス・アルゼンチン・チリ間で領有係争地であった。

(5) ロンドン補助艦制限条約（1930.01.21～04.22）

一九六四年、米・英・オーストラリア・ニュージーランドの間で南極半島と呼ぶことに一致した。**ウィルクス・ランド**は、一八四〇年、ウィルクスが発見した。オーストラリアの南の対岸にあたり、アデリからウィルクス、ノックスに達する高い氷壁におおわれた海岸。

ロス海。一八四一年、イギリスのロス探検隊が初めて進入した。南極点に最も近い海面。南緯七八度以南は氷棚。

ロンドン補助艦制限条約 保有量

	主力艦	補助艦	
		総トン数	比率
アメリカ	15（隻）	526.2（1,000トン）	10
イギリス	15	541.7	10.29
日　本	9	367.1	6.97

（註）フランス、イタリアは不参加。
補助艦は、8in砲巡洋艦、6in砲巡洋艦、駆逐艦、潜水艦。
1936.01.16. 日本は会議を脱退した。

太平洋戦争開戦時の日米艦船保有量

アメリカ	433隻	1,459,000トン
日本	235隻	975,793

(6) **大西洋憲章**（1941.08.14）（Atlantic Charter）（領土不拡大の原則）

ローズベルト大統領とチャーチル首相が大西洋の洋上会談で、戦後世界の指導原則を声明した憲章。

七項目の重要政策の第一に領土不拡大の原則が宣言されている。

この原則は米、英、ソ連、中国をはじめ二十六カ国が署名した連合国共同宣言で同意され（1942.01.01）、更にカイロ宣言に引きつがれ（1943.11.27）、連合国の戦争目的として表明されている。

4. 太平洋戦争（1941.12.08）

大川先生は書いている。

「アメリカは、大西洋に於いては英国、太平洋に於いては日本を目標とし、此等両国よりも優勢なる艦隊を保有せんと必死に努力しつつあるのである。二十世紀に至りて舞台は明らかに太平洋に移り、従って覇を太平洋に称へることは取りも直さず世界的覇権を握ることを意味するようになった。何が太平洋をして左様に重大なるものたらしめたか。曰く其の岸に沿ふて支那蒙古が横っているからである。東亜においては、列強が尚ほ競争角逐を試みる余地があり、尚ほ未だ十分に開発されていない厖大なる国土があ

軍　艦　　鳥山　啓

守るも攻むるもくろがねの
浮べる城ぞたのみなる
浮べるその城日の本の
み国の四方を守るべし
まがねのそのふね日の本に
仇なす国を攻めよかし

る故に、太平洋は限りなく価値あるものとなっている。

米国の志すところは、如何なる手段を以てしても太平洋の覇権を握り、絶対的優越せる地歩を東亜に確立するにある。」（全集第二巻702頁）

日米・太平洋覇権争いにおいて、アメリカは軍事力では、ワシントン会議の海軍制限条約によって、政治力では九カ国条約、四カ国条約によって、「門戸開放」「機会均等」主義を国際条約化して、絶対優位な立場を確立した。日本は支那と建国以来千年の唇歯輔車の交わり、アメリカはアヘン戦争の分前争奪に駆付けた新参者。誰ぞ？ 機会均等！と言う？

加えて、移民法によって自国は門戸を閉じ、他国に無理やり門戸解放をせまり、ロシアの極東侵出をくいとめる満洲事変に対して、「九カ国条約及び不戦条約〈一九二八年、ケロッグ＝ブリアン協定〉に違反する如何なる条約、協定をも承認せぬ」と、国務長官スティムソンは表明した（一九三二年）。移民法以来、日米関係は急速に緊張冷却し、日本は満洲事変、国際連盟脱退、九カ国条約破棄をもって対抗し、もはや太平洋戦争不可避へと歴史は流れる。

太平洋戦争開戦

『太平洋戦争 開戦の詔勅』（前付Ⅱ頁に謹写）

5. **［結び］** 二〇一三・五・二二、キャロライン・ケネディ駐日米大使は、日本着任日、「地域の平和と安定が日米同盟の根幹にあるとし」日米関係について「日本ほど重要な同盟国はない」「米国にとって日本ほどの真の友人はいない」と述べた。

二、日本の太平洋進出

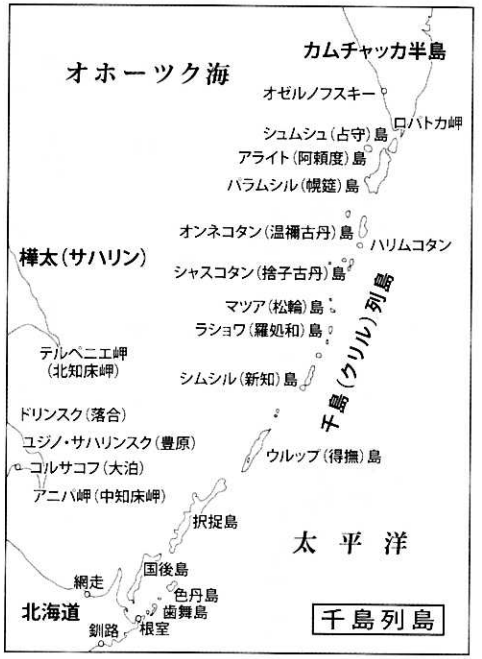
「日本には東洋の平和を維持し、アジアを護る使命がある。」

日本・太平洋進出表

1854	日米和親条約（神奈川条約）。ペリー遣日大使
55	日露和親条約。プチャーチン、下田に入港
75	小笠原諸島領有　（1593 小笠原貞頼発見）
	樺太・千島交換条約
79	琉球を沖縄県とする（廃藩置県）
94～95	日清戦争（台湾、澎湖島、遼東半島を獲得）
95	三国干渉（露、仏、独）。（日本、遼東半島返還）
	尖閣諸島を領有
1904～05	日露戦争（サハリン南半分、旅順・大連租借権、南満洲鉄道権利獲得）
05	竹島を領有
10	日韓併合
12	白瀬南極探検隊、ロス氷棚に上陸し大和雪原と命名
14～47	南洋群島委任統治　（1922 南洋庁）
31	満洲事変勃発、（1932）満洲国建国
37	日中戦争勃発
41	（4月13日）日ソ中立条約
	12月8日　日本、米英両国に対して宣戦布告
45	8月8日　ソヴィエト、対日宣戦布告
	8月15日　日本、米英ソ・三国に対して降伏
51	9月8日　サンフランシスコ講和条約
65	日韓基本条約（日韓請求権・経済協力協定）
72	（9月29日）日中共同声明　（78年8月12日）日中平和友好条約

1. 開国日本・日本の目覚め

歴史は語っている。
両国の全ての記録、書籍、地図は、北方四島「択捉（エトロフ）・国後（クナシリ）・色丹（シコタン）・歯舞（ハボマイ）島」は、日本固有の領土である。



(1) 千島列島は日本固有の島

（○は日本　●はロシア　《　》は著書名）

一六九七　●帝政ロシア・毛皮狩猟時代
コザック首領アトラソフ、カムチャツカ南端ロパトカ岬より千島列島最北アライト島を望見。シュムシュ、パラムシル島に毛皮税を課す。

一七二二　●エヴレイノフ、列島を南進。ハリムコタン、シャシュコタン島に達し正確な地図を作成。全島を《オストロワ・ヤポンスキャ》（日本の島々）と命名。

五四　○北方交易。千島・樺太調査時代
飛騨屋九兵衛、運上所(1)をクナシリ島に進める。

八五　○**山口鉄五郎**ら普請役五名、千島・樺太調査。

八六　○**最上徳内**、エトロフ・ウルップ島調査。

函館奉行、調査並に諸藩兵の監察に当たる。《蝦夷地測量図、蝦夷草紙》

九二　●ロシア最初の遣日使節**ラクスマン**函館来航。

長崎行きを命ぜられ帰国。《日本渡航日記》

九八　○**近藤重蔵**、エトロフ調査。前年ロシア人が立てた標柱を倒し、「**大日本恵土呂府**」と標柱を立てる。《辺要分界付図考》

○幕府、東蝦夷地(2)を上地（返納）させ奉行をおく。

一八〇四　●アレクサンドル一世全権使節**レザノフ**長崎来航。国書、賜物、開港を拒否され、サハリンを調査帰国。幽囚同様の扱いを恨み、軍艦二隻に報復を命令。

○七　○幕府西蝦夷を上地させ奉行をおく(2)

●武装船二隻、サハリン、エトロフ島の番所、運上所、船舶を攻撃荒らしまわる。

○九　○**間宮林蔵**、樺太・黒龍江下流探検。マミヤ海峡発見。（一八〇八）

一一　●**ゴローニン投獄事件**

ディアナ号艦長ゴローニン、南千島・クナシリ測量に来航して捕縛投獄される。副艦長リコルドは三度来航してゴローニン釈放を交渉、観世丸を拿捕し、船主**高田屋嘉兵衛**を人質に連れ去る（一八一二）。幕府、リコルドから一札を取って、翌年互いに釈放。　一八一六年《日本幽囚記》。一八二二年《遭厄日本紀事》日本語翻訳。

一八五五　**日露和親条約**（二月七日）

ロシア代表**プチャーチン**《日本渡航記》

一、千島列島の分界をエトロフ・ウルップ島間の水道とする。

二、樺太は「日露間に界を分たず」、即ち両属とする。

七五　**樺太・千島交換条約**（五月七日）

一、ウルップ島以北のロシア領千島（クルリ群島18島）を日本領とする。

二、サハリン全島をロシア領とする。

一九〇五　**日露戦争・ポーツマス条約**（九月五日）（205頁参照）

「北緯五〇度以南の樺太島及び付属島を日本に譲渡する。

〇七　日本は、大泊（コルサコフ）に樺太本庁をおき、パルプ、製紙工業、水産業など開発を進める。

二五　日ソ基本条約によって、北サハリンの石油、石炭産業を開発したが、張鼓峰・ノモンハン事件によって打ち切られる。

四五　日本降伏後の8月28日から9月5日にかけてソ連軍は四島を武力で不法占拠。

五一　**サンフランシスコ講和条約**（九月八日署名）

日本は千島および南樺太に関するすべての権利を放棄する。（条約第二条C項）

五六　**日ソ共同宣言**（十月十九日）

ソ連は歯舞、色丹島を日本に引渡すことを同意、引渡は平和条約締結以後とする。

（宣言第九節第二項）

二〇一〇　（十一月一日）ロシア・メドベージェフ大統領、日本固有の領土・国後島を訪問。

［結び］

四島は、今はソ連に不法占拠されているが、百年たてば歴史は変る。変らなくても、永久に日本の領土である。北方四島は有史以来日本以外の領土となったことはない。

（註）

1. **運上所**（運送上納の略）幕末、輸出入貨物の監督や関税の徴収などを行った開港場の役所。
2. **蝦夷地**（北海道）を千島から知床岬、中部山岳松前までの太平洋側を**東蝦夷**。日本海側を樺太を含め**西蝦夷**とし、蝦夷奉行（のち箱館奉行、松前奉行）をおき開発、警備、交易にあたらせた。

(2) 小笠原諸島（Bonin Island）東京から南へ千キロ、島固有の鳥類、草木豊かな楽園。

一五九三　信州松本藩主・小笠原貞頼が発見。一説よれば、小笠原氏の武功に与える領地に困った幕府から、海の向こうの島を見つけたら、それを与えると言われ、初めて見る海、荒波に翻弄されながらも発見した島という。

外国名（ボニン島）は沖を通った外国船の船長が支那人の船員に島の名前をきいたとき、船員は〈無人島（ボニン）〉と答えたところから。因みに小笠原家は小笠原流礼法の家元。

一八二七　英艦ブロッサム号来島、イギリス領を宣言。

三〇　アメリカ人サヴォリーがハワイ土人をつれて移住。

五三　ペリーが貯炭所を買取り、サヴォリーを首長に任命。英米間に領有権紛争起こる。

六二　幕府、八丈島の島民を移住。

七五　明治政府、各国の承認を得て領有を宣言。

八六　父島に小笠原支庁を開設。

沖ノ鳥島（Parece Vela）

一九二二　一七世紀スペイン人が発見。一九二二、二五、測量艦・満洲が調査。沖ノ鳥島と命名。

三一　小笠原支庁に編入、日本領と認められる。

硫黄島

一七七九　クック探検隊によって発見。（十一月）

一八九一　正式に日本領となって小笠原支庁に編入される。第二次大戦の激戦地。

一九六八　米軍から返還。

(3) 琉球王国

一四二九　尚巴志王が三山を統一し、王都を首里に定めて、琉球王国を創建した。

第二尚氏王国・尚真王は琉球仏教界の本山として円覚寺を建立し、中国の宮廷文化を導入、中国から冊封使をむかえて（一四七九）、黄金時代をきずいた。

沖縄は海のシルク・ロードの拠点として、東南アジア、中国、日本、朝鮮と盛んに交易して繁栄した。

長い戦国時代を終って余勢をかった豊臣・徳川の思わぬ圧力が掛ってきた。

秀吉は朝鮮出兵に七千の兵と十カ月の兵糧、戦費分担を命じ、家康は中国との関係

一六〇九　修復斡旋を命じた。
　　島津の沖縄征討。島津は「積年の無礼をただす」と、兵三千を送ってきた。
　　以後沖縄は、明貿易の利益の独占をはかる薩摩に、明との冊封関係を継続するよう強いられ、王国は島津と明国の二重の支配に苦しめられる。
一八五四　米国ペリー来航、琉球条約七カ条を調印。（七月十一日）
五五　ペリー、琉球及び小笠原列島の重要性を説き、その占領を本国政府に提案したが、五三年政権は民主党に移り、大統領ピアースの入れるところとならなかった。
七一　日本政府は鹿児島県に編入して琉球藩を設置し、尚泰王は華族に列せられたが、七九年廃藩置県を強行した（琉球処分）。尚泰王は残波岬に見送る涙の島民に別れを惜しんで江戸へ出立する。日本と清国の帰属問題は日清戦争によって決着した。
一九四五　四月一日、米軍上陸、六月二十二日まで激戦。
五二　四月一日、琉球政府発足、六八年政府主席公選、屋良朝苗当選。
六二　五月、アメリカ国務次官補ジョンソン声明、
　　「アメリカの国防政策にとって沖縄は無期限に必要である」
七一　六月、沖縄協定『琉球諸島及び大東島諸島に関する協定』により本土に復帰する。

(4) 尖閣諸島

一八八五　沖縄県の十年に亙る調査開始。
九五　尖閣諸島はいずれの国にも属さないことが確認されたので、日本国領土と決定、沖縄県（石垣村）に編入。
九六　日本政府、福岡県の実業家・古賀辰四郎に三〇年間の無料貸与。
　　古賀は、アホウ鳥の羽毛、カツオ節工場、サンゴ採取等を行ない最盛期「古賀村」には一〇〇戸、二五〇人もの日本人が居住。
一九二〇　尖閣島沖で遭難した中国漁民三〇名を救助し本国（福建省恵安）に送りかえす。
　　感謝状「中華民国駐長崎領事馮冤より
　　宛先「日本帝国沖縄縣八重山郡尖閣列島石垣村長豊川善佐君」（八重山博物館所有）
四〇　カツオ工場閉鎖、無人島となる。
五二　サンフランシスコ平和条約発効、アメリカの委託統治下に入る。
六九　国連アジア極東経済委員会（ECAFE）、東シナ海一帯に豊富な（一〇九五億バレル）油田が見込まれると発表。
七一　沖縄返還条約締結。尖閣諸島の統治権が日本に戻る。
　　中国・台湾が尖閣諸島領有権を主張。
二〇一二　九月一四日日本政府、地権者から二〇億五千万円で三島を購入し、国有化。
一三　十一月二三日、中国は突如東シナ海に「防空識別圏」を一方的に設定。設定図は日本の設定図（一九六九）に深く喰いこみ尖閣諸島を含む。
一四　四月二五日、安倍・オバマ日米共同声明では「日米安全保障条約の下での約束は、尖閣諸島を含め、日本の施政の下にある全ての領域に及ぶ」と明記されている。

(5) 日清戦争（1894～95）

一八七六　**日朝修好条規**(1)で、日本は朝鮮を独立国と認めたが、清国は朝鮮の宗主権を主張し、朝鮮も事大の礼(2)をとっていた。

八五　**天津条約**　朝鮮に事ある際の派兵には日清互いに知らせあうことが決められた。

九四　朝鮮全羅道で農民が蜂起した「東学党の乱」(3)に対して、清国・袁世凱は要請に応じて大軍を派兵し、通告をうけた日本も兵七千を朝鮮に派兵した。反乱農民軍の撤収後も両国軍は撤兵せず方々で衝突し、ついに八月一日たがいに宣戦を布告した。

日本軍は、鴨緑江を渡り旅順を占領し、翌年一月には山東半島威海衛に李鴻章育成の虎の子・北洋艦隊を撃滅した。清国の敗北は決定的となり講和に至った。

日清講和条約（下関講和条約）

条約日　一八九五年四月十七日

日本側　伊藤博文　陸奥宗光　　清国側　李鴻章

一、朝鮮の独立の確認。

二、清国は遼東半島・台湾・澎湖島列島を日本に割譲。

三、賠償金二億テール、その他、最恵国待遇、開港など

この条約によって日本は朝鮮支配の基礎を固め、中国大陸進出の道をひらいた。

黄海の大捷

見るより早く　開戦し
敵の気勢を　うちひしぎ
わが日の丸を　黄海の
波路に高く　輝かし

（註）

1. **日朝修好条規**。**江華条約**とも言う。日韓併合の項に詳細。
2. **事大の礼**。弱小者が強大な者に従い事（ツカ）えること。朝鮮は一六三七年、清に降ってから**事大の礼**をとっていたが、江華条約以来、**事大党**（親清派）と**独立党**（親日派）の争いが激しく続いた。
3. **東学党**。儒仏道の三教をとり入れた単純、迷信的な天道教を奉ずる徒党であったが、下層農民に普及し、次第に革命的暴動に走った。朝鮮は独力で鎮圧できず支援を清国に求めた。

(6) 三国干渉（1895）

一八九五年四月二十三日（日清講和条約締結の六日後）

（午前）日本国外務省・林外務次官応接室

ご来客　駐日ロシア公使　ヒトロボ様

駐日フランス公使　アルマン様

（午後）ご来客　駐日ドイツ公使　グートシュミッツ様

口述覚書

『日本が遼東半島を領有することは清国首都を危くし朝鮮の独立を有名無実ならしめ、東亜永遠の平和に障害あるを以て、放棄せよ』

三国艦隊は日清講和条約の交渉地チーフ沖に集結した。

五月五日、日本は切歯扼腕、臥薪嘗胆、半島を放棄した。代金は三千万テール（四千五百万円）。

イギリスは、日本の軍事的強化は、ロシアの南下に対する防壁になると、干渉には加わらなかっ

たが、各国の分前は見事、濡手で粟。日本はどこの国のために戦ったのか？

ロシア　遼東半島租借、東清鉄道敷設権獲得。
イギリス　威海衛・九龍半島租借。
ドイツ　膠州湾租借。
フランス　広州湾租借。

三国干渉はヨーロッパ列強の清国分割の道を開き、また日本をして極東における最強の軍事国家とし、日露戦争の火種となっていく。

この三国干渉には黄禍論を唱えたドイツ皇帝ヴィルムヘルム二世が強力にロシアを支援していた。

（註）**黄禍論**　日清戦争末期、黄色人の興起は、ヨーロッパ文明の命運にかかわる大問題とする黄色人種抑圧論。特にドイツは、地理的に黄禍阻止の前衛たる役割をはたすべきロシア支援を惜しまないと。

2. 日露戦争・アジアの目覚め

(1) 露清秘密協定（李＝ロバノフ密約）

一八九六年、ニコライ二世の戴冠式に参列した全権大使・李鴻章、ロシア外相・ロバノフ、蔵相・ウィッテの三役が、舞台裏でこっそり密議をこらしていた。

「日本を唯一の仮想敵国として、日本の侵略に対する両国の相互武力援助、単独不講和。

戦時におけるロシア軍艦の清国港湾の自由使用など。

更に清国は兵員輸送のため東清鉄道建設経営権をロシアに許与する」

この密約にはウィッテ蔵相から李に三百万ルーブルという莫大な賄賂が渡されていた。

九八年、ロシアは、ハルピンから旅順港にいたる南部支線（後の南満洲鉄道）敷設権と遼東半島（旅順、大連）の租借権も手に入れたが、中国に反露感情がたかまり、この協定は守られなかった。

(2) アロー号（Arrow）事件（1856）

ロシア、沿海州を奪う。

イギリス国旗を掲げた密輸船アロー号を清国官憲が臨検した。これを機会にアヘン貿易を中国全土に拡大しようとしたイギリス、フランス軍は天津に侵入する。

英米露仏、四カ国は清国に天津条約を強制して、キリスト教布教、英仏商船の内地河川の自由航行、アヘンの輸入や苦力（クーリー）の輸出等を公認させ、中国の半植民地化をいっそう深め、さらに**北京条約**(註)で清国はロシアに沿海州を、イギリスに九龍を譲渡することとなる。

（註）**北京条約**。一八六〇年、天津条約の批准書交換のため北京におもむいた英仏公使が突如太沽砲台から砲撃されたため、両国軍が北京に侵入し、ヴェルサイユ宮殿に比すべき円明園宮殿を掠奪焼尽した。北京条約は天津条約を基準とし、賠償金を増額、清国は**九龍**と**沿海州**を失い、清末のキリスト教排撃運動となった「仇教運動」の因ともなる。

(3) 義和団事件（1900）（北清事変）

白人の支配は、「神父先頭に立ち砲艦これに次ぎ」、伝導者が侵略の尖兵的役割を果たしていた。熱心な（？）神父・信者の傍若無人な振舞いに、秘密結社義和団が「扶清滅洋」の幟旗のもとに総決起し、労働者、農民を糾合して二十万の大暴動隊が北京に入城し、「義軍」に加わった官軍と共に、列国の公使館村・東交民巷を包囲攻撃し、その頂点に達した。清国は列国に宣戦を布告した。（1900.06.21）

八月、日・英・米・仏・露・独・伊・墺の八カ国連合軍二万が北京を占領し、清廷は西安に蒙塵し、翌年ようやく講和会議に入った。

「**北京議定書**」（**辛丑和約**（シンチュウ））では関税・塩税を担保に三十九年払いの賠償金四億五千万両の大金を課せられて、清国は決定的に半植民地に転落するが、清廷の複雑、動揺する態度と民衆の強固な抵抗、連合国内の獲物分前の衝突とからんで、中国分割の危機をくいとめた功績を認めざるをえない。議定書は一九〇一年清国と連合軍十一カ国で結ばれた。

一九〇二年、ロシアを対象とした日英同盟が結ばれた。

(4) ロシアの満洲占領

義和団事件を好機至れりと、待っていたロシアは東清鉄道保護を謳って、十七万七千の軍をいっせいに満洲に入れ、全満洲を制圧し吉林、遼陽、奉天を占領した。まずは黒龍江の黒き流れを真っ赤に染めて、清国人何千何万を虐殺して河に放りこむことに始まった。

日本は何回か強行に抗議した。

ロシアは返事どころか、満洲はこっちのもの、朝鮮を半分よこせと図々しさ。一八九九年には馬山浦(註)に軍艦三隻が入港し、翌年には土地譲与を朝鮮王と密約していたという。

さすが厚顔のロシアも日英同盟に微々ったか、同盟締結の二ヵ月後に清国と**満洲還付条約**を結び、神妙に第一期撤兵を実行した。

しかし、ロシアが第二期撤兵をやる気はなく、軍人アレクセーエフを極東総督に任命して、来るべき日露決戦に備えて、満洲の兵舎はロシア兵で満杯になってきた。

(註) 宮脇淳子「世界史のなかの満洲帝国と日本」148頁
馬山浦は慶尚南道南部の港湾都市。日本海海戦の東郷艦隊主力の集結待機した港。一八九九年開港。俗称〝小釜山〟

(5) 日露戦争（1904～05）

臥薪嘗胆、隠忍自重、遂に日本政府は一九〇四年二月十日、宣戦を布告した。

○五年一月一日、乃木大将率いる第三軍は難攻不落を誇った旅順を攻略。

三月十日、最後の陸上決戦となった大山総司令官率いる奉天会戦。

五月二十七日、「天気晴朗ナレドモ波タカシ」東郷大将率いる日本海海戦。

「十万の生霊と二十億の国費」を費やした日露戦争は日本の勝利に終わった。

ポーツマス条約（1905.09.05）

一九〇五年八月十日開会、九月五日成立。ニュー・ハンプシャー州ポーツマスにおいて。

日本側　外相・小村寿太郎　　ロシア側　前外相・ウィッテ
斡旋　アメリカ大統領　ルーズヴェルト

一、ロシアは、日本の韓国における政治上、軍事上、経済上の卓越権を認める。
二、ロシアは、旅順港・大連港およびその領土、領水の租借権、
三、東清鉄道南満洲支線及び沿線の鉱山、付属権利、
四、北緯五〇度以南の樺太島を日本に譲渡する。
五、オホーツク海及びベーリング海の沿岸漁業権を日本国民に許可する。

日露損害
日　本　戦病死12万、　艦船喪失91隻、　軍費15億円
ロシア　死者11万5千、艦船喪失98隻、　軍費22億円

日露戦争の日本勝利は、
①全世界の被圧迫有色人に勇気と希望を与えた。
②国内的には軍需産業の急速な発展、国際的には朝鮮支配、日韓併合、満洲支配へと進み、日本・アメリカの対立へと流れていく。
敗戦のロシアは革命、ツァーリズムの崩壊へと向かっていく。

水師営の会見
佐々木信綱

旅順開城約なりて
敵の将軍ステッセル
乃木大将と会見の
所はいずこ水師営
庭に一本なつめの木
弾丸あともいちじるく

戦　友
真下飛泉

ここは　御国を何百里
離れて遠き満洲の
赤い夕日に照らされて
友は野末の石の下

3. 日韓併合

(1) 江華島事件（1875.9月）

江華島は京畿湾漢江河口にある王朝離宮の島。蒙古軍(1232) 満洲軍(1627)の侵入に際して、王はこの島に避難し、フランス艦隊は島を占領し多数の書籍を持ち去った（1866）

一八七五年、日本軍艦雲揚号が江華島砲台から砲撃され交戦して占領する事件が起きた。

江華条約（大日本国・大朝鮮国修好条規）(1876.02.07)

①朝鮮は「自主の邦」、独立国として日本との国交を開く。
②釜山、元山、仁川の三港を開く。
③京城に日本公使館、各港に領事が駐在する。
④領事裁判権を認めること。

この条約は、日朝関係の始まりであり、また朝鮮国最初の開国条約であった。

(2) 日韓議定書（1904.02.23）

朝鮮は、その位置からも、日本、清国、ロシアの三国に囲まれ、宮廷内は親日改革派、親露排日派の闘争、清国の国内政情などに複雑にからまれていた。

日本は、日露戦争開戦の当日、一九〇四年二月二十三日、日韓議定書に約束した。

「大日本帝国政府ハ大韓民国ノ独立及領土保全ヲ確実ニ保障スルコト」（第三条）

この条約は猛虎の前に子羊を守る命がけの誓約であり、明治維新の気概であった。

(3) 日韓併合（1910.08.22）

日韓協約によって、韓国は日本人顧問、統監を受け入れ、内政、外交を任せ、更に自国軍隊を解散し、一九一〇年八月二十二日、日韓併合条約を締結した。

条約には韓国皇帝及び一族の名誉尊重、韓国人の保護と福利増進などが約された。

李王朝は、太祖李成桂が北辺の侵入を防いで、一三九二年、五七歳で建国以来、二十七代・純宋帝まで五一九年にして滅んだ。

(4) 竹島

一八七一　幕末の志士・吉田松陰は「竹島は国防上重要拠点」と、桂小五郎に書簡。

一九〇五・01・28、日本政府、正式名称を「竹島」と命名し島根県に編入。

一〇・08・22、日韓併合により朝鮮半島全体が日本領土。

四五・08・15、韓国が日本領土から解放される。

四八　半島南半は大韓民国・李承晩大統領。北半は朝鮮民主主義共和国・金日成首相となる。

五一・09・09、サンフランシスコ平和条約調印。竹島は日本領土に復帰。

五二・01・18、李承晩ライン設定（一方的宣言）

六五・06・22、日韓基本条約（日韓請求権・経済協力協定）締結（李ライン廃止）

二〇〇五・03・16、島根県議会、二月二十二日を「竹島の日」と決議。

06・09、韓国慶北道議会、十月を「独島の月」とする。

一二・08・21、韓国李明博大統領竹島に上陸。

韓国は、日本が一九五四年と一九六二年に国際司法裁判所に提案した共同付託を拒否。今回三度目も拒否している。

(5) 日韓基本条約（日韓請求権・経済協力協定）（1965.06.22）

この基本条約は、日韓両国の国交正常化に当たり、両国の賠償問題は「完全かつ最終的解決された」と確認しあって締結されたもので、日本は韓国に五億ドルを経済支援した。現在（二〇一三年）のレート、物価では四兆五〇〇〇億円に相当する巨額でその上生産設備五十三億ドルを放棄し、韓国の復興に対する貢献はまさに刮目に値するものである。

4. 南進日本

(1) 白瀬・南極探検隊

わが国最初の南極探検隊・白瀬矗（シラセノブ）の木造帆船・開南丸（204ト）は、一九一〇年十一月、東京港を出港した。途中ウェリントンでは船の修理、食糧の資金に窮し進退谷まったが、現地在留邦人の献身的援助によって再起し、十二年一月、南緯50度のロス海ホエール湾に今も名が残る「開南湾」の棚氷に上陸。南極点に向け犬ぞりを九日間走り続け、南緯80度5分で装備と食糧不足に力尽き、一帯を「大和雪原」と命名し、日本領土であることを宣言して引き返した。

日本は第二次大戦後、南極に対するすべての発言権を放棄した。

南極地域観測隊がオングル島に昭和基地を建設したのは、一九五七年一月であった。

（註）白瀬矗は秋田県仁賀保市、生家は浄運寺。子供の頃から極地探検を志し、厳寒にも火の気は全く取らなかったという。陸軍中尉。探検に政府の援助は得られず全て自費、返済に二〇年以上かかったという。

辞　世

我れ無くも必ず捜せ南極の
地中の宝　世にいだすまで

(2) 南洋群島・委任統治

スペインの探検家ヴァスコ・バルボアがインディアンの案内で、ヨーロッパ人としてはじめて太平洋を発見（1513.09.25）、〈南の海〉El Mar der Sur と命名し、以来〝南洋〟の名称を用いた。

赤道以北の南洋に点在する一、二三〇余の島々は、マジェランの発見以来スペインが領有していたが、一八八〇年代ドイツが買収した。ヴェルサイユ条約によって日本が国際連盟の委任をうけて統治し、第二次大戦後アメリカの信託統治領となり、自主独立した。

マリアナ諸島　一五二一年三月、マジェランが発見し〈どろぼう諸島（ラドローナ）〉と命名した。一六六八年、スペインのマリア・アンナ皇后の援助によって来島した宣教師が、皇后の名前を記念してマリアナ諸島と名づけ、スペイン領を宣言した。一八九九年ドイツが買収。主島はサイパン島。グアム島は米西戦争によってアメリカ領となる。

パラオ諸島　多種の石貨が珍しいこの島はスペイン人ビリャ・ロボスが発見した。（一五四三）

一八八九年ドイツ買収。一九二二年日本コロール島に南洋庁をおく。九四年パラオ共和国、主都マルキョク。

カロリン諸島　十六世紀ポルトガル人がパラオを、十七世紀それ以外の島をスペイン人が発見し、一八八九年ドイツが買収した。農業は殆どなく、カツオ、マグロやタカセ貝採取船の基地となって海に生きる住民たち。特殊な母系民族制組織が残っている。

マーシャル諸島　一五二九年スペイン人サーベドラが発見。一七八八年イギリス東印度会社のマーシャル船長が詳細な調査を行ったので島名となった。東側はラタック諸島（日の出）、西側はラリック諸島（日没）。一八八六年ドイツ併合。一九二〇年日本委任統治。一九四六年アメリカがラリック・ビキニ環礁で水爆実験。八六年マーシャル諸島共和国、主都マジュロ。

（註）どろぼう諸島　(Islas de las Landrones)

一五二一年三月六日、マストから陸だ、陸だ、という叫び声がひびいた。もう二、三日（太平洋の）空虚の中をさまよったならば餓死した乗組員を乗せた船は漂う墓場と化し……しかし新しい島には人が住んでいる。無気味に速いカヌーが飛ぶように漕ぎよせてきた。素裸の自然児たちが猿のように甲板によじ登ってきた。彼らは道徳的概念を一切知らなかったから、その辺にあったりころがったりしているものは何でもかっぱらって、あっというまに手品のように消えうせた。

とうとういまわしい白い野蛮人がこわくなって森の中へ逃げて行ってしまった。飢えきったスペイン人は大急ぎで、人のいなくなった小屋からニワトリ、豚、果実など奪えるかぎりのものをすっかり引きずり出した。こういうふうに土人はスペイン人から、スペイン人は土人から盗み合ったあとで、文明人のどろぼうたちは罰として永遠に「ラドローナ」即ち「どろぼう島」という悪名をつけたのである。（みすず書房「マゼラン」208頁）

5. 日中戦争・中国の目覚め

(1) 満洲国建設

日本には東洋の平和を維持し、アジアを護る使命がある。

満洲は日本の生命線である。満蒙一たび乱るれば極東忽ちにして混沌乱離の巷となる。

満洲はアジアの生命線である。東洋が危ない。

さればこそ、十万の生霊と二十億の戦費を費やして、極東に対するロシアの野心を排撃せるのみならず、白人の世界制覇の行程を挫折せしめ、世界史の新しい第一項を書き始めたのである。

ロシアは東へ「ウラジボストーク、東方を支配せよ!!」「不凍港を獲得せよ!!」

スラブには、東洋支配の血が脈々と今も流れている。

アメリカは西へ「ロッキー越えて太平洋を支配せよ!!」「支那の門戸を解放せよ!!」

支那は宝庫、最後の植民地である。

軍閥時代

一九一一年、三歳で帝位をついだ清朝宣統帝は、北洋軍閥・袁世凱によって退位させられ、十二代、三百年続いた清国は滅亡した。以来、八代の大統領は悉く軍閥の首領であった。その間、全国二十に余る各省の「将軍」軍閥は、公然と互いに侵略し、常に戦いを望んで対立、和合、寝返りは茶飯事であった。

満洲は、奉天将軍、吉林将軍、黒龍江将軍の三将軍が跋扈していたが、清国は日露戦争後に「省」とし地方長官、その上に東三省総督をおいて統治した。

一九二二年、興安嶺の馬賊出身の張作霖は東北三省の実権を握って、北京に迫ったが、米英が支援した直隷派に破れ、奉天に帰り、東三省の独立を宣言した。

軍閥抗争の間に、蒋介石の北伐軍三十万が北京へ無血入城する。(1928.08.01)

むかえる北洋軍閥は、張作霖を総大将とし、自らも念願の大元帥に就任し、勇躍天下分け目に臨んだが、連戦連敗、奉天に帰る列車が何者かに爆発され、千馬倥偬の生涯を閉じる。

中国国民党

中国革命の父・孫文は、滅満興漢(民族主義)・共和制樹立(民権主義)・地権平均(民生主義)の三民主義をかかげ、日露戦争の終わった一九〇五年、東京で中国革命同盟会を結成した。

孫文の革命運動は、五・四運動[1]の高まりに軍閥と手を切り、一九一九年上海において中国国民党を結成し、第一回全国代表大会には毛沢東ら共産党代表も参加した(1924)

時を同じくして、ロシアでは一九一七年、三百年続いたロマノフ朝が滅亡し、矢つぎ早に、レーニンのソヴィエト政府、コミンテルン(1919)、カラハン宣言[2](1919)、中国共産党成立(1921)、ソヴィエト社会主義共和国連邦の誕生(1922)、孫文・ヨッフェ共同宣言[3](1923)、中国のソ連邦承認(1924)、国共合作(1924)、モンゴル人民共和国成立(1924)等々続く。

孫文は、共産党と連合して、常に革命の先頭に立って、北京で「革命未だ成らず」と残して死去する。

（註）

1. **五・四運動**（一九一九・五・四）
二十一カ条に反対した北京の学生デモは条約調印の責任者・曹汝霖邸を焼きはらい、市民、商人、労働者を巻込んだ大規模ストライキに発展した。北京政府は屈服し、親日要人を罷免しパリ条約調印拒否を決定した。暴動は、軍閥と帝国主義国に対する反対運動、更に社会主義思想を急速に中国にひろめる結果となった。

2. **カラハン宣言**　一九一九・七・二五日と二〇・九・二七日付のロシア連邦共和国外務人民委員長代理カラハンの名によって、帝政ロシア時代の対華不平等条約の破棄。中ソ平等なる国交樹立。中国民族解放運動の支援を宣言したもの。
カラハンはアルメニア人で、中ソ協定、日ソ基本条約、日ソ漁業条約締結に貢献した。この宣言は、世界最初の対華平等宣言として世界各国に大反響を与えた。これを受けて、孫文の広東政府は、直ちに連ソ・容共策を打ちだした。

3. **ヨッフェ**　ソ連の外交官。日ソ国交回復のために、東京市長後藤新平の招きで来日し、上海で孫文と会見し、コミンテルンは中国の民主主義革命のため国民党を援助する共同宣言を発表した。

排日運動

満洲全土には燎原の火の如く民族運動、日貨排斥、反帝国・反資本闘争、百姓一揆、ストライキが燃えあがった。

更に火に油を注いだのは日本の二十一カ条(1)の要求である。この要求は、大隈重信内閣が一九一五年五月七日、袁世凱総統におしつけ、五月九日に総統が受諾したもので、中国では「五・七・五・九の国恥記念日」としている。

二十一カ条は、一九一九年六月の五・四運動、一九二五年五月の五・三〇事件(2)を引きおこし、封建体制の崩壊、革命の波、社会主義思想を急速に広める結果を生んでいく。

張学良(3)は、北伐後の南北戦争の前後策を協議すべく北京において、蔣介石に「予の父は日本人に殺された。予は満蒙より日本勢力を駆逐することによって之を復仇せんと欲する。予の畢生の願である」と誓い、一夜にして蔣介石の治下に鞍替えした。蔣は彼を東北辺防軍司令長官、後に西北剿匪司令に任命した。

満蒙の事態は日に日に険悪を加えていく。

その一例として、「五四学生運動」のポスターに使用する学校の習字手本には、『日本の中国侵略は約五十年以前、わが属国琉球を日本沖縄県とせるに始まる。日清戦争にはわが台湾を取り、日露戦争ではわが属国朝鮮を併合し、之より日支両国は遂に陸地を相接するに至った』と教えている。排日の根は深く遠い。(4)

排日は、「二十一カ条は無効」「関東軍撤兵」「満鉄接収」「旅大回収」、更に大総統令「懲辨（チョウバン）国賊条例」によって「商租権」は無効、鉱業・森林開発の禁止、日本人と取引したヤツは全部国賊だというもの。満鉄包囲線建設、日本人の汽車には乗るな、という。

（註）1. **二十一カ条**の要求（要点のみ）
(1) 山東省の全ドイツ権益の譲渡。
(2) 旅順・大連租借権を九十九年延長する。
(3) 中国沿岸のいっさいの港湾・諸島の第三国への不譲渡・不貸与。（以下略）

この要求は、欧米列国が第一次大戦のため中国から手をひいたのに乗じて、日本は独占的植民地に変えようとした意図を見せたもので、国際的不評を買うのであった。

2. **五・三〇事件**（一九二五年五月三十日―六月二十六日）
上海南京路でデモ隊が外人警官の発砲で多数の死傷者をだし、デモは全国に波及し、帝国主義諸国は軍隊を上陸させ、軍閥を引き入れて制圧した。全国的外貨排斥、排外運動、革命の波、北伐に発展した。

3. **張学良**　西安事件で蔣介石を監禁したため十年の禁固に処せられ、貴州、台湾新竹に移され、晩年釈放されて、ハワイに余世を送った。

4. 全集Ⅱ―657頁

満洲事変

一九三一年九月十八日未明、柳条溝で満鉄線路が爆破された。事変の勃発である。日本軍は、三十一年中にはほぼ満洲全域を占領した。東北軍閥では黒竜江主席代理・馬占山がチチハルで激しく抵抗したほか、張学良主力十一万は北京にいて、蔣介石の命により不抵抗であった。

リットン報告（正式名）〈国際連盟日華紛争調査委員会報告〉
（この報告は中国が紛争解決を国際連盟に提訴したもの）

満洲行進曲　大江素夫

東洋平和のためならば
我らがいのち捨つるとも
なにか惜しまん日本の
生命線はここにあり
九千万のはらからと
ともに守らん満洲を

団　長　イギリス・リットン伯爵（五六歳）
フランス・クローデル中将（六二歳）
ドイツ・シュネー博士（六一歳）
イタリア・アルドロヴァンディ伯爵（五六歳）
アメリカ・マッコイ少将（五九歳）

日　程　一九三二年二月末東京着、現地調査（四月二〇日―六月四日）、一〇月二日公表

報告要旨　〈日本側の軍事行動は正当なる自衛手段〉とは認めえない。満洲国は〈純粋かつ自発的な独立運動によって出現したものとは考えることができない〉

総会審議　一九三三年二月二四日、国際連盟で審議され、42対1で採択され、日本代表・松岡洋右は「日本政府の連盟に対する協力は限界に達した」と声明して退場。三月二十八日、日本は正式に連盟から脱退した。

大川先生は、「連盟は世界旧秩序維持の機関であります。復興アジアを本願とする日本が世界の現状即ちアングロ・サクソンの世界制覇を永久ならしめんとする機構に加わることに大いなる憤りを感ずる」と書いている。

事実、戦勝国の帝国主義的利益を反映し、植民地や中小民族の利益をできるだけ圧迫したヴェルサイユ条約・体制を継承した連盟は、遠からず破綻する運命にあった。

満洲国建設

一九三二年三月、〈王道楽土〉と満・漢・蒙・回・蔵の〈五族協和〉を綱領として、満洲帝国

が建設された。清朝最後の皇帝溥儀が満洲国皇帝に就任し、日本は九月十五日に正式に承認し、**日満議定書**(1)を締結した。

一九三三年二月、国際連盟総会で満洲国不承認となったが、三四年、最終的には承認した国が十五、事実上承認した国が二十三で、中国政府、ソ連も後者であり、またローマ法皇庁は前者の承認国であった。(2)

(2) 日中戦争

一九三七年七月七日、日本は盧溝橋事件に確たる見通しもなく「北支事変」「支那事変」へと戦火を拡大した。三七年年末には上海、南京、三八年十月には広州、武漢を攻略した。

中国側は西安事件（36.12.12）国共合作以来、抗日戦力は強大され持久戦になっていった。

三八年一月十六日、近衛首相の「爾後国民政府を対手にせず」声明によって和平の道は閉ざされた。日本は三八年末には国民政府要人汪兆銘を重慶から脱出せしめ、四〇年三月に南京政府が発足した。九カ国条約によって「門戸開放・機会均等」を勝ちとったアメリカは南京政府を承認せず、日米関係は急速に悪化し、破局に向って進む。

日本は広大な中国大陸の点と線を保持するにすぎなく、占領地区の八路軍(3)のゲリラ警備に30個師団の陸軍が釘づけされた。

一九四五年八月六日、広島に原爆投下。

八月八日、ソ連の駆込み参戦。十日にはモンゴル人民共和国〝時間デス〟参戦。

日本の降伏によって満州事変以来十四ヵ年の日中戦争は終わった。

満洲帝国は八月九日、朝鮮国境・通化へ移転を決定。十一日国境臨江の大栗子溝（ターリーズコウ）に到着し、ここで満洲帝国皇帝退位式が行われた。一行は日本に亡命する手筈であったが、十九日奉天空港でソ連軍に拘束され、溥儀と皇弟溥傑らは中国共産党に引渡され、一九五九年特赦釈放された。

（註）1. 日満議定書（一九三二年九月十五日）

（本文）満洲国は、日本国又は日本国民が諸取引、契約により有する権利・利益を承認する。日満両国が共同防衛に当たり、日本軍が満洲国内に駐屯することを約する。

（付属文書）駐留経費など四項目詳細が議定されている。

2. 宮脇淳子「世界史のなかの満洲帝国と日本」223頁

3. 八路軍　一九三七年八月二二日、従来の中共紅軍は国民政府軍事委員会によって中国国民革命軍第八路軍に改編され、当時の兵力は四万～五万であった。戦争終結時には60万の正規兵力に発展した純然たる中共軍であり、四七年三月、中国人民解放軍と改称した。

終戦

勇戦空しく　白骨は山をなし　血潮は川をなし
戦い破れて　国亡びんとす

『**終戦の詔書**』（玉音放送）（前付きⅢ頁に謹写）

6. 日・中和平の共同声明

対日講和条約は、サンフランシスコにおいて日本と連合国55のうち48国の間に署名され

(1951.9.8)、翌1952.4.28発効した。

この会議に中華民国（台湾）と中華人民共和国（北京）は招請されなかった。それは前者を支持するアメリカと後者を支持するイギリスと不一致によるもので、両者のいずれを相手とするかは日本の自由とすることに了解されていた。

1951.12.24. 吉田茂首相は、台湾政権を相手とすることをアメリカに通告し、1952.4.28に二国間平和条約が結ばれた。(1952.8.5. 発効)

1971.10.26. 国連第26回総会において、中華人民共和国の招請、中華民国の追放案が賛成76、反対35、棄権17で可決され、中華民国は国連の議席を失った。

1971.11.15. 各国代表の熱烈な歓迎をうけて、中国代表団（団長　喬冠華）が総会に出席した。喬代表は、大国と小国の平等を主張し、一、二の超大国が世界政治を操縦することに反対し、アメリカの武装力が台湾からただちに撤退すべきことを要求した。

国連は、1945.6.26. 戦勝国51国によって創立され、中国は米英仏露と共に常任理事国として特権的地位を保有していた。

1949.11.30. 重慶が共産軍の手に落ち、蔣介石は台湾に亡命し、49年12月10日総統に復職した。

1949.10.1. 天安門広場で中華人民共和国成立の式典が行われ、世界各国に通告された。

因みに日本が国連に加入したのは、1956.12.18. であった。

日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明

一九百七十二年九月二十九日に北京で

日本国内閣総理大臣　田中角栄（署名）

中華人民共和国国務院総理　周恩来（署名）

（要旨）

日中両国は、一衣帯水の隣国であり、長い伝統的友好の歴史を有する。戦争状態の終結と日中国交の正常化という両国民の願望の実現は、両国の歴史に新たな一頁を開くこととなろう。日本側は戦争を通じて中国国民に重大なる損害を与えたことに責任を痛感し、深く反省する。

一　両国の間の不正常の状態は、この共同声明の発せられる日に終了する。

二　日本国政府は、中華人民共和国政府が中国の唯一の合法政府であることを承認する。

三　日本国政府は、台湾が共和国の領土の不可分の一部であることを十分理解し尊重する。

四　両国政府は千九百七十二年九月二九日から外交関係を樹立し、できるだけ速やかに大使を交換する。

五　中国政府は日本国に対する戦争賠償の請求を放棄する。

六　すべての紛争は平和的手段により解決し、武力又武力による威嚇に訴えないことを確認する。

七　アジア・太平洋地域の覇権確立に反対する。

八　平和友好条約の締結交渉を行うこと、関係発展のため貿易その他の協定を行うことに合意した。

日本国と中華人民共和国との間の平和友好条約

一九百七十八年八月十二日　北京

日本国外務大臣　園田直

中華人民共和国外交部長　黄華

（要旨）

内容は日中共同声明を踏襲している。

主権・領土の相互尊重、相互不可侵、相互内政不干渉が記されているのが特徴。中国側は賠償金請求を放棄する代わりに、日本側からＯＤＡ（政府開発援助）等の巨額の経済援助を引き出した。

対中国ＯＤＡは、一九七九年に開始され、その累計額は十兆円に垂んとし、中国の改革、開放政策の維持・促進に、更に経済発展に大きく貢献し、日中関係の主要な柱の一つとしての役割を果たして、二〇〇八年の日中首脳会談に胡錦濤首席が心からの感謝を表明するまでに至った。

今や世界における中国の政府的・経済的地位は一変して、これからの日中関係に強い懸念を抱かざるを得ない現状に、日本は普通の国際的法治国家・中国に期待し、より友好的両国関係を築くべきＯＤＡであろう。

三、ロシアの太平洋進出

「ウラディボストーク（東方支配）はスラブの夢」

ロシア・太平洋進出表

1581	コザック首長イェルマックのシベリア進出 （1638）オホーツク市建設 （1707）カムチャツカ領有	
1689〜1882	清国とネルチンスク条約、（1858）アイグン条約 キャフタ、タルバガタイ、イリ、カシュガル条約	
1800	前半	カフカズ　３国征服
	後半	中央アジア５国征服
1855	日露和親条約※	
1860	沿海州取得（北京条約）	
61	ロシア軍艦ポサドニック、対島不法占拠事件	
94	日清戦争、（95）三国干渉※	
1904	シベリア鉄道完成（東新鉄道経由）、（16）完全開通	
	日露戦争※	
18	日米英仏、シベリア出兵。（20）尼港事件	
24	モンゴル人民共和国独立	
32	満洲国建国※	
41	（４月13日）　日ソ中立条約	
45	（２月11日）　ヤルタ会談 （８月８日）　ソヴィエト、対日宣戦布告 （８月10日）　モンゴル人民共和国、対日宣戦布告 （８月15日）　日本、米英ソ３国に対して降伏	
56	（10月19日）日ソ共同宣言（国交正常化）	

※印は「日本の太平洋進出」参照

1. ロシアのシベリア征服　「東方を支配せよ」

(1) コザック

イェルマック（T.Ermak. ?～1584）十六世紀、ドン・コザックのアタマン（頭領）の一人。ドン・ヴォルガ川河畔に住み、商人の舟を襲っていたが、一五八一年シベリア進出に乗出し、翌年シビル・カン国のクチュム・カンを破る。八三年秋イヴァン四世の後援により本格的にシベリア遠征を企てたが、クチュム軍の奇襲にあい、イルティシュ川で鎧の重みで溺れ死んだ。彼はシベリア征服の先駆者として、文学、歴史、口碑などに英雄の名を残して愛されている。

クチュム・カンはロシアとシベリアの支配権を争って、イェルマックに敗れ、八八年オビ川でロシア軍と戦って滅亡する。首都シビルはシベリアの名の由来するところ。

一五八七年建設のトボリスクは、ドストイェフスキーが獄中で「死の家の記録」を書いた砦。イルティシュ川下流右岸に位置し、郊外にシビル王国の古都、シビル遺跡がある。

コザックはトルコ語で「自由な人」、権力者・富裕者にさからい乱を求める逃亡者、貧農・農奴の集まりと呼ばれるが、ロシアの国境防衛、シベリア開拓の先陣であった。コザック隊は帝政時代の軽騎兵、ナポレオン戦争、日露戦争などに、近くは第二次大戦にも花々しい活躍をした。

コザックの本領は、疾きこと風のごとく、人馬一体、一瀉千里にシベリアを走り抜けて太平洋、アラスカに飛びこんで来た。

コザックの進路（数字は都市建設年）

トムスク（1604）　イェニセイスク（監獄、1618）　クラスノヤルスク（1628）　ヤクーツク（毛皮交易中心地　1632）　オホーツク（最古の定住地　1649）　ハバロフスク（探検家名　1650）

ニコラエフスク（尼港事件）　ヤクサ（アルバジン　1651）　イルクーツク（越冬地　1652）　バイカル湖（〝魚の豊かな湖〟　1463発見）　ネルチンスク（1654）　ペトロパブロフスク・カムチャツキー（ベーリング第二次探検によって建設　1740）　デジニョフ岬（ロシア航海者の名、ユーラシア大陸最東端（66°5'N, 169°40'W）1648）

何と！　トムスクからオホーツクまで5,000km,　50年!!　夜を日についだ進撃である。

因みに、アメリカはメーフラワー号上陸（1620）からシアトル（1852）まで230年!!

すでにアラスカでは1784年にはロシア人シェレホフが皇帝から毛皮独占許可を得て大儲けしていた。シトカが建設されたのは1799年。

ステンカ・ラージン（Stenka Razin. ?～1671）

ロシア史上空前の大規模農民反乱の指導者。ラージンはコザック、バシュキール少数民族などを糾合して、「全ロシアを役人と地主から解放する」と呼号して、ヴォルガ沿いに北上する。

農民軍は、役人、貴族、修道院、商人邸などを略奪、破壊、殺害をほしいまま。

反乱の拡大に驚いた政府は大軍を送って討伐し、ラージンもウリヤノフスク郊外で大敗し、コザック首脳部によって政府に引き渡されモスクワで処刑された。ロシア農奴制は益々強化されていく。

ラージンが悠久の流れヴォルガを夕日を浴びて遡る姿は一幅の絵。舟引歌はロシア民謡の名曲。

プガチョフの反乱（E. I. Pugachyov. 1773～75）

農奴王・貴族地主の権力、有産のコザックと無産コザック（ゴルイチバ）の階級対立など、天下は乱れ、反乱軍は兵三万、砲八六門を擁してヤイク川沿いのオレンブルク要塞を攻撃した。折からトルコと和を結んで強化された政府軍に破れ、同志に裏切られたプガチョフはモスクワへ送られ四つ裂きの刑に処せられた。プーシキンの《プガチョフ史》（未完）は有名。

セミョーノフ（G.M.Semyonov. 1890～1946）

極東共和国大統領の夢をいだいたセミョーノフは、モンゴル系の母をもったザ・バイカルのコザックの騎兵隊長であった。

彼は西部シベリアのコルチャック白衛軍に呼応して、ザ・バイカル中心に極東共和国（1920～22）を立てた。首都はウラン・ウデ、のちにチタ。盛時にはサハリンまで支配した。

第一次大戦が終わり、一九二〇年一月 米英仏のシベリア撤兵、二二年日本軍の撤退により反革命活動も終止し、その後極東共和国はモンゴル人民党に協力しウランバートルへの進軍を最後にソヴィエト・ロシアに合併された。セミョーノフは日本に亡命し、満洲に帰り、白系ロシア人部隊を組織し再起を期したが、四五年ソヴィエト軍に捕えられ、モスクワ裁判で処刑された。

リザー・シャー（Riza Shah. 1877～1944）

カジャール朝末期のペルシアは、国土は英露に二分され、王室はコザックに守られていた。リザー・カンはマーザンダラーン（古名タバリスタン）山中の貧家に生まれ、二五歳にしてコザック兵団に入り、その容貌風格智格は同僚朋友を威圧していた。

一九二一年二月二二日の夜半、リザーはコザックの精鋭隊を率いて、テヘランを占領し、親英内閣を倒し、亡国の英波協定（1919）を破棄させ、ペルシア軍総司令官、陸相、首相を歴任、一九二五年国民議会によって皇帝に推された。

独裁者として古いペルシアを全て廃棄改革した。

女は覆面（チャドル）をはがして学校（マダルセ）へ行かされ、男は兵役に引張られコザックと代わって国を守り、国もイランと改名（1935）、王朝もパフレヴィに、王もアフマッドからリザー・シャーに代わった。ただ彼の力の及ばなかったのは英ソ両国の帝国主義侵略であった。

第二次大戦が始まった。シャーは厳正中立を宣言した。（1939. 9月）、独ソ開戦と同時に更に中立を確認した。ところが、イラン在留のドイツ人追放の要求に応じなかったため、南北から英ソ両軍が越境侵略してきた。その責任を負わされたシャーは退位（1941. 9月）、モーリシアス島に流され、ヨハネスブルグで波瀾の生涯をとじた。

コザック史のラスト・エンペラーは、国際法も正義も踏みにじられ、国を失った。

(2) 清国との国境条約

ネルチンスク条約（尼布楚）（1689）Nerchinsk

ロシアの探検家・毛皮商ハバロフは、アムール川を南下して黒竜江岸ヤクサにアルバジン城塞を築き、更に下航してアチャンスクに、後にハバロフスクとなる堡塁を築いた（1650）。清国全盛期の名君・康熙帝の軍はロシアの要塞を一掃し、黒龍江のはるか北に国境を定めて、ネルチン

スク条約となった。

①両国の国境は外興安嶺と黒竜江支流のケルビチ河の線とする。

②ロシア人はアルバジンより退りぞき、かつ黒竜江の航行を禁止するなど7ヵ条

この条約は支那がヨーロッパ諸国と結んだ最初の条約であり、ヤクサの城塞は破壊された。

（註）黒竜江支流ケルビチ河は、はるか北のスタノボイ山脈ケルベッチ山（Kherbet）から南流する支流の一本か？

アイグン条約（愛琿）（1858）Aigun

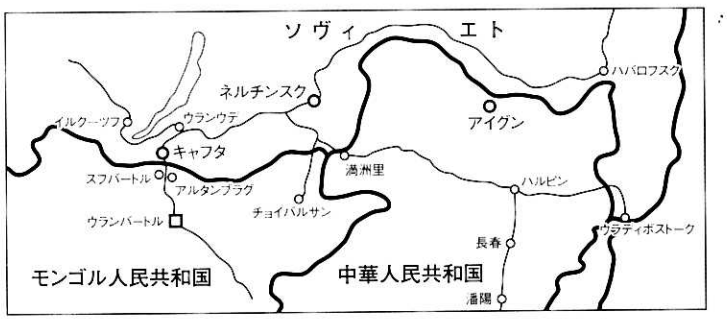
ネルチンスク条約によって興安嶺のはるか北に追われたロシアは、イギリスの北上に対抗して、軍人政治家ムラヴィヨフを東部シベリア総督に任命し（1847）、折から太平天国の乱に苦しんでいる清国に乗じて、満洲大臣奕山（イシャン）を黒竜江の軍艦から大砲を打放して脅かし、黒竜江の北六〇万㎢を強奪した。条約の内容は、

①アルグン川と黒竜江を両国と国境とする。

②ウスリー川から海までの地を両国の共有地とする。

③黒竜江、松花江、ウスリー川の航行権は両国だけがもつ。

ムラヴィヨフは功によって〝アムールスキー〟称号を与えられた。



アイグン・ネルチンスク・キャフタ条約

沿海州取得（Primorski, 1860, 北京条約）

沿海州は東に日本海、西にウスリー・黒竜江に囲まれた四十万㎢の山地で、古くはツングース系の狩猟を主とした女真族の住地で、明代に満洲の都司がおかれ地方鎮撫を司っていた。

愛琿条約でこの地は支那、ロシアの共有地となったが、アロー号事件、天津条約、北京条約と因縁続きの末、ロシア公使イグナティエフの調停の労として北京条約によってロシアに割譲された。

（註）イグナティエフ（1832～1908）帝政ロシアの政治家、ムラヴィヨフの外交顧問。第一次革命後反動貴族の指導者となり、社会革命党員に暗殺された。

キャフタ条約（恰克図）（1727, 1768）Kyakhta

バイカル湖南のキャフタにおいて、清国は貿易の統制を、ロシアは貿易の拡大を希望して両国間に結ばれた条約。

①アバガイトウからシャビンダバガに至る国境の確定。

②蒙古国境上にキャフタ、満洲国境上にツルハイトウの交易場を開設。

③北京にロシア教会設立、牧師と留学生の滞京許可、その他が規定された。

（註）キャフタに対するモンゴルの国境ブラ（後にアルタン・ブラク〝黄金の泉〟）境界議定書も調印された。ブラ交易場は毛皮その他の貿易で繁栄した。

タルバガタイ条約（搭城）（1864）Tarbagatai

キャフタ条約のシャビンダバガを起点としてボゴスクを経てザイサン・ノール、イシク・クー

ル南方の天山山脈、コーカンド・カン国境に至る国境を画定した条約。

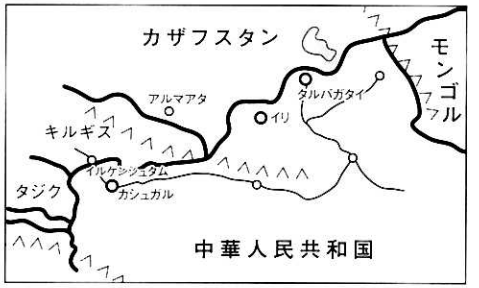
イリ条約（伊犂）（1881）（サンクト・ペテルブルグ条約）Iri

一八六四年ごろ新疆地方に起ったイスラム教徒ヤクブ・ベクの大反乱に対して、ロシアは71年イリを占領した。清国は左宗棠を派して77年鎮圧に成功し、イリの返還を要求したが、大譲歩を強いられ（リヴァディア条約）、清朝は条約の批准を拒否し、両国の関係は悪化した。清朝は英仏の勧告を入れて、サンクト・ペテルブルグに条約を締結した。80年反乱前にかえすことはできなかったうえ、清朝側の譲歩によってロシアの新疆に対する勢力は大きく拡大されることとなった。

カシュガル条約（喀什）（1882, 1884）Kashgar

第一（北東条約）はナリンゴルからペデル山まで。第二（北西条約）は、ペデル山からスーヨク山、イルケシュタムを経てウズベリク山までの国境を定めた。

カシュガルは、天山山脈を越える北方路とパミールを越える西方ペルシア・インドに通ずる東西路上重要な位置を占めて、イスラム勢力の中心的拠点となり、市街は漢城と回城とに分かれ露清北京条約（1860）により開市場となりロシア商人、インド、アフガニスタン人など雑居して史跡に富み俗に〈小北京〉の名がある。



タルバガタイ条約・イリ条約・カシュガル条約

(3) ロシア艦、対馬不法占拠事件

一八六一年四月、ロシア艦ポサドニックが対馬芋崎浦に不法上陸し、国旗を立て兵舎を作って駐兵。島民と衝突し、藩主に土地租借を要求した。幕府外国奉行の撤退交渉に応ぜず、不法占拠を続けた。

イギリス公使オルコックはイギリス自ら対馬を占領すべきと本国に建策し、東印度艦隊司令長官ホープは軍艦二隻を率いて対馬に急行し、退去を要求し、九月ポサドニックは退去した。極東におけるイギリスとロシアの抗争事件として注目された。

(4) シベリア鉄道開通

一八五一　ペテルブルグ＝モスクワ線開通
一八九一　西はチェリャビンスク、東はウラディボストーク（〝東方支配〟の意）から同時着工
一九〇四　東清鉄道ハルピン経由開通
一九〇八　ハバロフスク回り着工
一九一六　モスクワ＝ウラディボストーク全線完成。　九、三三三km
ピョートル大帝の極東支配の夢は一〇〇年にして実現した。

(5) 日米英仏のシベリア出兵

一九一七年三月、革命によって滅亡したロマノフ朝に代ったソヴィエト政権は、ドイツと単独講和を結んで、連合国の戦線から脱落した。

米国、英国、仏国はシベリアの反革命勢力を支援して革命の波及を阻止し、東部戦線を立て直し、日本はこの機に北満洲、蒙古における勢力拡大を期して反革命軍を支援した。

四ヵ国は、十八年七月、総兵力二万四、八〇〇人、うち日本軍一万二千人を極東ロシアに送ることを協定した。日本は八月二日、アメリカの提議に応じて、シベリアで「ドイツ軍と戦っているチェコ軍救援のため」ザ・バイカル方面に二個師団を送り、三ヵ月後には七万三千の兵力が東部シベリアの全要地を占領していた。

しかし、一九年秋には反革命のコルチャック政権は赤軍に決定的に破れ、支援の目的も失敗し、アメリカ初め三国は撤兵した（二〇年六月）。

日本軍は厳寒の冬とパルチザンに苦みながら、二十年五月、ニコラエフスクで発生した尼港事件報復と補償のため北樺太を占領したが、二二年六月撤兵せざるをえなく十月完了した。戦費約十億円、死者三、〇〇〇人、凍傷者全軍の1/3の惨敗であった。

（註）尼港事件

一九二〇年二月、パルチザンに攻められた守備隊は協定を破って奇襲して惨敗、五月残兵と居留民一二二名が皆殺しされた事件。

(6) モンゴル人民共和国独立

清朝は、民政大臣粛親王(1)を責任者に、起死回生をかけて辺境新政策立て直しにかかった。その昔、ユーラシア大陸をふるえあがらせた蒙古民族に対して、王候軍閥による間接統治に代る強力な漢人、満洲人官僚支配による直接統治は、蒙古人の不安、反清感情の旋風をまきおこした。

一九一一年七月、僧侶、指導者は庫倫（フレー）（現・ウランバートル〝赤い英雄〟）での法会のさい、秘密会議を開き、十二月一日ロシアの援助のもとに独立を宣言した。元首にはラマ教の転生活仏フトクト(2)が選ばれ大蒙古国皇帝の位についた。外蒙古である。

一九一三年十一月の露中・共同声明は、ロシアは外蒙古に対する中国の宗主権を認め、中国は外蒙の自治権を認めた。

一九一七年ロシア革命は、日本軍のシベリア出兵（一八年）、コザックの頭目セミョーノフの内外汎蒙古国建設会議（一九年二月、チタにて）、「気ちがい男」ウンゲル白衛軍の暴虐（二〇年）、極東共和国（二〇年五月）、モンゴル人民革命党結成（二〇年六月）と、激しく事態は展開する。

一九二一年二月、革命の父スヘバートル(3)とモンゴルのスターリンと呼ばれるチョイバルサン(4)が義勇軍を募集して、キャフタに君主立憲制の革命臨時政府を樹立した（三月）。革命軍はパルチザンを組織しソヴィエト赤軍の援助によって中国軍を南に、ウンゲル軍を北に追っ払って、赤軍と極東共和国軍一万がフレーに入城し独立を宣言した（七月）。しかし、モンゴル人民共和国が誕生したのは、民衆の信仰の厚い活仏ジェプツンダンバ・フトクトの没したあと一九二四年十一月であった。

(7) 日ソ中立条約（モスクワにて、松岡洋右外相）

日時　一九四一年四月十三日

①両国の平和・友好関係の維持と領土の保全・不可侵、

②締約国の一方が第三国の軍事行動の対象となった場合、

朝日夕陽を馬上にうけて
つづく砂漠の一ずじ道を
大和男の子の血潮をひめて
行くや万里の蒙古の砂漠

他方は中立を守ること、
③有効期間は五年とする。
また同時に共同声明が出され、日本はモンゴル人民共和国の、ソヴィエトは満州国の領土の保全・不可侵を約した。

(8) ヤルタ会談

日　時　一九四五年二月四日～十一日
会談者　ローズヴェルト　チャーチル　スターリン
ソヴィエトの対日参戦に関する秘密協定（二月十一日署名）
①モンゴル人民共和国の現状を維持する。
②南サハリン（樺太）及び千島列島をソヴィエトに渡す。
③大連商港におけるソヴィエトの優先的利益を擁護し、旅順港はソヴィエトの海軍基地としてソヴィエトの租借権を回復する。
④在満鉄道はソヴィエトと中国の合併会社を設立して共同経営する。
⑤ただし、中国は満洲に対して完全な主権を保持する。

（註）ヤルタはクリミア半島南端の港湾都市、代表的な保養地、〝休息の家〟が多い。会談は黒海を望むリヴァディア宮殿一階の会議室で行われた。

(9) 終　戦

一九四五年八月八日、ソ連は日ソ中立条約を無視して対日宣戦布告をした。国際間では約束は破るため。守ると思うのは大バカ、は常識です。一週間戦争である。
日本は三国同盟の独伊を失ない孤軍奮闘、米英ソなど二十六ヵ国の連合国を相手に戦う運命におちた。
モンゴル人民共和国は、十日に日本に宣戦布告した。五日戦争である。日本軍、約一万二千人がモンゴルに連行され異国の原野に強制労働に服し、全員引きあげたのは一九四七年十月、二年間で約一千六百人が死亡した。

（註）1　**愛新覚羅（ギョロ）・粛新王善耆（ゼンキ）**（1866～1922）清王朝筆頭の名家。
義和団事件前後のロシア勢力の制圧に土地賊力を失い、日本援助に協力、袁世凱の後援により民政大臣となる。清朝再建に奔走し、清朝滅亡後はその再興を夢見て川島浪速と義兄弟の交を結び、娘を川島の養女とした。
川島芳子は親王の第四側室の長女で、「愛親覚羅顕琦（ケンキ）」といった。「東洋のジャンヌ・ダルク」とも「マタハリ」とも騒がれた「男装の麗人」芳子は、漢奸として銃殺刑の前に、貴婦人のようにまゆ一つ動かさず従客として死についたといわれている。
2　**フトクト**
十七世紀後半から一九二四年までウランバートルにいた転生活仏（ジェプツダンパ・フクトク）の称号。初代はダライ・ラマによって転生を宣言され、第二代はハルハの独立運動をおさえ、清朝に対する蒙古人の忠誠を確認させ、清朝内に重きをなした。第八代は外蒙古の革命独立政府の皇帝に即いたが、ラマ教絶滅政策によって昔日のおもかげを失った。24年55歳で没したが、

転生者は出ず、蒙古のラマ教は絶滅しようとしている。

3　**スヘバートル**（1894～1923）革命の父

チョイバルサンと秘密結社・人民革命党を組織指導し、パルチザン闘争によって反革命白衛軍を破り、二一年三月革命臨時政権を樹立したが暗殺されて、ウランバートル＝シベリア鉄道の国境スヘバートル駅に名を残している。

4　**チョイバルサン**（1895～1952）

彼の名をとった現在の蒙古東部のチョイバルサンの貧農に生れ、ラマ寺、クーロン、イルクーツクの学校を経て、スヘバートルと共に革命党をつくり、24年革命軍総司令官、36年内務大臣、38年総理大臣となり、モンゴル共和国のスターリンとして独裁権力を振った。第二次大戦には、その功により、「ソ同盟の元帥」の称号をうけた。モスクワで病没した。

『**太平洋戦争　終戦の詔書**』（前付Ⅲ頁に謹写）

2.　ロシアの中央アジア五ヵ国征服　「カスピ海を支配せよ」

(1)　カザフスタン共和国（面積 272.5 万km²）

首都**アルマ・アタ**（リンゴの木の山）一八五四年建設。ソ連で最も美しい都市の一つ。

中央アジアの遊牧民から農耕化したトルコ民族・イスラムの国。一九二〇年カザフ自治共和国、九一年十二月独立。

十七世紀後半からジュンガル王国(1)の勢力下に、つゞいて十八世紀半ばジュンガル王国を滅ぼした清国の名目的支配に属した。十八世紀のはじめから進出していたロシアは、カザフスタンの植民地化、直接支配に転じて、清国との宗主権争いはイリ条約までもちこされた。

アラル海は第三紀に黒海、カスピ海と連なっていたサルマート海の一部で、残存生物の珍奇な固有種が多い。

カザフはウズベク語〝冒険者・放浪者〟、コザックと同語源。〝スタン〟はペルシア語の国・地方。

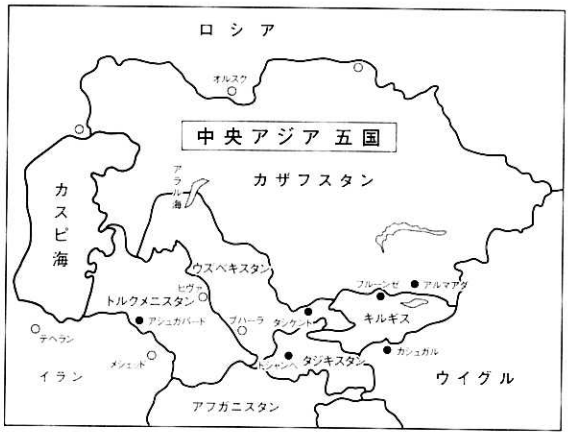
(2)　ウズベキスタン共和国（44.7 万km²）首都**タシケント**

（石の町）。アム川、シル川上流に住むトルコ民族。一九二五年ウズベク共和国。一九九一年八月独立。

16世紀初頭に南下してヒヴァ(2)・ブハラ(3)両ハン国、更に別のウズベク族はフェルガナ地方にコーカンド汗国(4)を建てた。ウズベク三汗国(5)である。

七世紀以来トルコ北方系遊牧民、唐、八世紀イスラム系ペルシア王朝、蒙古系ティムール領に入る。ロシアは一八六八年ブハラ汗国、七三年ヒヴァ汗国を保護国とし、一八七五年ロシアのカウフマン将軍によるコーカンド汗国占領、併合。

ブハラはサンスクリット語で〝寺院〟。14～15世紀中央アジアの宗教・文化の中心地、ロシア革命までイスラムの聖地。寺院・学院・城郭など記念建物が多く保存されている。



(3) **キルギス共和国**（20.0万km²）首都**フルンゼ**（共産党活動家名）

キルギス人は、エニセイ河上流ヒケム川盆地の森林地帯に定住した、耕地では栽培農業、山地では牧畜が盛んなトルコ系民族。匈奴(6)・突厥(7)・蒙古・清朝の支配をうけ、一九世紀中央アジアへ進出したロシアの植民支配下、一九二六年自治共和国、36年12月ソヴィエト社会主義共和国の一国。一九九一年八月独立。蒙古語キルは〝草原〟、〝ギス〟は遊牧する民。

フルンゼは（旧称ビシュケク）一八二五年コーカンド汗王国の要塞として建設され、ソグド人の集団部落跡が発見された。市街は緑化され、天山山脈の雪山は美しい。

(4) **タジキスタン共和国**（14.3万km²）首都**ドゥシャンベ**。国土の大部分はパミール高原(8)

タジク人はバクトリア人(9)、ソグド人(10)の血をひくイラン語族。ゾロアスター教(11)は、最初にこの地方で教理宣伝に成功した。

前四世紀アレクサンドロス大王に征服され、中国とトルコの交易路になって蒙古、トルコに屈服し、一八六〇年代からロシアの侵入が始まり、ブハラ汗国が滅亡（一八六六）、アフガニスタンのイギリスと勢力協定（一八九五）によりロシアの植民地となり、24年タジク自治共和国、九一年九月独立。ドゥシャンベは革命後にできた新興都市。

(5) **トルクメニスタン**（48.8万km²）首都**アシュハバード**（〝美しい町〟）一八八一年建設。

住民は古代オグズ族(12)の末裔で、16世紀以後ヒヴァ、ブハラ両汗国とたえざる戦争によって抑圧、分割されたが、十八世紀より帝政ロシアの侵入（1881～85）、属領となり、遊牧民大衆は部族長やイスラム教僧侶階級、ロシアの官吏・商人に圧迫搾取されていた。

革命後トルクメン共和国成立。一九九一年十月独立

中央アジアの国々はいずれも国民の大半がトルコ族であり、イスラム教を信じ、それぞれ汗国を建てて興亡をくりかえしてきたが、クリミア戦争の戦後処理を終わった帝政ロシアの中央アジアの支配、保護国化、植民地化の前に屈し、続いてソヴィエト社会主義共和国に組み込まれ搾取され、独立するのは二十世紀末であった。

（註）

1. **ジュンガル王国**　十七世紀初めから十八世紀中ごろにかけて北はアルタイ、南は天山山脈に挟まれたジュンガル盆地に栄えた西北蒙古族・オイラト族の王国。中心都市ウルムチは隊商貿易の中心地。
2. **ヒヴァ汗国**　一五一五年建国。十八世紀中央アジア全域を支配した。一八七三年ロシアの保護国。一九二〇年ホラズム共和国。
3. **ブハラ汗国**　一五〇六年トランス・オクシアナを征服して建国。歴代君主の保護の下にイスラム教の東方中心地。一八六八年サマルカンドをロシアに奪われて保護国となる。
4. **コーカンド汗国**　一七〇九年ウズベスク首長シャー・ルフがフェルガナ地域に建て新彊貿易を独占して全盛した国。一八七六年ロシア軍に征服された。
5. **ウズベク汗国**　アラル海を抱いてアムダリア川沿いの国。一三一二年貴族指導者ウズベクが建国。西欧文化と南のイスラム文化、東方元朝文化の交流地。

カカン（可汗）、カン、ハン（汗）は、北アジアに於けるトルコ系、蒙古系遊牧国家の君主の称号。

6. **匈奴**（キョウド）（フン族）　紀元前三世紀末から約五世紀にわたって蒙古に栄えた遊牧騎馬民族。四五二年、カスピ海の岸からライン河平野までを平定し、ローマに迫って「悪魔の権化」と恐れられたアッティラは、匈奴の偉大なる王であった。彼は、「神の笞なり、神に代って末世の人間を膺懲する」と、ローマ遠征の雄心壮図を抱いて、四五三年、美姫イルディゴを得て盛んなる婚宴を張り其夜閨中に頓死した。（大川全集Ⅱ. 851頁）

7. **突厥**（トッケツ）　トルコ帽の民族。六世紀半ばから蒙古、中央アジアを支配したトルコ（チュルク）族の遊牧国家。突厥碑文は北アジア遊牧民が残した貴重な歴史学、言語学の資料。

8. **パミール高原**　印度語ウパ・メール（山の麓の国）。アフガニスタン語（太陽神の下の国）。平均標高3,500～4,500m

9. **バクトリア**　ヒンドゥクシュ山脈とアム河地方の古名。後に印度北部のガンダーラ美術に発展したクシャン朝もバクトリア五候の一候であった。

10. **ソグド**　サマルカンドを中心とする地方の古名、トランス・オクシアナ（河間地方）とも言った。ウイグル・蒙古・満洲文字はソグド文字にもとずいている。

11. **ゾロアスター教**　拝火教、中国では祆（ケン）教。教祖ゾロアスターはアゼルバイジャンのシーズに生まれ（BC660～583）光明の神・善神アフラ・マズダを唯一最高神とする一神教。死者は語らず、沈黙塔に不死鳥がむかえて魂を抜き、パミールこえて青い空、無辺界に運んでくれる。現在インド・ボンベイ在住のパールシー族は総数十万余、電気、製鉄業を独占する富裕層をなしている。

12. **オグズ族**。カザフスタンの草原に住み、シル川をこえて南下し、セルジューク・トルコ、オスマン・トルコは代表的集団である。始祖はオグズ汗国。オグズ＝ナーメは自然崇拝を説く伝承文学。

3. ロシアのカフカズ三ヵ国征服　「黒海を支配せよ」

(1) リューリク朝（862～1598）

大昔、ドニエプル川の支流に東スラブ一族の「ルーシ」という国がありました。

七世紀の頃、北方ノルマンの伝説的英雄リューリク三兄弟は、海を渡り大きな川（オーデル川）を遡り、カルパチアの渓谷を「モラビアの門」（Moravska Brana）、「琥珀の道」を通って、ルーシの国に迎えられました。人々は、畑を耕し、森に寝て、毛皮や蜜ロウを集めたり、奴隷（スラブ）をビザンチンやローマと取引して暮らしていました。

三兄弟は、ノヴゴロド公国、キエフ公国を建て、モスクワ大公国を受け継いで、リューリク朝をおこしました。国は栄えました。

やがて、ロシア帝国（1533～1613）、ロマノフ朝（1613～1917）と続く長い歴史に於て、拡大と海を求めて侵略の道を歩み続けました。二十世紀の革命によって王朝は滅びましたが、「極東進出の意志は、ロシア民族の血の中に流れているものであって、いまも消えてはいない」ものです。

(2) バルト海進出　ポルタヴァの戦（1709）

ピョートル一世はバルト海を制圧し、首都ペテルブルグ市を建設し（1703）、「ヨーロッパへの窓」として遷都した（1712）。彼は国政全般にわたって改革を断行し、後世「大帝」と呼ばれた。

ロシア軍に首都を脅かされたスウェーデンは、**ニスタット**に和約し、ロシアはバルト海に進出し、一躍ヨーロッパの強国となった。

バルチック艦隊　ロジェストヴェンスキー司令官（捕虜となる）率いる38隻の大艦隊は、

一九〇四年十一月リバウ港（現ラトビア国リエパヤ港）を出港、220日を要して対島に達し、〇五年五月二八日東郷艦隊と海戦、28隻を失ない壊滅した。日本艦隊は水雷艇3隻を失ったのみの大勝利である。

(3) 地中海進出　アゾフ海戦争（1695～1739）

黒海への出口アゾフ海は、ドン・コザックにより一時占領されたが（1637）、その後ピョートル一世はドン河口のトルコ要塞アゾフを攻めて失敗、全国の船大工を集め艦隊を急造して奪取した（1696）。更にトルコの奪回（1710）、最終的に露土前哨戦（1736～1739）はロシアがアゾフを確保するに至った。

（註）**黒海**　ギリシア時代はポントス・エウクセイノス（異国人に友好的な海）、トラヤヌス帝時代はローマの内海、キエフ・ルス時代はルスコ・モレ（ルスの海）、チェルノエ・モレ（ロシアの海）、トルコ時代はカラ・デグニズ（暴風や霧の多い海）ノワル・メル（黒海）

(4) クリミア戦争（第五次露土戦争）（1853～56）

セヴァストーポリ要塞の攻防戦は三四五日、両軍合わせて兵力三十万、寒気、暑気、コレラ、弾薬食糧の欠乏、英仏軍だけで戦死者十三万を数えて、最後はロシア軍の要塞自爆によって撤退して終結した。

この戦争には、タイムズ紙のラッセル記者が最初の戦時特派員として従軍し、フロレンス・ナイティンゲール女史は敵味方をこえた野戦病院をユスキュダールに開設し、トルストイは名作従軍記「セヴァストーポリ物語」を残している。

(5) 第一次世界大戦（1914.07～1918.11）

東部戦線

一四年十月下旬、ドイツ・トルコ艦隊は黒海沿岸のロシア基地を砲撃して交戦状態に入り、十一月ロシア、イギリス、フランスもトルコに宣戦した。

東部戦線は、ロシアのカフカズ戦線、イギリスからはスエズ戦線、フランスからはメソポタミア戦線が形成され、十五年二月、機先を制してトルコを孤立させ、インド・ラインを固めるチャーチルの要望によって開戦したが、ガリポリに敗れ、緒戦を飾ることはできなかった。

西部戦線　異常なし

レ・ミゼラブル「ああ無情」

"Im westen nichts Neues"

「人は死ぬために　こんな　みじめさ
　こんな苦しみを　受けなければならないのか」

休戦・講和

双方の動員数　六、五〇〇万人
死　　者　　八五〇万人
直接戦費　一、八七〇億ドル　（世界大百科事典　平凡社　一九七二年版）

酷暑、酷寒、泥濘、飢餓、疫病、生死非情の戦場は、アメリカの参戦（1917.04.06）とロシア革命（1917.10.25）によって、各国は戦争目的、国内・国際情勢の新しい変化にさらされた。

革命後のロシアは、平和原則として、無併合、無償金、民族自決、反帝国主義をかかげ、秘密協定を公表し、連合国の侵略意図を暴露して講和会議を紛糾させた。

アメリカのウィルソン大統領は、秘密外交の廃止・海洋の自由・関税障害の撤廃・民族自決・国際組織の確立など十四カ条の平和原則を発表した。

(6) カフカズ三ヵ国（kavkaz. 英語でコーカサス　山脈の南をザカフカズという）

北カフカズはウラルを越えて東西の交通路。ヨーロッパに「悪魔の権化」と名を残すアッティラ、世界を変えた破壊のチンギス・カン（成吉思汗）、小アジアに新興オスマン帝国を破った（1402）チンバのティムール（帖木児）など、梟雄英傑の大遠征の通過地帯となったため、一定の文化、歴史をたどることは難しい。

南カフカズは、ノアの箱舟が雨の四十日たって着いたところ、オリーブの若葉が芽吹いていた。北の谷エデンの園には、ノアの子ヤペテの子孫ミンニの民が住んでいた。古代のカフカズは自らの土地を「ヤペテの土地」と呼び、紀元前九世紀頃には最古の**ウラルトゥ王国**が生まれた。

しかし、常に周辺大国の侵入に荒され独立は困難で、ギリシア、ローマ、ペルシア、アラブ、蒙古、トルコの帰属保護をうけ、小国の乱立状態に永く置かれた。

ゾロアスター教、キリスト教東方教会、イスラム教も、それぞれの福音を授け、またそのお陰で異教徒故に大虐殺にも耐えねばならなかった歴史も残っている。

十八世紀、ロシアの南下はカフカズに重大な変化をもたらした。

ロシアのカフカズ完全制圧が完了し、ペルシアとトルコは先祖の輝かしい遺産をすべて失った。

帝政ロシアの軍事的征服、植民地的圧迫に加えてバクーを中心とする資本主義石油産業に対する労働者弾圧、民族運動と民族間の対立等の混乱時代を迎えて、三国は十月革命によってソヴィエト政権を樹立し、独立したのは一九二〇年、続いて**ザカフカズ共和国連邦**を構成し、ソヴィエト連邦に加盟した（1922）。スターリンはグルジア中部ウラ川上流のゴリ市の生まれ。

アゼルバイジャン共和国（8.7 万km²）首都**バクー**（風の町）

名称は、アレクサンドロス大王が東方遠征にあたり、この地に残した部将アトロパテスから。

マルコ・ポーロはタブリーズから黒海の港トレビゾンドへ向かう途中、教皇にあてたクビライの親書を紛失してしまう。彼は船でコンスタンティノープルからベネチアに帰り、二六年にわたる旅行を終える。

バクーはアジアが終わりヨーロッパが始まる。旅人はキャラバン・サライの大トルコ風呂に旅の疲れをおとす。クイズカラスイ（乙女の望楼）に昔をしのび、丘に「カフカズのとりこ」の作者・プーシキンの記念像が立つ。一八〇六年ロシアに併合。

アルメニア共和国（2.9万km²）　首都**エレバン**（聖書エデンの園）

アルメニアは、ウラルトゥ国（BC9世紀）、エレバン国（BC782）、アレクサンドロス大王（BC4世紀）、アルメニア帝国（BC1世紀）、やがてローマ、ペルシアの保護国となっていく。首都エレバンは軍事、政治の中心となって栄えていた。中央広場にはレーニンが高い台から東を指して睨んでいる。ロシア・ペルシア戦争（1826~28）でロシアに併合。

アララトの峯は美しい。親子二峯が氷河に輝き、清流は高原をうるおして、小麦やぶどうがたわわに実っている。ユーフラテス川の源流ムラト川は、アララトの氷河を集めて、カスピ海に行こうか、黒海に行こうか、それとも地中海か、セバン湖、ワン湖、ウルミエ湖と回り回ってペルシアの海に帰っていく。

アルメニア・グレゴリー正教の本山**エチミアジン聖堂**は、円形・四葉形聖堂建築の代表である。

玄関入口のモザイクに聖者のお名前が彫り込んである。

「罰が当たるぞ、聖者を踏んづけて！」

「いや、いや、聖者の名前を踏んで、あなたの罪穢れは清められるのです。

どうぞ、お入り下さい」ありがたいお告げです。

ほのかな明かり、古えの香り、神のお声が静かに流れていた。

外は春、アルメニア・サクラが綻び、ベンチに老婆が憩い、修業僧が列を作って行く。この国ではキリストがレーニンの上である。

グルジア（6.9万km²）　首都**トビリシ**（温泉保養地）

グルジアは、古代から交通、貿易の要衝地。黒海沿岸リオニ川河口のコルヒダは、ギリシア神話の**アルゴナウタイ**（アルゴーの乗組員たち）が、〝金の羊毛〟を、魔女の助けによって東の国から取ってくる船出の港、神話時代からギリシアの植民地であった。

東に聳えるカズベク山は（5047m）八本のタコ足氷河をもつ有名な円錐火山である。

この国は、トルコとペルシアの争奪戦で、十五世紀初めのティムール侵入以来、交通路の変化と共に取り残されて封建小国に分裂した。一八〇一年にはロシア領に併合された。

あとがき

大川先生は、「せめて十年早くこの仕事（大川塾）を始めたかった」と、しば〳〵言っておられた。大川塾は先生終生の大事業である。

「十年早く」と言えば、一年二十名、十年では二百名の卒業生がアジア各地に赴任し、「正直と親切」の種を蒔き、〝復興アジア〟はスタートをしている筈であった。

実際は卒業即戦地、軍務であり、兵としては余人の及ばない高度の仕事を果たしたけれど、敗戦、復員によって、現地に友を作る機会もなく、生涯をかけた遠大なる復興アジアの夢は水泡に帰した。代って復興日本の大業に直面する。

敗戦

忘れもしない八月一八日、光機関バンコク本部。

私は参謀長閣下から十年潜行の命令を受けた。私は直立不動であった。（139頁「捲土重来」）

閣下は「うん、さすが大川塾だナ」と御機嫌であった。

取調べ

十一月二日、夕日の沈む頃、タイ国警察が三、四人来て、私はキャンプからそう遠くない特別抑留所に連行された。木造二階建て個室である。翌朝、朝食に集まった顔はみんな大川塾であった。

十一月十五日から取調べが始まった。

「ドクター・オオカワ　シテイマスカ？」

「イヽエ　ノー　ノー」

おとなしい英軍の将校と日本語を少しできる二世通訳である。来る日も〳〵「オオカワ」で、少しも前へ進まない。雑談は靴磨き、炊事当番である。

取調べの報告は定期的に東京へ送られ、その指示に従っていたようである。米軍は光機関と大川塾を自分達のＣＩＡやイギリス諜報機関と同等に過大評価していたようだから、光機関一等兵の〝バンコク・レポート〟が靴磨きでも、レポートはレポートで回され、スプーンとお皿だけが全財産の家宅捜査と大きな番号札を首にぶら下げた写真を撮っただけで終わってしまった。（141頁「バンブアトンの取調べ」）

一九四六年・六・十六、引揚船但馬丸はバンコク港を出帆、七月一日鹿児島港に着岸した。思えば一九四一・八・三〇、神戸港を出帆してから五年の月日が流れていた。

東京は焼野原。研究所も寮の跡にも夏草がそよいでいた。

先生から田舎に御手紙をいただいていた。

『復員後は本研究所に於て練磨せられし瑞光の輝きを発揮して、日本復興のために精進せられんことを衷心より冀求する次第に御座候』と。

卒業生・復員一等兵の手記

日本総失業の時代である。すきや橋に〝命売ります〟とプラカードを持った復員兵が立っていた。わが大君に召されたる歓呼に送られた兵が帰ればこのザマ、誰をか恨まん。

学歴ナシ、技能ナシ、コネ・ナシ、家も、金も、死にたくも、ナシ、では〝命売リマス〟と大した違いもない。

日本橋まで歩いて来ると、川の水は行ったり、来たり、淀んだり、迷っていた。
「そうだ！　通訳だ!!」　橋のたもとに小さな土建屋があった。
「こんにちは。通訳は要りませんか？」　社長らしい人が出てきて、
「これ読んでくれませんか？」　見れば米軍の仕様書と入札書であった。
その場で採用、沖縄ゆきが決まってしまった。
沖縄には仕事は降る雨のように、いくらでも有った。日本の請負業者は天手古舞だった。それは良かったが、見当違いには日本側も、米軍側はもっと困って腹を立てていた。請負人は、仕様書も契約書も支給材料の使い方も見たこともない。見ても読めない。
米軍現場監督も検査官もサジを投げて、やり直し、工期オーバー、罰金、すったもんだの毎日である。間もなく監督は私に目をつけて、毎朝ジープの助手席に私を乗せて現場回り、「OK！OK！」の毎日である。半年すぎ米軍事務所に机をもらって常駐しろと言う。
東京本社の資本金は十九万五千円也の会社だった。
社長から「業績拡大貢献賞」を貰った。添書があった。
『真実を言って損をしても良い。ウソを言って儲けるな。』
私は目が覚めた。この人こそ『正直と親切』の人だ。私の一生は決まった。
朝鮮戦争も終って日本復興の時代、労働争議の時代が長く続いて、アジアの時代に入った。
マニラに工場を建てた。日本企業の海外進出の嚆矢である。通産省から契約金一万ドルは低廉すぎる、ダンピングであると許可が出ない。
「フィリピンは戦争で苦しめた国です。只でも良いです」と説得した。
沖縄工場は、契約金を三等分して、一部を沖縄の身体障害者団体に寄付した。

台湾とバンコクには技術者を日本に呼んで無償で教育訓練して帰した。
中近東の時代に入った。アラビア通の友人と共同して、サウジ・アラビア航空の日本総代理店を取って、日比谷交叉点のビル一階一等地に事務所を開いた。全財産を投入した。
結局サウジ航空は成田闘争に足を取られて、東京まで飛んで来る事ができずに終ってしまった。お陰でサウジ本社へ何度も通って真正アラビア人と親交を持った。
私は大川塾ではペルシャ行だった。生涯の憧れ、砂漠の夢は『コーランの世界』に結晶して、平成十七年十一月自費出版し、全国の大学と図書館に納めさせてもらっている。
私は仏の国カンボジアに惹かれて、駐日大使館通訳にボランティア十八年流れました。（完）
人には夫々寿命がある。長い人生、その中の二年、大川塾はどんな役割を果たしたでしょうか。「卒業生は帰国後どんな生き方をしましたか」と聞かれることもある。彼等は身につい た『正直と親切』を信奉して、悔いない一日々々を送っていました。
太平洋戦争・復興アジアの真価は、二十一世紀が決めること、菲才禿筆をもって、「復員兵の手記」を『**あとがき**』とさせていただきました。
森羅万象・四恩のめぐみに深く感謝し、本書出版にも格別のご指導・ご協力いただいた諸先生、諸先輩に厚く御礼申し上げます。
この大戦で亡くなられた多くの兵士市民の方々のご冥福をお祈り申し上げます。

平成二十六年　七月　三十一日

山本哲朗

<筆者紹介>

山本　哲朗

1935年　長野県諏訪中学校4年修了
1940年　満鉄東亜経済調査局付属研究所卒業
1941年　タイ国バンコク赴任
　　南方総軍光機関
　　（シンガポール、ラングーン勤務）
1946年　復員
1983年　日瀝化学工業（株）常務取締役退職
　　（社）日本カンボジア協会常務理事
　　駐日カンボジア王国大使館特別補佐官
　　池田20世紀美術館役員（現）
著者　コーランの世界

「大川塾における　大川周明訓話集」

平成二十六年七月三十一日　第一刷発行　定価（本体二〇〇〇円＋税）

著者　山本哲朗

発行所　揺籃社
〒一九二―〇六五六　東京都八王子市追分町一〇―四―一〇一
電話　〇四二―六二〇―二六二六
URL　http://www.simizukobo.com/

印刷　株式会社　興栄社

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

ISBN 978-4-89708-343-8